

カ若シ候補ヲ辞退セントセハ之ヲ是認スヘシ  
コノ事ニ付キ巴ニ各商ヲ Leopold = 送  
リソノ意見ヲ向ヒ今將ニソノ答ニ未ルヲ待テ  
リトスヘリ。コノ商ニ巴里ニ於テハ普王カ吉  
ヲ左右ニ托シテ戦争ノ準備ヲナサントスルモ  
ノニシテ人心激昂セリ。コノ反響トシテ秋乙  
ニ於テモ人心仏國ニ對シテ激昂ニアリ、溫和  
ナル態度ヲ極メリ。

歐洲ノ諸國ハ概シテ Leopold ノ「スベ  
イン」王ノ候補カ秘案ニ計劃サレタル事ヲ不可  
ナリトシ英埃兩政府ハ普國政府ト談判ニ又英  
埃伊ノ諸政府ハ「スベイン」政府トモ談判セ  
リ。「ナポレオン」ニ在リ身モ「スベイン」  
ニ於テ何人ノ談判ヲ行ヘリ。

七月十日 Leopold ノ父 Anton  
カ國際ノ會議ヲ恐ルル、理由ニ基キ Leo-  
pold ノタメニ其ノ候補ヲ辞スル旨ヲ發表  
セリ。之ニ依リテ仏國ノ「スベイン」王  
位ニ干スル外交ノ主要ナル同僚ハ連セラレタ  
ルモノナルカ激論ハ布政黨 (Bonapar-  
tist) ハ之ヲ以テ稱尺セス。道義ナル新聞  
紙ノ所説ニ動カサル、巴里市民ノ激昂モ甚ク  
シク議會ニ於テ將來ノ担保ヲ得ルヤ否ヤ、質  
問提議サレタリ。且ツ政府部内ノ一部ノ人士

レ Leopold ノ候補カ仏國政府ノ圖策ニ  
以ツル莫ク重要視セリ。コノ一カヲ「ナポレ  
オン」ニ在リ外相ノ Gramont = 命ニテ  
Leopold ノ辞退ヲ硬突ナラシムルタメ  
ニ普王カ再ヒコノ種ノ候補ヲ是認セナルコト  
ヲ約センコトヲ求メシメタリ。普國王ハ七月  
十三日午前、途上(散歩中)ノ謁見ニ於テ  
Beneditti = 特クルニ Leopold  
ノ辞退ヲ明クニ是認スヘキモノ、以上ノコト  
即チ將來ノ為等ノコトハナシ能ハサルコトヲ  
以テセリ。

コノ際巴里駐在ノ普國大使 Werther ヨ  
リ普國王ニ先テ電報アリ。ソノ中ニ次ニ述  
ルカ如キ事實ノ報道アリシタメ普國王ハ憤ル  
所アリキ。即チ仏國ノ外務大臣 Duc de  
Gramont カ普國ノ大使ニ來ムルニ普國  
王ノ「ナポレオン」ニ在リ對スル一ノ親啓ヲ  
送りテ之ニヨリテ普王カ Leopold  
「スベイン」王位ヲ絶クントスルヲ許スニ當  
リ仏國民ノ利害スハ威嚇ニ危害ヲ加フルノ意  
ナカリシヲ明言シ Leopold ノ候補辞退  
ニ參加シ普仏二國ノ同ニ生ミタル誤解ノ原因  
カ爾今全クソノ跡ヲ收ムルコトヲ希望スル言  
ヲ發表スルコトヲ以テセル事實ニナリ。



十三日、午後 Beneditti、謁見ヲ求メ  
シニ對シ普國王ハ侍從武官ヲテ彼ニ告ケシ  
ムルニ候御辭退、確報ヲ得タルコトヲ以テシ  
テ而シテコノ事件ニテシテ最早云フハナキ  
ノ故ヲ以テ謁見ノ要求ヲ拒絕セリ。

十四日普國王カ Ems、温泉場ヲ去リ  
テ柏林ニ帰ラントスル際ニ停車場ニ於テ Be-  
nedittiニ謁見ヲ賜ヒ Beneditti  
ノ將來ノ担保ニ付テ請フ所アルヲ最早何  
事モ告ク事ナク今後ノ商議ハ政府ニ依リテ行  
ハルヘシト告ケリ。

然ルニ七月ノ十三日ニ普國カ電報ヲ以テ  
Beneditti、謁見ノ請求ヲ拒メル事初  
テ「ビスマルク」ニ報シ且ツ之ヲ公表フ評ス  
ヤ蘭歐ノ口実ヲ得ルニ熱心ニシテ anton  
ノ Leopoldニ代リテ辭退セニア憤リ告  
レル「ビスマルク」ノ参謀、「モルトケ」及ヒ  
陸相 Rooseトノ會食ノ席上王ノ電報ニ接  
シ其ノ電報中ノ字句ヲ削除シソノ簡單ニシテ  
前後ノ事情不明ナルカタノニ Beneditti  
カ普國王ニ内ヒ不当ノ要求ヲナシテク威嚇ヲ  
保テテ侍從武官ヲシテ Beneditti、謁見  
ノ要求ヲ拒絕スルコトヲ傳ヘシメ其國ノ大侯  
ヲ凌辱ヲ蒙ルルカ如ク説マル、形ノナシテ之

ヲ隨同ノ駐劄ノ故乙大侯館ニ通知シ且ツ之ヲ  
新聞紙ニ公ニセリ。之ハ同時ニ俄ハ西國民ノ  
感情ヲ激セシメント欲セリ。

其國ニ於テハ普國王ノ將來ノ約束ニテスル  
要求ノ拒絕及ヒ「ビスマルク」ノ電報ノ發表  
ノニツノ影響トシテ人心（大侯ハ君主ト同シ  
ク取扱ハレルニテラス。大侯カ謁見ヲ請求ス  
レハ先方ノ君主ハ出テ之ニ會ハサルヘクラス  
トスルハ大侯ノ資格ヲ誤解セルモノナリ。之  
ヲ誤解ニテハ人ハ大イニ憤レリ）ノ激昂甚ク  
シク七月十四日ノ閣議ニ於テ此國大侯ノ謁見  
ノ請求拒絕ノ電報ノ影響ニヨリ勅員ヲ決セリ。  
然ルニ一旦勅員ノ命ヲ以テ後列國會議ニ依  
リ戰爭ヲ避ケントセリ。ソノ実行シ難キヲ思  
フニ及ヒ更ニ閣議ヲ開キテ勅員ヲ維持シ翌十  
五日ノ閣議ニテ宣戰ヲナスニ決セリ。同日此  
議會ノ委員會ニ於テ陸軍ノ準備ノ整ハルヲ説  
キ外相ハ埃伊同盟ノ依頼ニ得ヘキ如キ語氣ヲ  
現セリ。

コ、ニ於テ此國議會ハ普國王カ大侯ノ謁見  
ヲ拒ミ之ヲ請外國ニ通知セルコトヲ以テ其國  
ノ名譽ヲ傷セリトシ之ヲ理由トシテ軍事費五  
千萬「フラン」ヲ可決シ七月十五日俄乙ニ對  
シテ宣戰セリ。同日普國王カ勅員ヲ命セリ



仏國カ普國王ノ将来ノ約束ニテスル要求ヲナ  
シ且ツ英露ノ兩帝ノ提議及ヒ露國ノ列國會議  
開催ノ提議ヲ遂ケシヨリ仏國ハ戰ヲ好ムノ責  
任ヲ負ノ至レリ

當時秘乙(独人ハ *Beneditti* カ真ニ不  
当ノ要求ヲナセルモノト信シ大ニ憤レリ)ハ  
戰備整ヘルモ仏國ニ於テハ實際ニ於テ戰備整  
ハサリヤ。且ツ急遽ノ軍艦ノタメニ仏國ノ同  
盟ヲ求ムルノ外交ニ頓坐スルニ至レリ。然シ  
テ仏國カ将来ノ約束ニテスル要求ヲ普國ニ對  
シテナシ且ツ英露ノ平和的解決ノ決定ヲ曉ク  
スニテ先ツ軍事費ノ可決ヲナセルヨリ秘乙全  
國民ノ激憤心ヲ喚起シ列國ニ戰爭ノ当初ニ於  
テハ仏國ニ對シテ同情ヲ表セルニ至リ英國モ  
仏國ノ企圖ニ付テ疑ヲ抱クニ至レリ。且ツ

「ビスマルク」カ普國戰爭ノ際ニ白耳義ニ付  
テ「ナポレオン」ニ對シテナセル代償ノ談判ニ  
テスル文辭ヲ巧ニ取捨シテ七月ニ十五日ノ  
*London Times*ニヨリ去ニ公ニセル  
ヨリ白耳義ニ利害干渉ヲ有スルコト深キ英國  
人ハ益々仏國ニ對シテ猜疑ノ念ヲ抱キ英政府  
モ白耳義ニテシテ之ヲ中立ヲ尊重スルノ條約  
ヲ締フコトヲ兩文戰國ニ要求スルニ至レリ  
亦右英國ハ戰爭ノ範圍ヲ限局ニ自ラ戰爭ニテ

係セサルノ政策ヲ良ヘリ。

「ロシヤ」ハソノ王室當時普國ノ王室ト親  
善ナルノミナラス東方向題ニ比較的無頓着ナ  
ル普國ヲ利用シテ巴里條約改正ノ宿志ヲ達セ  
ントスルヲ以テ埃國ニシテ戰爭ニ加ハラハ  
「ロシヤ」ハソノ中立ノ態度ヲ抱棄スヘキノ  
勢ヲ不シテ埃國ヲ牽制セリ。

仏國ハ七月八日ノ頃ヨリ埃國ノ伊國ト及ニ  
同盟談判ヲ始メタリ。埃國ハ「ロシヤ」ニ牽制  
ナルヲ以テ仏國ノ勝利ヲ願フニシテ伊國ニ  
亦同盟ニ入ルニアラサレハ敢テ動クナクラン  
ト欲セリ。而シテ伊國ニ於テハ「ローマ」向  
題カ同盟談判ノ障害ヲナセリ。一八七〇年八  
月三日「ローマ」撤兵ヲ仏ヨリ伊國政府ニ告  
グルニ及ヒ伊國ノ民間ニ於テハ先ニ仏國ニ約  
束セル所ノ所謂九月(一八六四年)條約ニ及  
シテ「ローマ」ヲ占領スルノ說盛ニナリキ。埃  
國ハ戰爭ノ準備ヲ整フルノ間露普ノ侵襲ヲ防  
クタメニ中立ノ態度ヲ守ルノ必要ヲ説キ且ツ  
伊國ヲ同盟ニ引入ルノ必要ヲ説キリ。然シ  
「ローマ」問題ノタメニ同盟成ラザリキ。

南紙ニ於テ當時普國ニ對スル不平ノ氣潮ヲ  
居リシク已ニ普國ノ叔カノ下ニ軍事上財政上  
ノ統一略未成立セル上ニテ且ツ仏國ハ一八六



六年ノ「ライン」地方ニ對スル要求ニ依リ南  
独ノ人心ヲ失ヒクルヲ以テ先ノ普同トシテ條約  
ニ基キ二十万ノ南独軍ヲ「アルサス」ノ北方  
ニ於テ皇太子 Frederick William  
ノ下ニ集マレリ。

コハニ於テ仏國ハ己ニ同盟ナクニテ独乙全  
体ヲ敵トスルニ至レリ。

戰鬪開始ノ際「ナポレオン」ニ在リテ先ツ独  
乙ニ進入シテ南独ト普同トヲ離隔セント欲セ  
シカ南独ノ独乙軍ニ軍既ニ集マリ仏國ノ準備  
整ハサルヲ以テ「ナポレオン」ニ在リテ策謀計  
画ヲ改メ七月末ニ於テ Moselle 河ヨリ

「ライン」河ニ至ル國境ヲ防禦シテコノ方面ニ  
前進スル独軍ヲ破ラント欲スリ。

一八七〇年八月六日、Worth ノ戦ニ於  
テ Mac-Mahon ノ軍被レ同日ニ Ba  
zaine 將軍ノ軍ノ先鋒被レテ次テ Metz  
Strasbourg 等ニ至リ要路ヲ奪クノ外「ア  
ルサス、ローレン」ハ普同軍ノ占領スル所ト  
ナレリ。

コハニ於テ埃伊兩國ハ戦争ニ加ハラサルニ  
至リ伊國ハ英國ト協議ニテ八月中旬英國ヲニ  
テ中立聯盟 League of neutrals ヲ提  
議セシメテ聯盟國ハ相互ノ間ニ予メ通知ヲナ

スヨリナクニテ中立ノ態度ヲ抱棄スヘカラサ  
ルコトヲ約束セリ。以テ「ナポレオン」ニ在  
リテ強請ニ依リテ戦争ニ加ハルコトヲ防グント  
ス。英露及ヒ伊ニ至リテ同盟ノ埃國ハ己ニ至リテ  
ガリシク「ロニヤ」ノタメニ奪取セラル。コ  
トヲ以テ口實トナシテ動カサリテ。而シテ強  
國ノ共同調停ノ議ヲ提出シテソノ進退ヲ決ス  
ルノ時期ヲ遲延セントセリ。

コノ際ニ「ナポレオン」ニ在リテ Metz  
アリテ計ニ依リテ所ヲ知ラサリキ。ソノ退却  
ニ次リタル際ニハ独乙乙ニ近ク Metz  
ニ迫レリ。Bazaine ハ退ニ断ホニテソノ精  
兵ヲ以テ Metz  
ニ固マレタリ。「ナポレオ  
ン」ニ在リテ Metz  
ヲ以テ Chalons  
ノ Mac-Mahon  
ノ軍ニ遣セリ。參謀會議  
ハ退イテ巴黎ヲ出ルノ計ヲ可ナリトセシク  
「ナポレオン」ニ在リテ巴黎ニ歸ラハル人心動搖  
ノタメ帝政ノ倒ルヲ知リテ遂ニ北進シテ Me  
tz  
ニ固マレタル Bazaine  
ノ軍ニ加ハラ  
ントニテ決ラサリキ。

遂ニ一八七〇年八月二十九日ヨリ九月一日  
ニ至ル Sedan  
ノ戦ニ於テ敗北シ「ナポ  
レオン」ニ在リテ降服ニテ降虜ノ身トナレリ。  
Sedan  
ノ敗報巴黎ニ至ルヤ巴黎ニ於テ



ル人心動搖甚クシテ主トシテ巴黎、議院、議員ヨリ成レル所、国防政府 (Le gouvernement de la defense nationale) 組織カレテ「ナポレオン」ニ在、紀ハ英、皇子ト共ニ英國ニ逃レタリ。国防政府、外相 *Jule Favre* ハ九月六日ニ各國要制、依テ外交官ニ回章ヲ奉ニ (Circular) ヲ奉シテ罪ヲ「ナポレオン」ニ在ニ帰シ且ツ其間ハ一寸ノ地ヲモホ城塞、一ノ石ヲモ掃クサレハニト宣言セリ。而シテ中又諸國ニ對シテ調停、勞ヲ取ランコトヲ求メタリ (カ、ル宣言ヲナシ、調停ヲ求ムルハ不有セルモノナリ)

英國ハ「ロニヤ」ト協議ニ埃伊ノニ同ニ照会ニテ彼ニ交戦兩國ク英國、提出スヘキ條件ヲ承諾スヘキ見込ナキ、故ニ以テ調停、勞ヲ辭セリ。然ニ英國、開放ニヨリ *Jule Favre* ク調和談判、クノ普同、大本營ニ到着ニテ「ビスマルク」ト会見セリ。

大本營 *Chateau de Ferrières* ニ於ケル九月十九日及ヒ二十日ニ互ル「ビスマルク」ト *Jule Favre* ト、会見ニ於テ *Jule Favre* カ調和條件ヲ定ムルヲ、ニ英國、國民議會ヲ召集スル、目的ヲ以テ休

戦ヲナスコトヲ求メシク「ビスマルク」ハ構和ニハ「アルサス」及ヒ「ローレン」ノ三分ノ一、割讓ヲ要求シ休戦ニハ *Strasbourg* 及ヒ *Faul* 等ノ要地ヲ放棄アシア占領セシメ *Metz* 方面ノ戦闘ヲ絶絶セシムルコトヲ要求セルヲ以テ談判ハ結果ナクシテ終レリ。此間ニ国防政府、タメニ *Jule Favre* ノ行ハルニ決シテ不調ニ終ルキ終リマテ戦争スル (*la guerre outrance*) ニ決意ニテ *Jaul* = 政府、今應フ試フルニ至レリ。幾何ニテナク巴黎、包圍始マレリ。

*Jhiers* ハ国防政府ニ助クシテ歐洲ヲ巡回シテ国防政府ヲ承認セシメ歐洲諸國ノ調停ヲ求メ出末得ヘクハ此間、同盟ヲ求メントセリ。英國ニ於テハ人心漸ク此ノ不幸ニ同情ヲ表スルニ至リシカ英國政府カ此調停ヲナスコトヲ拒絶セリ。

国防政府、承認ニ至リテモ此間ノ國民議會ク先ツ之ヲ承認セニコトヲ待タントセリ。

「ロニヤ」ハ *Jhiers* ノ最モ望ヲ囑セル所ナルカ「ロニヤ」ハ此乙ノ成功ニ對シテ期々、埃伊ノ情ヲ扶マサルニアラサルニ一八五六年ノ巴黎條約改正ヲ列國ヲシテ承認シムルコトニ專ラ着眼ニテ英仏ノ親交ヲ切テントシ



Thiers = 新特スルニ列國ノ干渉ヲ頼マス  
ニテ普同ト直接談判ヲナスヲ以テ「ロシヤ」  
ノ公同ヲ庇護スルノ風ヲ不セリ。蓋シ「ロシヤ」  
ハ直接談判ニ於テ概シテ過分ナル條件ヲ  
提出シ公同ヲモテ承諾スルコトヲ背セサルニ  
際ニ巧ニ調停ヲ入レ之ヲ機会トシテ巴里條約  
改正ノ素志ヲ達セントセルナリ

埃國ニ至リテハ公同ノタメニ調停ヲ入ル  
コトヲ欲セルモ「ロシヤ」ヲ俾リテ勸フコト  
能ハス。且ツThiersハ公同ノ義戰ノ挽回  
ニ難キ形勢ナルコトヲ公言セルヲ以テ埃國ニ  
於テモ何事ヲモ約束スルコトヲ得ナリキ。

伊國ニ至リテハ「セゲン」ノ義戰ノ結果公  
同ニ於テ「ナポレオン」ニ在リテラレクル  
ニ依リテハ一八四四年九月ニ結ヘル九月協約  
及ニテ一八七〇年九月ニ十日議ニ「ローマ」  
ヲ占領スルニ至レリ。而シテ國防政府ハ伊國  
ノ「ローマ」占領ヲ喜ハサルコトヲ公不セル  
ヨリThiersハ伊國ニ於テモ得ル能ハス

Thiersノ生涯ノ結果ハ別ニ公同ノタメニ  
有利ナルモ、ナク「ロシヤ」政府ノ言ニ聽キ  
列國干渉ヲ頼マスニテ概シテ直接談判ヲナ  
サント決スルニ於テ「ロシヤ」ハ直ニ進ニテ  
公同ヲ庇護スルノ意ナク單ニ英仏ノ同ヲ割カ

ト欲セルナリ。

英埃等ノ諸國ニ於テ公同ニ對スル同情盛ニ  
ニ乘不セルニ至リ「ヒスマルク」ハ戰爭  
ヲ長引クニ從ヒ益々干渉ノ果ル候レ多キヲ想  
フヲ私カニ憂ヘタリキ。

然ルニJaulノ分觀ノ外交事務ニ當レル  
Chamulardyハ十月十五日ニ於テThiers  
カ諸國ヲ遊歴シ殊ニ「ロシヤ」ト談判  
ヲ行ハルヲ利用シテ「ロシヤ」俾テ接仕ノ候  
レニ依リテ英同ヲ勸カシ英同ヲシテ先ツ「ロ  
シヤ」ト媾和條件ニ付テ協定ナサニメテ後中立  
諸國ヲ聯合ニテ干渉ヲナサンメントスルノ計  
画ヲ立アタリ。

然ルニ英國政府ハ先ツ公同ヲ以テ巴里ノ契  
約ヲ免レシノ媾和條件ヲ以テキ國民議會ヲ  
召集スルタメニ休戰ヲ得セシムルヲ急務トシ  
普同政府ニ對シテ休戰ヲ許シ且ツソノ條件ヲ滋  
和ニスルコトノ必要ヲ切ニ勸告スルノ事ニ成  
テタリ。

英同ノ急ニ中立聯盟ノ消極的態度ヨリ觀  
テ此ノ事ニ出テタルハ「ロシヤ」カ独リ公同  
ノタメニ盡カスレトキニハ露仏兩國ノ接近ヲ  
致シ英同ノ利益ヲ害セラルコトアルハキヲ  
候レクルニ依レルモ、如シ。



境伊ハ英國ニシテ中立國ヲ聯合シテ調停ヲ  
ナシトセハ之ニ志スルノ形勢ヲ明白ナリト  
然ルニ「ロニヤ」ハ英國ノ外交ノ成功ヲ妨害  
セント欲シ媾和條件ニ付テ中立國間ニ協議ヲ  
ナスコトヲ以テ無益ナリトシ其ノ條件ノ失敗  
國ノ談判ニ依ツテ定ムルコトヲ放任スルコト  
ヲ説ケリ。

Jaul = 於テ Gambetta ハ Loire  
軍ヲ新募シ軍ニ依リ戦争ヲ統轄セントセリ。  
然ルニ Thiers 及チ Chandardy ハ媾  
和説ニ傾ケリ。

然シテ Thiers ハ「ロニヤ」ニ依賴ニテ  
普國トノ直接談判ニヨリ媾和ヲナサント欲シ  
Chandardy ハ主トシテ英國ニ依賴ニテ  
中立國ノ聯合干渉ヲ入レニメント欲セリ。然  
ルニ Thiers ノ説勝テ例ニ「ロニヤ」ニ依  
賴シ英國ヲ疎外スルノ形勢表ハレタリ。英國  
ハ軍機ニ「ロニヤ」ノ私通ヲ疑ハスルノ誠意  
ニキテ確メテ後ニ遂ニ全ク手ヲ引クニ至レリ。  
コトニ至リ英國ト共ニ動カントセル境伊兩國  
ニ共ニ手ヲ引キタリ。

Thiers ハ休戦及ヒ媾和談判ノ準備ノク  
ノ一旦包圍中ノ巴黎ニ入り更ニ「ベルサイユ」  
ノ普國ノ本營ニ至ルノ普國軍ノ守軍隊 (sa-

secondat) ヲ得ント欲セリ。「ビスマ  
ルク」ハ之ヲ快フルニ Metz ノ陥落ヲ待テ且  
ツ蓋ニシテ快フルニ際シテ「ロニヤ」ノ仲  
立トシテ之ヲ快フルニ依ツテコノ機會ヲ利用  
シテ普國ヲ英國ニ依リ割カントセリ。斯クシ  
テ普國ハ遂ニ再び孤立シ普國ト直接談判ヲナ  
スノ外ナシニ至レルナリ。

一八七〇年十月二十七日 Metz = 龍城  
セル Bazaine 將軍ハ糧食不キシタメ十  
七ヲ三ナノ矢ヲ率テ普國軍ニ降レリ。

之ヨリ前「ビスマルク」ハ英國ニアル「ナ  
ポレオン」ニ世皇弟 Eugene ト共ニ矢ス  
ヘキ或ル條件ノ下ニ Metz = アル Bazai-  
ne ノ軍ヲ「ボナパルト」家ノ普國ノ再  
興ノツメニ保存セシメントスルノ風ヲ示シテ  
之ヲ快ヤ曠日滯久遠ニ降服ノ止ムヲ得サルニ  
至ラシメタリ。

Thiers ハ一八七〇年十月三十日巴黎ニ  
入り包圍中ノ各要塞ハ糧食ノ補給ヲ得。又普  
軍ノ占領地ヲ含ム全國ニ於テ國民議會ノ選舉  
ヲ行フノニ條件ヲ以テ休戦ヲ約ス。ハ十月次ニ  
十月三十一日ニ Versailles ノ普國軍ノ  
本營ニ至リ「ビスマルク」ト談判シ十一月  
日ニ休戦ノ議略ヲ決セルニ十月三十日巴黎ニ



然テ市民ノ暴飲起リシノ報達ニテ「ビスマルク」ハ国防政府ノ請ムル和議ハ国民ノ承認スル所トナルノ担保ナク休戦ハ厚ニハノ後帝ヲナスニ便ナルニ止マルノ候レアルヲ理由トシテ糧食供給ヲ拒ムニ至レリ。巴黎政府ハ Thiers = 命ニテ談判ヲ止メ Versailles = 去リテ Tours = 帰ラシメタリ。

Thiersノ行ハル休戦談判ノ破裂セル頃 Gambettaノ編成セル Loire 軍カ一度秋乙軍ヲ破リシコトアリ。 Toursノ分飛ハコノ機会ニ乘シ媾和談判ヲ行フコトヲナサヌニテ Thiersノ媾和説ヲ退ケタリ。

「ロシア」政府ハ黑海中立條約改正ノ宿望ヲ達スルノ時機至レリトシ十月三十一日ヲ以テ一八五六年ノ巴黎條約ノ締結諸國ニ對シ

「ロシア」政府ハ同盟ニ於ケル主權ノ制限ノ與ニ付テ最早巴黎條約ニ拘束セラルノ義務ヲ宣言スルニ至レリ。

英境内ハ之ヲ爭ハントシ「ビスマルク」ハ豫テノ約束アルヲ以テ「ロシア」ノ々々同族スル所アリキ。遂ニ同盟中立ノ條約ニ付キ議スルタメ一八七一年一月巴黎條約締結諸國ノ倫敦會議開カルニ至レリ。

Chandardyハコノ會議ヲ利用ニテ

戰爭ヲ終局セシメントセシク成ラサリキ。當時同盟ニテ建テシノ全權委員ヲ倫敦ニ於テ又ニナラハ得ル所ナキニアラサルニキモ巴黎ノ国防政府ハ如ク躊躇セリ。而シテソノ遂ニ Jules Favreヲ派スルニ決スルヤ「ビスマルク」ハ種々ノ故障ヲ作りテソノ派遣ヲ妨ケンリ。コノニ於テ同盟ハ列國ノ聯合干渉ヲホムルノ事ニノ好機會ヲ失ヒタリ。

一八七一年一月十八日ニ於テ普國王「ウキリアム」カ Versailles 宮殿ニ於テ秋乙帝ノ位ニ即キコノニ於テ秋乙帝同族レリ。ソノ頃巴黎ニ於テハ僅カニ年々月ノ糧ヲ残スノミナリキ。然レモ政府ハソノ月ヲ鼓舞セル民心ノ激昂ニ制セラレテ平和ヲ口ニスルコトヲ憚レリ。然ルニ Jules Favreハ遂ニ一月二十三日國民議會選舉、クモニ全般的休戦 Armistice generalヲ約スルニ全權委任者ヲ得テ二十八日ニ遂ニ三週間ヲ期限トスル休戦成レリ。之ニ依リ巴黎ハ即時ニ秋軍ニ占領サル。コトヲ覓レ糧食ノ供給ヲナスコトヲ得シクソノ周圍ノ要塞ハ凡テ秋軍ノ手ニ陥レリ。

コノ休戦ハ全國ニ亘リシク Belfortノ附近ハ除外サレタリ。コノ除外ハ秋軍カ同盟



ノ東部軍ヲ全滅セシメント欲スルニ依リナリ。本國ノ全權委員ハ巴里以外ノ状態ヲ詳クニセサルヲ以テ休戦ヲ本國ノ全土ニ及ボシ且ツ Berfart 方面ヲ除外スルニ同意セリ。國民議會ノ選舉ハ二月九日ニ行ハレ十日ニ始メ國民議會ヲ Bordeaux 開キ Jules Favre ハ臨時政府ヲ代表シテ政府ヲ國民議會ニ移セリ。二月十七日、會議ニ於テ Thiers が本國共和國ノ行政府 (Chef de pouvoir executif) ノ首長トシテ新政府ヲ組織セリ。英埃伊ハ直チニ新政府ヲ承認シ幾何モナク他ノ諸國ニ之ヲ承認セリ。

Thiers ハ Jules Favre ト共ニ講和ノ談判委員トシテ二月十一日ニ Versailles へ赴ケリ。當時本國ハ独逸ノ侵襲ヲ以テ制スレテ強ク己ノ主張ヲ貫ク能ハサルノ境遇ニアリキ。本國ノ Berfart ノ市民カヨク防ケルニ欲スルニ其ノ戰界上ノ要地ナルヲ以テ之ヲ収メニトシ本國ノ全權ヲ強ク争フヲ之ヲ欲ハカリキ。然レニ本國ノ全權ハ Berfart へ代ヘテ独逸ノ巴里ノ入市ヲ諾セリ。Thiers ハ又獨逸ノ要求額六十億「フラン」ノ内ヨリ十億ヲ減セシメタリ。二月二十六日ニ議定和約 Versailles へ講

和サレタリ。コノ條約ニヨリ本國ハ「アルプス」ノ全部及ヒ「ローレン」ノ州ノ大部分ヲ割讓シ五十億「フラン」ノ償金ヲ出シ且チ條約履行ノ担保トシテ土地ヲ占領スルコトヲ約セリ。又別約ニヨリ独逸カ三月一日ヨリ巴里ニ入ルコトヲ約束シ同日ニ政府カ巴里ニ入ラントセルニ三月一日 Bordeaux ノ國民議會カ已ニ議定和約ノ批准ヲ終ヘタルヲ以テ独逸軍ノ一部ハ巴里ニ入レルモ皇帝ハ入市 (Triumphant entry) ヲナカスニテ止マリタリ。三月三日批准交換 (Exchange of ratification) ヲ了ス

1. 独逸軍巴里ヲ撤退ニテ幾何モナク巴里ニ Communes ノ亂起リテ新政府ハ國民議會ノアル Versailles へ引移ケタリ

Communes ノ暴動ハ議定和約ノ執行及ヒ議定和約ノ締結ニ大ナル妨害ヲナシ三月末日ヨリ開始セル Bruxelles へ議定和約ノ談判カ一旦中止サレシク五月ニ至リ

Frankfort へ於テ談判ヲ行ヒ五月十日 Frankfort へ議定和約ニ調印セリ。議定和約及ヒ議定和約ノ締結ニ付テ第三回ハ第二ト干渉スル所ナク殊ニ「ロシア」ハ先ニ



Thiers = ロ約セル所アリニ拘ハラス  
ニ實際ノ助ヲア英ハス軍 = 「ロニヤ」 帝ヲ  
和條約ヲ覽ニスヘキコトヲ勸告スル答簡ヲ普  
同帝ニ送レルニ止マレリ。 普帝ハ媾和條約ノ  
締結後直チニ「ロニヤ」 帝ニ謝辞ヲ送レリ。

普仏戦争ニ依リ普國ハ南北統一ヲ統一スル  
ノ目的ヲ達シ秋乙ノ領土ヲ占テテ後ニ至ツテ  
所謂世界的政策 (Weltpolitik) ノ所謂  
飽和ノ状態ニアリテ歐洲ノ現状維持ヲ求メタ  
リ。 仏國ニ於テハ此ノ戦争ニヨリ帝政制ヲ  
共和政治トナリ領土ヲ失ヒ債金ヲホヒ歐洲大  
陸ニ於ケル外交上重要ナリシ地位ヲ失墜スル  
ニ至リ秋乙ノ領土ニ「アルサスローレン」 内題  
ヲ生セリ。

普仏戦争ノ同様ノ影響トシテ一八七〇年九  
月二十日伊太利軍カ九月協約ニ違反シテ「ロ  
ーマ」ニ入り「ローマ」教會ハ國家タルノ資  
格ヲ失ヒ伊太利統一ノ事業完成セリ。 ス「ロ  
ニヤ」ハ此ノ戦争ヲ機会トシテ一八七〇年十  
月三十一日ニ黑海中立ニテヌル巴黎條約ノ條  
款ヲ廢棄スルノ宣言ヲ發シ「ロンドン」會議  
ニ於テ一月十八日ニ一國カ陸軍ニ條約ヲ変更  
放棄スル能ハサル國際法上ノ原則ヲ議決セル  
モ三月十三日ニ至リ調印サレタル「ロンド

ニ」條約ニ拘テ「ロニヤ」ハ實際上黒海ノ中  
立ヲ廢止スルノ目的ヲ達スルコトヲ計リ  
但シ土國以外ノ他國ノ軍艦ニ對スル海峽(「ボ  
スボラス」ト「ダーダネルス」)閉鎖ノ原則ハ之ヲ  
維持セリ。

Frankfurt、確然和約締結後仏國政  
府ノ急務トセル所ハ秋乙ノ占領軍ノ撤退ヲ利  
ルコトニアリキ。 而シテ Thiers ハ公債ヲ  
起シテ撤退ノ條件タル債金額ノ支払<sup>準備</sup>早クナ  
シ一八七〇年九月ニ至リ秋乙軍ヲ撤退セシム  
ルノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ。

秋乙ハ普仏戦争後現状維持ヲ求メ仏國ヲ孤  
立セシムルコトヲ計リ埃伊並ニ露國ト接近ヲ  
求メタリ。 當時秋乙ハ外交界ニ於テ大勢力ヲ有  
シタリキ。

然ルニ仏國ノ戦争ノ有形上ノ創傷ヲ癒ヤス  
コトヲ想外ニ早カリシヨリ秋乙ニ於テハ仏國  
ノ復讐ヲ惧レ「ビスマルク」ハ仏國ヲ孤立セ  
シムルタメニカヲ悉セリ。 一八七二年九月ニ  
於ケル東歐三帝國ノ同盟 (Drei-Kaisers-  
bund) 及び後ノ三國同盟 (Dreibund)  
ノ如キハ「ビスマルク」カ主トシテ仏國ヲ孤  
立セシムルノ目的ヲ以テ作レル所ナリ。

「ビスマルク」ハ埃國ノ所謂 Pan-sla-



vision、運動=俄レヲ把キ米東得ハクシハ  
「バルカン」方面=於ケル進取、策=俄ナラ  
シムルメ、中央歐羅巴ノ現状維持「ロシヤ」  
ト妥協セントノ意アル=兼シ一八七二年九月  
上旬奥國帝 Francis Joseph ヲニア  
伯林ヲ訪問セシマス「ビスマルク」ハ「ロシ  
ヤ」帝カ所謂破壞党ヲ根ル、=兼シヲ君主制  
ノ三大國カ相結ヒテ革命党ヲ鎮圧スル、必要  
ヲ説キ「ロシヤ」帝ノ奥意ト同時=伯林=米  
ルコトヲ求メ遂ニ=帝同盟ヲ成立セシムルニ  
至レリ

Pan-Slavism ハ「ロシヤ」ヲ中  
心トスレト統一的一、一帝國ヲ立テントスル  
=アラスニテ俄乙人、東進(Стань на-  
ck Osten) = 対シテ「スラブ」人種カ互  
ニ助テ合ヒテ之ニ=當ラントスルモノナリ。

Pan-Germanism ト性質ヲ異ニス  
當時三國ハ同盟條約ヲ締結セル=アラス。互  
ニ文書ヲ交換コテ三國カ協カニテ第一=歐洲  
ノ現在ノ國境ヲ維持ス。第二=將來東方=於  
テ發生スル難件=対シテ俄カニテ鎮圧スルコ  
ト。第三=諸國ノ君主=危害ヲ加フル、俄レ  
アル革命党ノ運動ヲ鎮圧スルコト。ヲ約束セ  
ルノミナリ。

一八九九世紀ノ初メ=於ケル東歐三國ノ結  
合=類似セルニ三國同ノ結合ハ十九世紀ノ初  
メノ如ク鞏固ナルヲ得ガリキ。奥ハ止ムヲ得  
ス故乙=隨伴セシカ「ロシヤ」ハ精銳ノ兵ヲ  
扶シ完全ナル行動ノ自由ヲ確保セントセリ。  
彼=至リ俄國ニ同同=奥、一八五九年—  
一八六〇年ノ戰爭=於ケル損失=代ヘテ「バル  
カン」半島=於テ過當ナル代償ヲ得ルノ約成  
レリ

一八七五年ノ頃俄乙ノ軍人社会ニハ俄國ノ  
復讐戰爭ノ概先ヲ制スルノ目的ヲ以テ豫防戰  
争(Preventive War)ヲ行ヒテ全ク俄  
國ノ勢カヲ挫カントスルノ計画アリタル如ク  
一八七五年=於テ俄國カ軍隊ノ増加ヲ計ルヤ  
四月ノ頃=於テ危機接近ノ觀アリキ。當時  
「ビスマルク」ハ兩戰ノ決意ヲ有ニクルヤ否  
ヤハ不明ナルモコノ際ニ俄國政府ヲ恫嚇ニテ  
之ヲ以テ長ク攻撃的態度ニ出ツルコトヲ断念  
セシメニトセルモノ、如ク俄國カ再ヒ過失ヲ  
行ヒテ戰端ヲ開クコトアラハ「ビスマルク」  
ハ必スニモ之ヲ承ハザリシ如キ有様ナリキ。  
「ビスマルク」ハ此ノ時俄國=諸外國殊ニ  
「ロシヤ」=何ヒテ俄國兩戰ノ際ノ態度ヲ伺  
ハントセルモノ、如シ。



仏国ハ「ロシヤ」ニ依頼シ「ロシヤ」帝ハ  
其ノ伯林通達ノ際ヲ以テ俄帝ニ説ク所アリキ  
英同モ「ビクトリヤ」女王ノ親簡ヲ故ニ帝ニ  
致シテ平和ノ維持ヲ新旨シ當時事ナキヲ得タ  
ルモコノ際ニ露首相 *Gartchakoff* ク列  
國ニアル「ロシヤ」ノ公使ニ對シテ四年ヲ奉ニ  
テ一ニ「ロシヤ」帝ノ普同ニ對スル在位ニヨ  
リ平和ヲ確ムルヲ得タルカ如キ言ヲナシテ之  
ヲ公ニセルコトハ「ビスマルク」ノ感情ヲ害  
シタルコト大ナルモノアリキ。且ツ露ハ此ノ  
事件ニヨリ俄ヲ弱ムルヲ欲セサルヲ承セルヨ  
リ東欧三帝ノ聯合ハ俄ノ依ヲ在位スルノ政策  
ニ便ナラサル事明瞭ニナリ露俄相商レ露俄相  
近ツク形勢比ノ頃ヨリ漸ク熱シ伯林會議以後  
露俄相乘スルニ至ル。

土同ニ於テ一八七五年七月土同ノ暴政近因  
トナリテ先ツ *Herzegovina* ノ地方ニ  
反乱ヲ生シ *Bosnia* ニ蔓延セリ。之等ノ  
地方ノ人民ト同人種。同業ナル「エニテネ  
ガロ」。「セルビヤ」及ヒ「ブルガリヤ」ノ人  
民ハ私クニ反乱ヲ助ケ八月ニ三帝同盟ニ属ス  
ル東欧三帝ノ反乱地方ノ人民ノ要求ヲ承キ之  
ヲ土同政府ニ傳達スルコトヲ提議セリ。然ル  
ニ土同ハ十月二月ニ至リ自ラ改革案ヲ公ニセ

リ東欧三帝ノ改革ノ実行ヲ信スルヲ料スト  
シ埃國ノ *Andrassy* <sup>提議ニ所謂</sup> *Andrassy note*  
ヲ作り英伊仏ノ三國ノ同意ヲ求メタリ。

英同ハ初メ躊躇セルモ遂ニ大體ニ於テ之ヲ  
承認スルニ至リ列國ハ之ヲ土同ニ一八七六年  
一月提出シ之ヲ採用ヲ促セリ

ソノ内容ハ

- 一) 完全ナル宗教上ノ自由
- 二) 租税ノ請願制度ヲ広メ
- 三) 「ボスニア」「ヘルツェゴチナ」ニ洲ノ直  
接税ハ二州ノ用ニ充ツルコト。
- 四) 耶蘇教徒。回教徒ノ同教ノ人負ヨリナル  
改革実施監督委員ヲ設クルコト。
- 五) 農民扶養改善。

土同政府ハ大體ニ於テ之ヲ採用ヲ承認ニ且  
ツ改革実行ニテスル勅令ヲ奉セリ。然ニ土  
同政府ノ改革ニ對スル誠意ヲ明スル事ナキ  
コト明クナル故地方ノ動亂毫モ靜マラス  
益々却ツテ甚クシキヲ加ヘタリ。

英同ハ當時 *Disraeli* (*Beaconsfield*)  
ノ政府ニ當リ「ロシヤ」ク「バルカン」半島  
ニ勢ヲ建シ英同ノ地中海ノ威カヲ動カスニ  
至ラシコトヲ根レテ(印度ニ響ク故)土同ノ  
國境ニテスレ現狀維持ノ主義ヲ採リ。土同ニ



紛争スル=連カ= Herzegovina ノ及乱  
ヲ鎮定スルコトヲ以テ「ロニヤ」ニシテ土  
国ヲ侵シハ之ト戦フコトヲ辞セサル態度ヲ示  
セリ。 奥國ハ土國ノ保全ヲホムルニハ熱心ナ  
ラサルモ「バルカン」ニ於ケル「スラブ」人  
種ノ擾乱カ国内ニ於ケル「スラブ」人種ニ対  
スルソノ統治ヲ危クスルコトヲ惧ル、ヲ以テ  
「バルカン」ノ擾乱ノ放マシムコトヲ惧レ又俄  
日機会ヲ得テ南東ノ方面ニソノ勢力ヲ伸テ  
トスルノ野望アルヲ以テ土国内ノ「スラブ」  
人種ノ国民的独立ヲ遂ケルヲ喜ハカリキ。 其  
ノ故ニ暫ク土國々境ニ干スル現状維持、主義  
ヲ採ラントセリ。 「ロニヤ」ノ人民ハ同宗教  
同人種ノ人民、運動ニ対シテ同情ヲ表シ且ツ  
「ロニヤ」政府ニ於テモ「バルカン」半島ニ  
ソノ勢力ヲ伸テトスルヲ以テ「スラブ」人  
種ノ人民ノ及乱ヲ利用セント欲セリ。 故ニハ  
当時尙其ノ統一ヲ鞏固ニスルヲ計ルニ専ラシ  
テ東方問題ニ対シテ冷淡ナリキ。 故ニエニテ  
ニア他國カ軋然スルヲ見テ却ツテ喜ビ居タリ。  
又三帝同盟ノ維持ヲ苦スルニ至ラサル限リハ  
「ロニヤ」ノ奥國カ利害ヲ異ニセルコトモ必ス  
シモ憂フル所ニアラサリキ。 而シテ「ロニヤ」  
カ東方ノ事ニ固カク費スニ至レルコトハ固ヨ

リソノ喜ヲ所ナリ。 其ノ故ニハ擾乱ヲ喜  
ヒタリキ。 从同ハ俄歐ノ余國カ回復ニ専念ニ  
外交上ノ努力ヲ怠ラサル、ミナラス「ロニヤ」  
ニ対シテ豫防戰中事件ニ付テ思義アルヲ以テ  
之ニ及スルヲ憚リタリ。

一八七六年ノ春又此ハムノ形勢ナリ「ロニ  
ヤ」ハ奥國ニ提議スルニ列國カ新クナル改革  
案ヲ土國ニ提出シテ而シテ土國政府カ自ラ之  
ヲ実行セサルハ列國カ之ヲ發行セントスル  
旨ヲ通知セント欲セリ。 故ニハ此ノ提議ニ賛  
成セル如クモ奥國ハ發行ヲ欲セスニテ之ヲ拒  
絶セリ。

然ルニ五月六日ニ至リ Salonika =  
於テ土國人ノ暴動アリテ俄ニ領事館ヲ燒ケレ  
タリ。 コレニ於テ三帝同盟ノ首相カ柏林ニ會  
シテ是ニ Bosnia 及 Herzegovina =  
干シテ數多ノ兵ニ於テ及乱地方ノ人民ノ要求  
ヲ採ルセル所謂柏林覚悟ヲ作り土國ヲシテ及  
乱地方ノ人民ニ対シテ休戦ヲ與ヘシメントセ  
リ。 ソノ覚悟中ニ土國ニ對スル要求事項ヲ挙  
ゲニケ月内ニ目的ヲ達スル能ハスニテ土國政  
府ヲ強割スルノ必要アラハ外交手段ニ次クニ  
肩力ナル手段ヲ以テナスヘントスヘリ。 而シ  
テ英仏伊ノ同意ヲ求メタリ。 英國ハソノ土國



ニ対スル列國ノ干渉ヲ拒ン遂ニ「ロシヤ」ノ  
野心ヲ助クルニ至ルヘキヲ悉レテ故リソノ覺  
悟ニ對シテ不同意ヲ唱ヘタリ。爾來ノ五強國  
ノ軍艦ヲ Salonika ニ派スル英國ハ五月  
ニ十四日別ニ艦隊ヲ Besika 灣ニ派遣シ  
テ列國ノ舉動ヲ窺ヘリ。此處ニ於テ一時歐洲  
情勢激シテ柏林覺悟ハ土國ニ提出カレシヲ  
止ミタリ。

然ルニ英國ノ土國ヲ助クルノ態度ヲ不ムル  
トハ偶々土國ノ「ブルガリヤ」人虐殺ヲ諒  
解スルノ原因トナレリ。「セルビヤ」及ビ  
「モンテネグロ」ハ六月末ヨリ七月始メニ至  
ル間ニ於テ公然土國ニ對シテ戦端ヲ開クニ至レ  
リ。之レハ民族紛争ニ由ツ「ロシヤ」ノ助カヲ  
予想スルニ依ルナリ。

英國ニ於テ Gladstone ノ Disraeli  
ノ土國援助ノ政策ヲ非難シ之ヲ以テ「ハ  
ルケン」作島ニ於ケル不幸ナル耶教民ニ災  
スルモノトセリ。自由党ハ土國ニ對スル干渉  
政策ヲ主張シ保守党ノ政府ハ輿論ニ倒レラレ  
テ一時土國ニ對シテ改革案ヲ提出スルニ至リ  
ニテ土國政府ハ單ニ改革ノ空約ヲナシテ一時  
ヲ糊塗セシメタリ。コノニ於テ露帝ハ俄國ノ  
土國側ニ傾クコトヲ妨テント欲シ「ビスマル

ク」ノス、メニヨリ一八七六年七月十六日  
Reichstaats ニ於テ埃國帝ト相會合  
シテ、後一八七七年一月十五日「ブダペスト」  
ノ條約成リ「ロシヤ」カ英カヲ以テ土國ニ干  
渉スル場合ニ於テ埃國ハ一矢ノ條件ノ下ニ  
「ロシヤ」ニ對シテ好意的中立ヲ守ルコトヲ  
約シ且ツ此ノ際「ロシヤ」カ「ブルガリヤ」  
ヲ救ヒセシメテソノ保護ノ下ニ立クニムルヤ  
ニハ埃國ハ Bosnia 及ヒ Herzego  
vina ヲ占領スヘキコトヲ約束セリ。而  
シテ「ロシヤ」帝ハ「ビスマルク」カ東方向  
顧ハルニ對シテ利害ニ對スル所ナシト公言セルヲ  
以テ俄乙カ中立ヲ守ルヘク昔々戰爭ノ際ノ報  
酬トシテ「ロシヤ」ノタメニ討ルヘキコトヲ  
信シタリ。

英國ハ露埃ノ提携ヲ見テ俄クニ時局ヲ變結  
セシメント欲シ列強ト協議シ土國ヲシテ「セ  
ルビヤ」及ヒ「モンテネグロ」ト和議ヲナサ  
シメントシ先ツ休戦ヲナサシムルニ及カセシ  
ク土國政府ハ列強ノ意見ノ一致ヲ得サル状態  
ヲ見テ疲弱ニ英ノ所ヲ頼クサリキ。「ロ  
シヤ」ハ「セルビヤ」及ヒ「モンテネグロ」  
ノ形勢ノ危キヲ見テ遂ニ十月三十日單独ヲ以  
テ四十八時間ヲ期限トシテ最後通牒ヲ土國政



新=送り「セルビア」「モンテネグロ」=対  
シニ十月ノ休戦ヲ請スコトヲ要求セリ。土国  
政府ハ己ムヲ得ス休戦=同意ヲナセリ。(十一  
月=日)

然ル=英國ハ露帝ノ心事ヲ疑ヒ自由党ノ土  
国干渉政策ハソノ聲ヲ浴シ、Disraeliハ  
Guild Hallノ演説=於テ東方問題=付  
キ戦争將=起ルノ惧レアリト公言セリ。

之ヨリ先英政府ハ「ロシヤ」=対シソノ對  
土国ノ行為=付キ説明ヲ求メタリ。「ロシヤ」  
ハ英國=對シテ余用スル=依令矢ヲ起スモ土  
国領内ノ耶蘇教徒ノ困厄ヲ救済スルヲ目的ト  
シ逆リ=征服スルノ目的ナキコトヲ以テセリ。  
英國ハ十一月四日付外文文書=ヨリ列国会議  
ヲ開キ内治改革ノ案ヲ具シテ聯合干渉シ土国  
=試ムル、議ヲ提議シ土国ノ独立及ヒ領土保  
全ヲ以テ會議ノ基礎トナスヘキコトヲ主張セ  
リ。「ロシヤ」ハ十一月十八日ノ公文ヲ以テ  
土国ノ独立及ヒ領土保全ハ人道及ヒ耶蘇教國  
ノ感情ト一般ノ休息トノ要求スル担保=妨ケ  
ナキ限リ=於テ之ヲ認ムヘキモノトナシ又土  
國ハ耶蘇教國=對スル一八五六年ノ約束(巴  
里會議ノ條約)ヲ採スコト能ハカリニ以テ  
歐洲ハソノ履行ヲ確ムル範圍=於テ土国ノ地

位=代ル、権利及ヒ義務ヲ有ストナセシク遂  
=列国会議ヲ開クコト=同意シ會議ハ一八七  
六年十二月二十三日ヨリ開ケタリ。一八七  
七年一月十五日=此ノ會議ノ結果タル改革案  
ヲ土国政府=提出セル=土国政府ハ之=答フ  
ル=將=国内=於テ施行セントスル=院制度  
ノ新憲法ノ利益ヲ以テシ列國ノ突メタル改革  
案ヲ容ル、コトヲ承諾セザリキ。列国会議ハ  
空ニク解散セリ。列國ノ大使ハ土國ノ都ヲ去  
レリ。土國ハ英政府ノ同意=依リ三月一日

「セルビア」ト講和=タリ。然シ「モンテネ  
グロ」トノ講和談判ハ不調=了レリ。  
「ロンドン」議定書(一八七七年)

列國ハ「ロシヤ」ノ主張=依リ更ニ「ロン  
ドン」會議ヲ開キ一八七七年三月三十一日ノ  
「ロンドン」議定書=調印セリ。此ノ議定書  
=於テ諸強國ハ土國ノ約束セル改革ノ実行ヲ  
監視スヘキコトヲ約束シ若シ耶蘇教民ノ運命=  
ニテ改良セフル、コトナクハ諸強國ハ耶蘇  
教民ノ幸福ト一般ノ平和ノ利益トヲ確ムル=  
最モ適當ナリト思惟スル方法ヲ共同=考慮ス  
ルコトヲ担保スルコトヲ言明セリ。此ノ議定  
書ハ四月三日土國=提出サレタリ。英國ハ露  
土相互ノ戰備撤去セラレサルハ議定書ヲ氣



效 = 帰シタルモノト認ムル宣言答ヲ附加セリ  
土國カ秋立同トシテ他國ノ監視ヲ受クル術ハ  
サル或議定答ヲ受クルコトヲ拒ミ且ツコノ議  
定答ト共ニ「ロシヤ」カ単独ニ戦備撤去ニ十  
スル談判ヲ拒絶スルヤ四月十三日「ロシヤ」  
ハ全同ニ動員ノ命令ヲ發セリ 四月二十四日  
「ロシヤ」帝ハ宣戰ノ詔勅ヲ發セリ

露土戦争

「ロシヤ」ハコ、ニ至リ歐洲列國ノ要求ヲ  
厭レサル土國ヲ排斥スル、名義ヲ得タリ。之  
ヨリ前四月十六日「ロシヤ」ハ「ルーマニヤ」  
ト同盟條約ヲ結ビ「ロシヤ」單ノ「ルーマニ  
ヤ」領土内ヲ通過スルヲ認メシメタリ

然レ埃及及ヒハ中立ノ地位ニ立テ英國モ  
「ロシヤ」ノ行為ニ對スル抽象的ノ抗議ヲナ  
セルカ五月六日ニ英國ノ實利ノ維持ヲ條件ト  
シテ中立ヲナスコトヲ言明セリ

所謂實利ニ干スル條件トハ

第一ニ埃及及ヒ「スエズ」運河ニ作戦行為ヲ  
及ボサ、ルコト

第二ニ Constantinople、領有者ヲ變  
セサルコト

第三ニ海峽ニ干スル歐洲的ノ規則ニ著シキ變  
更ヲ加ヘサルコト

第四ニ「バルシヤ」海ニ於ケル英國ノ利益ヲ  
尊重スルコト  
等ニナリ

「ロシヤ」ハ大体ニ於テ之ニ對シ満足ナル  
答ヲ與ヘタリシモ「ロシヤ」政府ハ自國民ノ  
輿論ニ従ケサル、ヲ以テ土國ノ「ヤソ」教民  
ヲ虐殺セサルノ担保ヲ得ルマテハ矢ヲ止ムル  
ヲタハサルコトヲ附言セリ（五月二十日「ゴ  
ルチヤコフ」ノ答面）

露軍六月二十一日 Danube 河ヲ越ヘタ  
ルカ Osman Pasha ハ Plevne ノ  
要地ヲ守リ「ロシヤ」矢ヲ支フルコト五月  
十二月十日ニ於テ Plevne 遂ニ陥ルヤ露  
軍ハ Adrianople へ進ミタリ。此ノ  
際「セルビヤ」再々宣戰セリ

十二月十三日英政府ハ「ロシヤ」カ「コン  
スタンチノーブル」ノ取得ハ「ロシヤ」ノ希  
望及ヒ意志ノ外ニアリト明言セルコトニ「ロ  
シヤ」政府ノ注意ヲ伏シ「コンスタンチノー  
ブル」カ軍事上ノ目的、名トシテ占領サル  
ルコトナクハキヲ熱望スルコトヲ述ヘタリ

然ルニ十二月十六日附ノ「ゴルチヤコフ」  
ノ答ハ「ロシヤ」ハ英戰國ノ有スル充分ノ行  
動ハ權利ヲ有スルトナシ「コンスタンチノー



ブルノ占領ニヨリ免クサルハキ英ノ利益ヲ一  
層明白ニ指示セシコトヲ来メタリ

露ハ一月十六日ノ條約ニ於テ英ノ *Gallipoli*  
ニ上陸シスハ土軍カ「コンスタン  
ノブル」ニ集合スルカ如キコトナクシテ「コ  
ンスタンノブル」ヲ占領スルコトナシト  
述ブルニ至レリ

土国政府ハ *Plevne* ノ陥落後巴里條約  
ノ締結諸國ニ調停ヲ乞ヒタリ。然レハ「ロシ  
ヤ」ニ對シテ干渉スルヲ好マサルヲ以テ之ヲ  
拒絶シ列國ノ調停ヲサリシカ英國カ「ロシ  
ヤ」ク土國ニ對シテ自己ノ欲スル所ヲ要求ス  
ルヲ視レハ一八七八年一月十六日ニ於テ露土間  
ニ結ハルヘキ條約ニシテ一八五六年及ヒ一八  
七一年ノ國際條約ニ影響ヲ及ホスモノハソノ  
國際條約締結國ノ同意ヲ得サレハ有效ナルコ  
トヲ得サルヲ「ロシヤ」ニ警告セリ。而シテ  
土國亦、要求ニ依リ英國ハ調停ヲ欲シテ  
「ロシヤ」ハ土國カ直接ニ「ロシヤ」ト休戦  
及ヒ媾和ノ談判ヲナスヘキコトヲ主張セリ  
*Adrianople* 休戦條約

*Adrianople* = ヌケル露土間ノ直接  
談判ニヨリ一月三十一日ニ休戦規約ハ調印セ  
レタリ。名ハ休戦規約ナルモソノ中ニ媾和條

件ノ大綱ヲ定メタリ

「アドリアノブル」ノ休戦規約調印後ニ  
於テ埃國ハ露國ク過大ナル利益ヲ収メトス  
ルヲ見。且ツ一八七七年一月ノ條約ヲ遵守ス  
ルノ意ナキヲ察シ一、宣言ヲナシ兩國戰國ノ  
決定スル所ニシテ從來存セル條約ニ変更ヲ加  
ヘ或ハ歐洲全体ノ利益ヲ害シ或ハ埃國ノ特有  
ノ利益ヲ害スヘキモ。ハ凡テ無効ト看做スヘ  
シト宣言シ一切ノ紛議ヲ裁定スルクタクニ  
*Vienna* = 會議ヲ開クコトヲ説キ軍隊ヲ  
*Danube* 及ヒ *Illyria* 地方ニ集中セ  
リ。英國ニ於テハ「ロシヤ」ニ對スル主戰論  
盛ンニシテ政府ハ英國臣民ノ保護ヲ名トシテ  
軍艦ヲ「コンスタンノブル」附近ニ送レ  
リ

「サン・ステファン」條約

三月三日ニ「サン・ステファン」ニ於テ露土間  
ニ予定和約ヲ行ハレタリ。名ハ予定和約ナル  
モソノ規定スル所ハ確實和約ニ同シナリ。「ロ  
シヤ」ハ比、和約ニ依リ十四億一千万「ルー  
ブル」ノ償金ヲ得ヘシトシ而シテ土帝ノ希望ニ  
從ヒテ中ノ十一億「ルーブル」ニ代ルニ土  
地ノ割讓ヲ以テスルコトニ同意ストセリ（ア  
ルノニアノ一部）



歐洲 = 於テハ Dobroudja 州、亞細亞  
= 於テハ Batum, Ardahan, Kars  
ヲ含ム地方ヲ得ヘシトナセリ。又「モンテネ  
グロ」ノ独立ヲ公認セシメソ、領土ヲ四倍ニ  
シ「セルビア」及ヒ「ルーマニア」ノ独立ヲ  
公認シシメソ、領土ヲ増加シ殊ニ歐洲土國、  
大半ヲ占ムヘキ「ブルガリア」ナル自治、公  
同ヲ建設シ土國ノ終國タル名ヲ存シテ突ハ

「ロシヤ」ノ保護國ヲラシメントセリ。歐洲  
= 於ケル土國ノ領地ハソノ相互ノ間ニ陸地上  
ノ連絡ヲ欠ケル Albania, Bosnia,  
Roumania ノ三トナサントセリ。斯ク  
ノ如キ「バルカン」半島ノ收斂ノ變更ハ「バ  
ルカン」半島ニ於ケル「ブルガリア」人以外  
ノ人民ノ不游トスル所ナルノミナラス「ロシ  
ヤ」ノ半島ニ於ケル勢力ヲ増シ、タメニ英國  
ノ印度ニ對スル地位ヲ危クシ、俄ノ「スラヴ」  
人種ノ住スル領地ニ對スル統治ヲ危クスルモ  
ノニテ英俄兩國ハ之ニ故障ヲ入レ、俄國ノ提  
議ニ基キ會議ヲ柏林ニ用クコトナセリ。

英國ハ「サン・スタハノ」條約ノ全部ヲ會  
議ニ上センコトヲ要求シ「ロシヤ」ハ之ニ反  
對シ「ロシヤ」ノ單ニ露土兩國ニテスルノミ  
ト認ムヘキコトハ會議ニ上スコトヲ要セスト

ナセリ。然ルニ俄國ノミナラス俄乙ニ至ル  
マテ英國ノ主張ニ傾キ英國ニ強硬ノ態度ヲ持  
セルヨリ「ロシヤ」ハ先ツ英國ト協議ヲ開キ  
五月三十日ニ英露間ニ大條ノ條約成リテ後伯  
林會議開カレタリ。會議ノ開ケル、前六月四  
日英國ハ別ニ土國ト密約ヲ結ビ「ロシヤ」ク若  
シ「アジアトルコ」ヲ侵スルハ英ハソノ矢カ  
ヲ以テ土國ノハ「アジア」ヲ防禦スヘントナ  
シ此ノ約束ヲ履行スルニ必要ナル準備ヲナス  
ノ口實ノ下ニ「ロシヤ」ヲ新クニ得タル土地  
ヲ返還スルマテ Cyprus 島ヲ英國ノ占領  
及ヒ行政ノ下ニオクコトヲ定メタリ（主權ハ  
土耳其ニ屬ス）。

英ハ「アジアトルコ」ニ於ケル「ヤソ」教徒  
及ヒ其ノ他ノ「トルコ」臣民ニ對シテ必要ナ  
ル改革ヲ行フヘキコトヲ約セシメタリ。七月  
七日ニ到リテ諸國ノ全權ニ通知セリ。六月  
十三日ヨリ七月十三日ニ亘ル柏林會議ニ於テ  
大英國及ヒ土國ノ代表者ヲ集リテ「ギリシヤ」  
及ヒ「ルーマニア」ミソノ干渉スル問題ニ付  
キソノ代表者ヲ以テ會議ニ出席セシメテ意見  
ヲ述ヘシムルコトヲ得タリ。會議ニ於テ「ロ  
シヤ」ノ主張ハ概ネ諸國ノ反對スル所トナリ  
殊ニ露英ノ間ニ往々爭起レリ。「ビスマーク」



ハ爾時有ノ地位ニ立ツテ談判、破裂ヲ防キ自  
ラ稱シテ正直ナル仲買人 (der ehrliche  
makler) ノ役ヲトシテス。七月  
十三日伯林條約調印セラレタリ。

伯林條約ノ要項次ノ如シ。

(1) 「ブルグリア」ノ境界ハ「サン、ステハ  
」條約ノ定ムル所ノ南ニ分ノ一以内ニ縮  
ハシ「バルカン」山脈ヲ以テシ、南ノ境ト  
セリ。而シテ「ブルガリヤ」ヲ自治ノ権利  
ヲ有シ年々貢金ヲ土國ニ納ムル所、土國ノ  
列國トナシ人民ヨリ選舉シ土國政府ノ認可ト  
列國ノ承認トヲ經テ定マル君主ヲ戴カシメ  
土國ノ民衆ヲ有セシメタリ。而シテ信教ノ  
自由ヲ有セシメタリ。

(2) 南「ブルグリア」即チ東「ルメリア」  
ハ土帝ノ統治、下ニ行政上ノ自治ヲ享有セ  
シメ土國政府ノ任命シ列國ノ承認トヲ經テ  
ル所、任期五年ノ耶蘇欽使ノ和事ヲオキタ  
リ。土國ノ常備兵ハコノ州内ニ駐屯スルコ  
トヲ許サレサルモ和事ハ内外ノ危険ヲ防ク  
ニ必要ナル場合ニハ土國兵ヲ招致スルヲ解  
ルモノトナセタリ。

伯林條約ノ定ムル「ブルグリア」ト東  
「ルメリア」トノ分離ハ遂ニ維持セラレズ

一八八五年ニ至リ事突上ノ併合ノ議ヲ開キ  
一八八八年「ブルグリア」紙立ノ時ニ至  
リ名義上ニ於テ併合ナレリ。

(3) 伯林條約批准後九ヶ月ヲ越エサル期間

「ロニア」ノ要領ハ「ブルグリア」ノ政府  
ヲ指揮スルヲ得。條約批准後九ヶ月間五  
千人ヲ越エサル「ロニア」軍ハ「ブルグリ  
ヤ」東「ルメリア」ヲ一時的ニ占領ス。

(4) 「モンテネグロ」「セルビア」「ルーマニア」  
ノ領土ニ増加変更ヲ行ヒ之等ノ國ハ成立ヲ  
承認サレタリ。但シ信教ニヨリテ公私ノ政  
扱、是等ヲ立テス又何人ニモ信教上ノ自由  
ヲ以テフルコトヲ條件トシテ承認セリ。(今回  
ノ大戦ノ結果「モンテネグロ」ハ「セルビ  
ヤ」ニ併合サル)

(5) Bosnia 及ヒ Herzegovina ハ  
埃國ノ行政及ヒ占領、下ニ置カレタリ。埃  
國ハ Novi Bazar 地方ニ於テ守備兵  
ヲ置クコトヲ認ラレタリ。又ソノ州ニ軍  
事上ノ通商上ノ通路ヲ有スヘキ権利ヲ擔保  
サレタリ。

伯林條約ノ條款中ニハソノ外ニ「ダニュー  
ブ」川ノ航行ノ自由ヲ担保スルタメニ西岸ノ  
城塞ノ破壊、一八五六年ノ巴黎會議條約并ニ



黒海中立条約並ニ海峽閉鎖ニ于スルハ七一  
年ノ「ロンドン」條約ノ確保、土國ノ宗教ノ  
自由ニ于スル約束並ニ Crete 島歐洲土國及  
ヒ「アルメニア」人ノ居住スル地方ニ于スル  
改革ノ約束、臣細更ニ於テ土地ノ割讓、「チ  
リシヤ」土耳其ノ境界改正ノ列國ノ調停等ニ  
于スルモノアリキ。

「ロシヤ」ハ伯林條約ニ依リ Bessar-  
bia 及ヒ Armenia ノ一部ノ取得ヲ認  
メラレ一時「ブルガリア」ニ對シテ保護者タ  
ルノ實権ヲ收メ又 San Stefano 條約  
ノ突ムル所ノ償金ヲ土國ヲシテ支払ハシムル  
ニ至レルモ該條約ニ依ル利益ハ伯林會議ニ於  
テ著シク減セラレタリ。伯林會議ノ「ロシヤ」  
ノ代表者ナル「ゴルチャコフ」ハソノ會議ヲ  
以テソノ生涯中ノ最モ暗黒ナル「ページ」ナ  
リト云ヘリ。「ロシヤ」ハ秋乙ノ無條件的ニ  
自己ノ主張ニ援助ヲ與ヘ己ノ要求ヲ助ケント  
スルヲ希望セルニ「ビスマルク」ハ所謂正直  
ナル仲買人ノ名義、下ニ英境ノ主張ヲ助クル  
ニ傾ケルヨリ「ロシヤ」人ハ秋乙ヲ憤ルニ至  
レリ。土國ハ「バルカン」半島ノ「スラヴ」人獨立ヲ認メザルヲ  
得ザリシモ「<sup>サン・ステファン條約ニ依リ</sup>「バルカン」半島ノ大部分ノ喪失ヲ  
免レ而シテ一時東「ルメリヤ」ノ「ブルガリ

ヤ」ニ併合サル、コトヲ妨クルヲ得タリ。然  
シ伯林條約ニ於テ約束セル所ノ Crete 島  
及ヒ Armenia ノ改革ニ実行サレス。  
又「バルカン」半島ニ於テ「マセドニア」  
改革ノシメニ列國ノ干渉ヲ受クルニ至ル。

英國ハ大「ブルガリア」ノ成立ヲ妨ケ「ロ  
シヤ」ノ政策ニ打撃ヲ加ヘ且ツ尙ラ Cyprus  
ヲ得テ會議ヨリ帰レル Disraeli ハ Peace  
with Honour ヲ持テ帰レルコトヲ揚言  
セリ。故國ハ英國ノ Cyprus 占領ニ反對  
セシカ Tunis ヲ保護國トスルノ懸念ヲ得テ  
ソノ反對ヲ撤セリ。

英國ハ又己ノ Cyprus ヲ占領スルタメ露  
独ク己ニ認メシ所ノ境國ノ Bosnia Her-  
zegovina ノ占領ヲ認ムルニ至レリ。又  
「セルビア」及ヒ「モンテネグロ」ノ尙ニ境  
國ノ南下セルノ道ヲ存スニメタリ。斯クノ如  
クシテ「ロシヤ」ク概リ戦争ノ勞費ヲ負担シ  
他國ハ拘子シテ利益ニ與ケルニ至レリ。

伯林會議ハ秋乙ニ對シテ直接ノ利益ヲ與ヘ  
ザリシ外觀アレト當時「ビスマルク」ハ秋乙  
ヲシテ同カヲ養フノ余裕ヲ得セシメ且ツ英國  
ヲ孤立セシムルタメニ歐洲ノ現状維持ヲ主眼  
トスル同盟系統ヲ立ツルノ計画ヲ負ヒタリ。



「ビスマー」ハ埃国ヲシテ *Bosnia Herzegovina* ヲ得セシメニハ一埃国ヲシテ  
テ秋乙、方面ヲ悉レシメ且ツ「ロシヤ」並ニ埃国内及ヒ「バルカン」半島内ニナル「スラ  
ブ」人種ニ対スル干渉ニ於テ秋乙及ヒ秋乙人種ト結フノ必要ヲ生スルニ至ラシメントスル  
モノナラン。

然ルニ秋乙ク此ノ会議ニ於テ「ロシヤ」ノ予期セル援助ヲ之ニ失ハサリシコトハ「ロシヤ」ノ旧恩ヲ忘レタリトシテ憤ル所ニシテ後ノ三同同盟及ヒ露仏同盟ノ国家結合ノ系統ノ大勢ハ突ニ此ノ時ニ突マレリト云フヲ得ハシ  
3月政策 (*Belin, Byzantium, Bagdad*)。

伯林會議ノ際ニ於テ秋乙ク土國ニ對シテ「ロシヤ」ヲ助ケサリシ態度ハ秋乙ト土國トノ接近ニ便宜ヲ與ヘタリ。(秋乙ハニB政策ヲ採ルニ至ル)

伯林會議ニ於テ英國ハ「ブルガリア」ト東「ルメリア」トノ併合ヲ妨ケシク一八八五年ノ頃併合ノ運動盛ニ起リ英國ハ却ツテ併合ヲ助ケ「ロシヤ」ハ當時「ブルガリア」公 (*Battenburg, Alexander*) ノ下ニ併合ナサシムルコトヲ欲セシニ却ツテ伯

林條約ヲ締結セシムヘクラサルコトノ口實ヲ以テ併合ニ及対シコノ突ニ於テ英露ノ兩國ハ伯林會議ノ頃ニ比シテソノ地位ヲ轉倒セリ。

「セルビア」ク「ブルガリア」ノ東「ルメリア」ヲ併合ノコトヲ以テ半島内ノ板ク平衡ヲ害スルトシテ突ヲ拳クルヤ「セルビア」ノタメニ破ル所トナレリ。(一八八五年十一月半)

「ブルガリア」公ク東「ルメリア」ノ知事ヲ兼スルコトナリテ實際ノ併合ノ一着歩成レリ。又「ブルガリア」ノ議會ニ東「ルメリア」ノ各地方ヨリ議員ヲ選出セシメテ併合ノ利益ヲ拳レリ。此ノ時ニ「ヤリシヤ」モ亦東「ルメリア」併合ニ及対シ突ヲ土國ノ國境ニ進メシカハ國以外ノ列國ノ聯合干渉ニ依リ「ヤリシヤ」ノ平時封鎖ヲ行ヒ遂ニ戰備ヲ解クニメタリ。

一八八六年九月「ブルガリア」公「アレキサンダー」ニ至ハ「ロシヤ」帝ヨリ嫉視サル干渉ヨリシテ任ヲ去ルノ止ムナキニ至レルナリ。而シテ英ハ埃ノ承諾ヲ得テ候補者トシテ五ヲタル *Sachsen Koburg Gotha* 親王「ブルガリア」公トシテ選出スル。之ニ對シ英露ヲ囑ハ此ノ折ニ東方問題ニ付テ事端生セトセシク英及ヒ秋ハ一



ハ八六年九月其ノ間ノ同盟條約ヲ「ロシヤ」  
ニ内示シ事止ハヲ得タリ

一八五六年ヨリ一八七八年<sup>年</sup>ニ亘リ国民的欲及  
及ヒ統一ノ運動カ極メテ顕著ニシテ歐洲ノ中  
央部ニ二大國(伊、俄)ヲ生シ而シテ露土戰  
争<sup>後</sup>歐洲ニ於テ新タル権力平衡ノ組織ヲ未  
メ一方ニ於テ三国同盟成リ之ニ対シテ他方ニ  
於テ露仏同盟ナリテ而シテ三国同盟ノ中心  
ニ俄乙ノ勢カカ偏重ノ虞レアルヤ英仏露ノ間  
ノ所謂三国協商(*triple entente*)成  
リ俄國ノ同盟ニ対抗シ而シテ極東ニ於テ伯林  
會議以後一秋外交史上重要ナル事件起リテ我  
國ハ英國ト同盟ニ露仏ト協商ニテ三国協商ノ  
系統ニ入レリ

斯クノ如クシテ在界ノ、権力平衡ヲ維持サ  
レタリ

伯林會議後ノ時期ニ於テ一秋外交史上ニ於  
テ論スヘキ外交ノ舞台ハ大ニ是レ極東  
ニ於テ我同ハ日清戰役ヲ經テ國際団体(*la*  
*societe de nations volkerrechts*

)内ノ一國タルコトク著ク認めラレ日露  
戰役ヲ經テ在界ノ強國タルノ地位ヲ認めラ  
レタリ。而シテ又米ニ此ノ時期ニ到リ著ク外  
交ニ於テ活動ヲナスニ至レリ。所謂「モンロー」

主義ハ此ノ面目ヲ改メタリ

歐洲ニ於テハ権力ノ平衡感ニ維持セラレテ  
領土ノ拡張ハ困難ナルニ至リ且ツ經濟交通ノ  
發達ニ伴ヒ海外ニ活動ノ余地ヲ未ムル必要増  
セルコトハ国内ノ統一ヲ計リ海外ニ國力發展  
ヲ未ムルノ思想旺盛ナラシムルノ原因ノ一ヲ  
ナセリ。コノニ於テ所謂帝國主義(*Impe-*  
*rialism*)ノ思想旺ニトナレリ。所謂帝  
國主義ハニツノ方面ニ於テ其ノ作用ヲ表ハス  
第一ノ方面ハ母國ト各殖民地トノ結合統一ヲ  
圖クスルコトニ在リ。第二ノ方面ハ外國ニ対  
抗シマシムルノ、國力ノ統一充實發展ヲ許ルコト  
ニ在リ

帝國主義ハ一ノ國家ノ下ニアレ人民ノ統一  
反ニ發展ヲ主義、骨髄トスルナリ。外ニ表ハ  
レテハ殖民地獲得ノ政策トナリ保護貿易主義  
トナル。又軍備ノ増加ヲ誘致ス。所謂軍國主  
義(*militarism*)ノ思想ハ母國ヲ依  
リ國家ノ發展ヲ致サントスルノ思想ニ基クモ  
ノニシテ帝國主義的ノ思想ト干渉スル所深キ  
モコノ思想ノ弊ハ内ニ於テ軍人ノ跋扈ヲ致シ  
外ニ對シテ強ク權謀ヲ尊ヒ國際正義、國際道  
徳、國際法ヲ度外視シテ平和ヲ攪乱シ小國ノ  
存在ヲ蔑視スルニ至ルト云フコトニ在リ。今



國ノ大戦ハ此乙ノ軍国主義ノ思想ニ胚胎スル  
所アリト云フヘキナリ 大戦前ノ外交ノ實際  
ニ於テハ所謂強者ノ権利ヲ行ハレ彼等強國間  
ノ戦争ハ稀ナリニモ尚互ニ軍備ヲ競ヒ所謂武  
裝平和 (armed peace, la paix  
armee) ノ状態ヲ生シ現大戦ハ一面ニ於テ  
ハ武裝平和ノ大勢ノ結果ト見ルコトヲ得ヘン  
然ルニ一方ニ於テ軍備ノ制限ヲ必要トシ平和  
ノ維持ヲ計ルノ思想ヲ新ク民間ニ盛ニシテ  
一八九九年ニハ「ロシヤ」ノ提議ニ依リ第一  
回平和會議 (始メハ英ノ軍備制限ニシテ) 目  
的ニ出アタリ) 開クレニテ軍備制限及ヒ美英  
的仲裁々判ノ問題ニテシテ何等ノ實際上ノ結  
果ヲ収ムルコトヲ得ナリキ

一八九七年ニ於ケル第一回平和會議ニ於テモ  
亦同様ノ結果ヲ見ルニ止マレリ 又之等ノ會  
議ニ於テ仲裁々判ニテスル決意及ヒ國際條約  
員會ニテスル組織ニ便宜ヲ共ニ取時及ヒ中立  
ニテスル法規ヲ制定スルコトハ國際ノ平和ノ  
タメニ同様ノ結果アリニト云フコトヲ得ヘン  
而シテ民間ニ於テ國際平和ヲ唱フル論者益々  
多キヲ致セリ 然ルニ武裝的平和ノ大勢ノ結  
果トモテ世界大戦起ルニ至レルナリ

伯林會議以後、時代ニ於ケル其ノ平衡維持

ヲ主眼トスル同盟系統ハ小戦争ノ憂々起ルヲ  
防クニテアリニモ全ク戦争ヲ防止スルヲ得ス  
ニテ却ツテ一旦戦争起レハ同盟系統ノタメニ  
ソノ戦争ノ範圍ヲ拡大サルコト最近ノ大戦  
ニヨリ益々明白トナレリ

其ノ平衡ニ依ツテ平和ヲ維持スルノ國際組  
織ノ不完ナルコトヲ明白トナルヤ此度ノ大戦  
ノ媾和ニ際シテ國際聯盟ヲ組織スルノ議生シ  
遂ニ平和條約中ニ於テ國際聯盟規約ノ制定ヲ  
見 今日ハ其ノ実行ノ緒ニツクニ至レリ

同盟 — 其ノ平衡ヲ主眼トシテ依ツテ軍備ヲ  
必要トス

聯盟 — 仲國內ノ平和攪乱者ヲ抑ヘントスル  
ニ

### 三國同盟ト露仏同盟

一八五六年ヨリ七八年ニ至ル間ニ於テ歐洲  
ノ國際關係ニ於テ一六變動ヲ生セリ 歐洲  
中央部ニ於テ及ヒ伊太利ノ二大同氏立セリ  
コトニ至リ新クナル其ノ平衡ヲ収ムルタメ  
ニ新クナル國家結合ヲ生スルニ至ル 三國同  
盟及ヒ之ニ對スル露仏同盟之ナリ

「ビスマーク」ハ昔々戦争ノ後仏國ヲ孤立  
セシメ歐洲ノ現状維持ヲ求ムルタメ同盟ヲ作  
ラントセリ 然ルニ普國ハ其ノ親善ナリシ



「ロシヤ」ノ兼商スル事情ヲ生シム國ニ對スルノミナラス「ロシヤ」ニ對シテ自ラ防クノ策ヲメグラサハルヲ得サルニ至レリ

「ロシヤ」ト「プロシヤ」ノ關係

「プロシヤ」ハ一八一三年 Kalisch 同盟以來「ロシヤ」ト親善ナリキ。「プロシヤ」ハ独乙統一ノ業ヲ遂行スルタメニ少ナクモ「ロシヤ」ノ中立ヲ要スヘキヲ以テ「ロシヤ」ハ一八五六年ノ巴黎條約ニヨリ盟約中立ノ誓言ヲ覓ルヲ求ムルヲ知リ利益交換ノ主義ヲ以テ普魯提携ノ基礎ヲ固メントセリ。且ツ一八六三年「ホーランド」ノ反乱ノ鎮圧ニテ「ロシヤ」ト親約ヲ結ビテ之ヲ助ケ「ロシヤ」ヲ擁ヨリ尚セリ。

斯クノ如クニテ Schleswig 及ヒ Holstein ノ事件及ヒ普魯戰爭ニ於テ「ロシヤ」ノ中立ヲ確ムルヲ得。又ニ普魯戰爭ニ於テ獨乙統一ノ業ヲ遂ケタリ。

「ロシヤ」ハ普魯戰爭ノ右漸ク普魯ノ勢ク強大ニ進キ元ノ如ク「ロシヤ」ノ之ヲ殿使スルヲ得サルニ至ルヲ見テ後悔スルノ状アリキ。而シテ一八七五年ノ予防戰爭事件アリテヨリ兩國ハ益々相離リ柏林會議ニテ普魯ノ

「ロシヤ」ニ對シテ一八七〇年(普魯戰爭)ノ旧恩アルニ拘ハラス「ロシヤ」ヲ助ケスニテ「ロシヤ」ノ防備ヲシムルニ至レリ。「ロシヤ」ノ新國欲モ之ニ志シテ反駁セリ。二國千條ハタノニ益々險惡ニナレリ。又「ビスマーク」ク「ゴルタヤコフ」ト陳ヲ生シタルヨリ兩國間ノ千條ヲ益々險惡ナラシムル一原因ヲナセリ。

此如ニ於テ普魯ノ同盟ノミナラス「ロシヤ」ニ對シテ備ヘサルヘクテサルニ至ル。所謂柏林會議ニ於テ「ビスマーク」ク「ロシヤ」ヲ助ケテソノ敵國ノ利益ヲ收メシメント努メタラシムルニハ露普同盟成立ニ於テハ他國及ヒ他國ヲ敵トシテ「ロシヤ」ト同盟スルヲ得タリシナルヘキモ「ビスマーク」ハ他國ヲ保存的且ツ平和的ナルニ及ニ「ロシヤ」ニ於テ外交方針欠マラスニテ時ニ侵略主義ノ論者ク勝テ例スルヲ見テ危殆ナリトシ「ロシヤ」ノ野心ヲ抑ヘ他國ヲシテ「ロシヤ」ニ近ツカシメサルノ策ヲ講セリ。

「ビスマーク」ノ言ニ依レハ露一八七六年ニ於テ露普同盟ト開戦スルコトアリトセハ独乙ハ荷外中立ヲ嚴守スヘキヤ否ヤヲ拘束クアル形式ニ於テ告知セシコトヲ求メ「ビスマー



ク」ハ止ムヲ得スニテ需ニ対スル故ノ衝突ヲ  
明クニシタルノ結果露土戦争起レルナリトス  
ヘリ。

「ビスマーク」ハ境ヲ送ニ路ヲ送ハサルコ  
ノ決定ニ依リ柏林会議以後三用同盟及ヒ之ニ  
対スル惡化同盟結合平等ノ大方針マルニ至  
レリ。「ビスマーク」ノコノ決定ノ得失ニ付  
キテ疑フ所クモノナキニアラスルニ「ビスマ  
ーク」ノ同盟政策ニ依リ歐洲ノ秩序ヲ維持  
シテ平和ヲ冀ヘリノ故ニカ國カテ衝突  
ニ所謂世界的政策 (Welt Politik) ニ向  
テスルノ基礎ヲ固メシコトハ疑フ所ナシ。且  
ツ「ビスマーク」ハ柏林会議以後モ故乙ノ利  
益ヲ犧牲ニセサル限リハ「ロシヤ」ト接近ス  
ルコトヲ志レサリキ。

### 普墺同盟

「ビスマーク」ハ他國ヲ孤立セシメ兼テ  
必要ノ場合ニハ「ロシヤ」ニ對シテ外交政策  
ノ一トニテ墺國トノ同盟ヲ求ム。「ビスマ  
ーク」ハ普墺戦争ノ際ニ已ニ墺國ニ對シテ寛大  
ノ條件ヲ以テ媾和ヲ許シ他日墺國ト接近ツク  
ノ余地ヲ存シ得タリ。普墺戦争後故乙ハ墺國  
カ他國ト同盟談判ヲ行ヒシコトニ對シテ毫モ費

ムルコトナクハ七一年ニ於テ墺帝「ウヰリ  
アム」ニ對シテ *Ischl*、温泉場ニ於テ墺帝  
ヲ訪問シ墺帝ハ之ヲ格禮トシテ「ウヰリアム」  
帝ヲ *Salzburg*ニ訪問セリ。比知ニ西石  
主ノ交戦アリキ。墺帝ハ同年十一月嘗テ普ニ  
對シテ *Bust*、首相、職ヲ見シ匈牙利  
出身、*Andrassy* マニテ之ニ代ラシメタ  
リ。

### 三帝同盟

「ビスマーク」ノ墺國ニ近ツキシハ畢竟  
「ロシヤ」ヲニテ墺ヲ挑ムニ至ラサラシメ  
ト欲スルニ外ナラスルヲ以テ一八七二年九月  
ニ墺帝カ柏林ヲ訪問スルニ當リ「ロシヤ」帝  
ノ同時ニ會見ヲ求ムルノ請求ヲ喜ニテ應レ比  
ノ會見、結果所謂三帝同盟ヲ作レリ。而シテ  
其ノ右幾何モナク故ハ墺ノ一八五九年、一八  
六六年、戦争ニ對スル損失ノ賠償ヲハ「バル  
カン」半島方面ニ求ムルコトヲ墺國ニ認メ  
ムルノ密約ヲナセリト云フ。「ビスマーク」  
ハ墺國ヲニテ東進政策 (*Drang nach  
Osten*) ヲ採ラシメテ柏林會議、際ニ墺國  
ヲニテ *Bosnia Herzegovina* ヲ  
得セシメ茲ニ墺國ノ「バルカン」半島ニ對テ



ル利害ヲ深クラシメ、奥國ヲシテ「ロシヤ」ニ  
對シテ俄乙ト提携ヲ求ルニムルキ、勞ヲ行レ  
リ。

柏林條約締結後「ロシヤ」ク「トルコ」ヨリ  
撤去セル天ヲ解カスニテ普國及ヒ奥國ノ境上  
ニ止メシヨリ奥國ハ「ロシヤ」ク己ニ對シテ  
侵襲ノ計劃ヲ抱クヲ恐レテ「ロシヤ」ニ對ス  
ル自衛ノタメ俄乙ト同盟スルノ必要ヲ感スル  
ニ至レリ。且ツ Bosnia Herzegovina  
及ヒ「ボヘミア」ノ「スラブ」人ニ對シテ  
「ロシヤ」ク聲援ヲ與ヘ奥國ノ統治ヲ困難ト  
ラニメルニ若シメルヲ以テ此ノ英ヨリニテ  
「ロシヤ」ニ對シテ俄乙ニ依ルノ必要ヲ感セ  
リ。加フルニ伊太利ニ於テ一八七八年ニ至リ  
奥國排外運動 (Vredentism — Italia  
vredenta) ノ語ヨリ来レリ。甚ク盛ニナル  
ヲ見テ奥國ハ益々俄乙トノ提携ヲ求ムルニ至  
レリ。

柏林會議ノ次議ニ基キ Novi Bozar  
ニ於ケル土國境界ノ確定ノタメ、列國委員會  
ニ於テ俄乙委員ハ「ロシヤ」ニ對シテ土國ノ  
主張ヲ助メルヨリ露帝ク憤リテ俄帝ニ一書ヲ  
送りソノ内ニ俄乙ク引続イテ「ロシヤ」ノ主  
張ヲ支持セサル態度ヲトルクハ兩國ノ平和ノ

維持ハ難カルヘキヲ觀テリ。コノ危機ニ際シ  
俄帝ハ一八七八年九月三日露帝ト Alexandro  
ニ會見シテ親戚ノ誼ニヨリ膠澳ヲ開キ  
テ談合ニテ事案キヲ料タリ。「ビスマーク」  
ハ奥國ク「ロシヤ」ノ脅迫ニ對抗シヌハ俄國  
ト近付クンコトヲ懼レテ奥國人ク「ロシヤ」  
ノ自衛ニ對スル計劃ト伊太利ハ、奥國排外運  
動ヲ恐ルニ來シテ奥國ノ接近ヲ計レリ。

一八七八年末 Vienna 政府ハ Den-  
mark 政府及ヒ Schleswig ノ州民カ  
俄乙ニ反抗スルノ事柄トナセル Prag (18  
66) 條約、Schleswig ニ干スル條款ヲ  
廢止スルコトヲ諾ニテ好意ヲ俄乙ニ表シ俄乙  
ハ一八七九年夏ニ至リ奥國ノ Novi Ba-  
zar ノ占領ヲナスヲ助ケタリ。普奧同盟成  
ル。

一八七九年八月ニ十七日ヨリニ十八日ニ互  
リ「ビスマーク」ハ Andrassy-Gastein  
ニ會見シテ同盟ヲ保護セリ。俄乙ハ露兵ニ對  
シテ俄國ノ同盟ヲ作ラント欲セシク奥國ハ和  
親國タル俄國ヲ敵視スル同盟ニ加ハルコトヲ  
欲セカリキ。一八七九年十月七日ニ於テ結ハ  
ル歐亞同盟條約ニ於テ所締盟國ク一國ク「ロ  
シヤ」ノ攻撃ヲ蒙ルハ他ノ一國ハソノ全兵



夫カソ以テ交換ニ共同一致ニアラサレハ平和ヲ結ハサルヘク西締盟同ノ一國ク「ロミヤ」以外ノ他國ヨリ攻撃ヲ受ケルハ他ノ締盟同ハソノ後ヲ助ケスミテオナクトモ好意的中立 (*neutralité bienveillante; wohlwollende Neutralität*) ヲ維持スヘク此ノ場合ニ於テ「ロミヤ」ク活動的ノ扱方ノ形ニヨリヌハ攻撃サレタル締盟同ニ對テスヘキ軍事的知照ニ依リ攻撃者ヲ援助スルハ他ノ締盟同ハ全クソノ以テ交換ヲスヘキモノトセリ。茲ニ於テ三国同盟ノ基礎ヲ成セル歐州同盟成レリ。

### 伊佛ノ關係

伊太利ノ統一ノ業ニ干シテ仏國ニ同恩アリ。然ルニ仏國ノカソノ思義ヲ誇張シテ新興國ヲ輕ニスルノ風アルヨリ伊國ノハ其ノ自負心ヲ毀壞サレ却ツテ仏國ニ對シテ反抗心ヲ生スルニ至レリ。且ツ「ナポレオン」ニ在ケルノ自ラ矯動セル國民主義ノ運動ヲ中途ニ於テ止マラシメントシ埃國ノ勢カヲ全ク伊國ヨリ逐フコトヲ約束セルニ拘ハラヌ埃國トノ戰爭ニ於テ *Venetia* ヲ得サルニ依リ先ツ埃國ト媾和シ「ローマ」ニ法王支持ノ仏國占領軍ヲ

置キ伊國統一ノ完成ニ必要ナリトセラル。「ローマ」ノ占領ヲ妨ケタリ。又伊國ニ對シテタル援助ノ報酬トシテ *Savoy* 及 *Nice* ヲ仏國ニ收メシヨリ伊國ノ人心却ツテ仏國ヨリ尚ルニ至レリ。「ビスマルク」ハ一度ハ伊兩國ヲ同盟ニ誘ハント欲シソノ成ラサルヲ報シテ英國ノ *Cyprus* 占領ノ代償トシテ仏國ク *Tanis* ヲ占領スルコトヲ認メ仏國ハ一八八一年四月ニ *Tanis* ノ占領ヲ實際ニ行ヒタリ。伊國人ハ己ニ同教団ナル仏國ノ政府ク同教徒ノ説ヲ容レテ「ローマ」市ノ回復ニ干シテ法王ヲ助ケルコトヲ復シ居タリシニヨリ又伊太利人ノ利害干渉ヲ有スルコト深シトナス *Tanis* ノ仏國ニ占領サルヲ見テ仏國ニ對スル敵愾心盛ニ起リ地中海ニ於ケル伊太利ノ利益ニ干シテ仏國ニ對シテ他國ノ助ケヲ求メニト欲スルニ至レリ。而シテ埃伊ノ間ニハ昔々戰爭ノ際ニ依テ突ツナセシカ一八七三年伊王ク埃及ヒ埃ノ都ヲ訪問シ一八七五年埃帝ハ伊ノ *Venice* ニ於テ伊王ト会見シニ國ノ了解アリ。斯クノ如クニテ伊國ハ一八八二年五月二十日ニ埃國同盟ニ加入スルニ至レリ。コトニ於テ三国同盟成立セリ。伊國カ加入シテ成レル三国同盟ノ條件ハ悉クハ之ヲ明白ニ



知る能ハサルニ三國同盟ハ最後ノ形式ニ於テ  
ハ第一ノ條約ニ基クテ「アルバニア」  
ニテスル條約ニ付テ「アルバニア」ノ  
第一條ハ將來起リ得ヘキ一般ノ性質ノ政治  
上及ヒ經濟上ノ諸問題ニ付キ意見ノ交換ヲ行フ  
ヘキコトヲ約セルモノ、如シ。而シテソノ第  
三條、第四條及ヒ第七條ハ凡ソ此ノ如キモノ  
ナリ。

第三條ニ於テ若シ締結國ノ一ニシテ自  
ラ挑発スルコトナクシテ條約締結國以外ノ一  
國又ハ數國ヨリ攻撃セラレテ之等ノ國ト  
戰爭ヲ行フニ至ル時ハ凡ソ、締結國ニ對シテ  
恣意ニ義務ノ發生條件 (Status quo) ヲ生  
ス。而シテソノ第四條ハ若シ其條約ノ締結國  
ニアラサル一強國ニシテ條約國ノ一又ハ二ノ  
安寧ヲ脅クニテ之ニ對シテ之等ノ締結國ク  
宣戰ヲナスノ上ムヲ得サルニ至ルハ他ノ一  
又ハ二ノ締結國ハソノ同盟ニ内ツテ少ナク  
モ好意的中立ヲ守ルノ義務アリトシテソノ第  
七條ニ於テ現状維持 (Cassus foederis)  
ヲ約束シ現状維持カ不可能ナル場合ニ於テ  
伊中ノ一ノ締結國カ「バルカン」半島「アド  
リアチック」海及ヒ多島海ノ土國領ノ占領ヲ  
ナスコトアラハ他方ニ正當ナル代償ヲ與フヘ

キコトヲ約束セリ。  
三國同盟ノ成レルハ故乙カ「ロシヤ」ハ國  
ニ對シテ自ラ防衛セントシ埃國カ「ロシヤ」  
ニ對シテ自ラ防衛セントシ伊國カ「ロシヤ」ニ對シ  
他國ノ挑発ヲ拒ラントスルニ依リテ生セルモ  
ノニシテ其ノ條約ハ始メ五ヶ年ヲ期限トセシ  
カ一八九一年ニ改定セル時ヨリ十二ヶ年ノ有  
效期限ヲ定メテ六年ノ終リニ齊業ニ得トセリ。  
今日ニ至ルマテ改定屢々行ハレタリ。一八八  
二年五月二十日伊加ハリ一八八七年三月改定  
一八九一年六月改定。一九〇二年六月。一九  
一二年六月。屢々行ハル。更新ノ際ニ條約ノ  
内容ニ變更ヲ加ヘタリト云フ。

三國同盟締結ノ事實ハ一八八六年九月ニ  
「ブルガリヤ」事件ニヨリ東歐ノ平和破ル。  
時ニ當リ三國ノ提議ヲ以テ之ヲ「ロシヤ」ノ  
皇帝ニ通告セリ。之ハ「ロシヤ」ニシテ事  
「バルカン」方面ニ起スルハ之カ故タルモ、  
埃國一國ニ止マラサルコトヲ私クニ皇帝ヲシ  
テ和ラシメタリ。后一八八七年十一月五日  
埃國同盟ノ大要ト稱スルモノ倫敦「タイムズ」  
紙上ニ掲載セラレタリ。一八八八年二月ニ  
至リ故乙ノ軍備擴張案通過ノタメ埃國同盟  
ノ條文及ヒ三國同盟成立ノ事實ヲ公表スルニ



至レリ。

三国同盟ハ全体ヨリ云ハハ歐洲ニ於ケル現  
状維持ヲ目的トスルモノニシテ直接ニ此ノ系  
統ニ入レルハ俄頃伊三國ニ止マルモ間接ニ此  
ノ系統ニ入り三國ハ他ニモ尚存ス。英國ハ自  
己ノ行動ノ自由ヲ保有セント欲シ所謂 *splen-*  
*dendid isolation* ヲ守リシク大陸  
ノ列國ヲニテ相牽制セシメテ其ノ間ニ板クノ  
平衡ヲ維持シ以テ歐洲内ニ於ケル平和ヲ確持  
セシメ且ツ大陸ノ列國ニシテ勢クヲ海外ニ延  
スヲ得サラシメント欲セリ。

### 三国同盟ニ近ク立テル諸國

一八七九年以來「ロシア」ハ國ク相接近セ  
ントスル形勢アリテ露ハニ對スル俄頃ノ板權  
ク稍々輕シトセラレ且ツ英國ハ未タ俄乙ト衆  
商ノ勢ノキニ露ハトハ其ノ殖民地ニ干シテ利  
害ノ衝突ヲ有シ殊ニ地中海ニ於テハノ海軍ニ  
對抗セサルハカラサルヲ以テ伊國ヲシテ俄頃  
同盟ヲ去ラシメテ俄頃ニ對抗シテ地中海ニ於  
テ英國ト提携セシメント欲セリ。コ、ニ於テ  
一八八七年ノ頃英伊ノ間ニ地中海ニ類スル諸  
國ト現状維持ニ干シテ協約ナレルモノ、如シ  
ス一八九一年五月ノ頃ニ至リ英ト俄頃及ヒ伊

トノ間ニ地中海ニ干スル一種ノ協約生セリト  
ノ説アリ。斯クノ如クニ英國ハ間接ニ三国  
同盟ニ近クシタリ。當時伊國ト「スペイン」  
トノ間ニ於テモ地中海ニ於ケル現状維持ノ條  
案アリタリキ。又「セルビア」ハ一八八六年  
埃國ト軍事規約ヲ結ビ「ルーマニア」マホ一  
八九五年埃國ト同盟ヲ結ヘリ。ソレ故ニ三  
國同盟ノ系統中ニハ俄頃伊ノ外歐洲ノ西方ニ  
於ケル英國、西國ノニ國並ニ英ノ同盟國タル  
葡國及ヒ歐洲ノ東方ニ於ケル「ルーマニア」  
及ヒ「セルビア」ノ諸國ヲ間接ニ包含セルコ  
トアリキ。

故乙ハ三国同盟ヲ基礎トスル外交上ノ地位  
ヲ利用シテ俄乙帝國ノ基礎ヲ鞏固ニシ歐洲ニ  
於テ外交上ノ優勝ノ地位ヲ得ルニ至レリ。然  
ルニ三国同盟ニ對シテ露ハ同盟成リテ新タナ  
ル板權ノ平衡生セリ。

三国同盟ノ成立ニ依リ「ロシア」ハ俄頃ノ  
同盟ニ依リ對抗セラレ俄頃ハ俄頃ノ同盟ニ依  
リテ對抗セラル、ヲ以テ英ニ他ヨリ孤立シ且  
ツ其ノ間ニ互ニ領土上ニ利害衝突ヲ有セサル  
露ハノ二國ハ互ニ接近セントスルハ当然ノ勢  
ナリ。而シテ俄頃ハ最モ孤立ニ苦ニシタルヲ  
以テ「ロシア」トノ同盟ヲ希望スルコト最モ



切ナリ。然シナカラ露仏同盟ノ成立ニテ種々ノ障害ヲ来シ露國ノ皇室ハ俄チノ皇室ト重縁ノ親シミアリテ「ロシヤ」ノ宮廷内ニ於テ俄末ノ親善ノ政策ヲ俄クニ棄ツルコト不可ナリトシテ争フモノアリキ。且ツ「ロシヤ」ノ宮廷ニ於テハ自由革命ノ淵源ヲ以テ月セフルル所ノ共和政体ノ仏國ニ近ツクコトヲ以テ「ロシヤ」ノ国體ヲ危ラスルモノナリトナスモノアリキ。殊ニ「アレキサンダー」三世ハ排外ノ思想ヲ持シタリシク着シク破壊党ヲ扶レ仏國ニ近ツクニ躊躇セリ。仏國ニ於テモ專制政体ノ「ロシヤ」ト結フハ共和政治ノ道途ヲ危クスルトナスノ思想アリキ。且ツ「ロシヤ」トノ談判成立ノ見込ナク之ヲ遂行スルニ依リテ却ツテ俄チノ憤ヲ拓クニ至ルトナシテ「ロシヤ」トノ同盟談判ヲ退クルコトアリキ。又「ロシヤ」亦ハ仏國ノ人民ノタメニ自己ノ利害ニ干渉ナキ復讐戦争ニ引入ルコトヲ恐レ仏國ハ「ロシヤ」ノ外交上ノ信義ニ信頼スルノ念強クラスニテ同盟ヲ結フニ慎重開始シ「ロシヤ」ノ捨ツル所トナラント懼レタリ。殊ニ仏國ニ於テハ政府ノ更迭頻繁ニシテ外交政策前後一貫セルノミナラス同盟ヲ作ルノ基礎トシテ矢ノ末々整備セサルヲ以テ「ロシヤ」

ヲニテ仏國ノ同盟ヲ来ムルニ所屬セシメタリ。加之「ビスマルク」ハ其ノ鐵槌ノ圖策ヲ以テ百方露仏同盟ノ成功ヲ妨害シテ所云破壊党ニ対スル蕭散ナル政策ニ依リ破壊党ヲ恐ルコト甚メシキ「ロシヤ」帝ヲシテ己ニ欺瞞スルノ念ヲ起サシメテ「ロシヤ」ノ仏國ニ近ツクコト切テ或ハ列國ノ注意ヲ殖民問題ニ注クシメテ仏國ヲシテ *Franco* 及ニ東京ニ依リテ「アムサス ローレン」ヲ志レシムルト同時ニ又埃及東京及ニ *Franco* ニ依リテ仏國ト英伊等ト相衝突セシメテ仏國ヲシテ俄チニ對スル敵視心ヲ他ニ取ラシメントシテ「ロシヤ」ヲシテ仏國ニ近ツクハ俄ラニ多クノ敵ヲツクルニ逼ヤサルコトヲ思ハシメントセリ。

一八八三年以右「ビスマルク」ハ民間ノ殖民熱ニ答ヘ兼テ外交上ニ之ヲ行フツメ殖民政策ニ着手スルニ至レルニ尚殖民問題ニ依リ積極的ニ仏國ニ近ツクコトヲ求メ一八八五年十一月二十四日亞弗利加ニ於ケル俄仏殖民地ノ境界ヲ確定シ又仏國ト聯合シテ「コンゴ」流域ニ干スル一八八五年二月二十六日ノ英葡條約ニ抗議シテ之ヲ取消セシメ仏西兩國ノ主唱ニ依リ一八八四年十一月ヨリ一八八五年二月ニ至レル「アフリカ」問題ニ干スル列國會議



ヲ柏林ニ開クニテ「コンゴ」ノ流域、通商、自由 *Congo Freyer* 川、自由航行及土地占領、新原則等ヲ定メテ、斯クシテ「ビスマーク」ハ單ニ他國ヲ他國ヨリ隔離スルノ消極的手段ヲ以テ足レリトセス。一方ニ於テ殖民問題ニ依リ他國ト接近シテ他方ニ於テ「ロシヤ」トノ接近ヲ求ムルコトヲ志レサリキ。

之ヨリ先一八七二年ニ於テ東欧三帝及ヒソノ首相カ柏林ニ會ニテ歐洲ノ現状維持東方問題ノ処理革命運動ノ鎮壓ニ付キ其内ノ行動ヲ約束セリ。之レ「ビスマーク」カ「ロシヤ」布、革命運動ヲ恐ル、コト甚クシテニ乘シテ約セル所ナリ。此ノ後ニ於テ東欧三帝ノ會合ハ屢々行ハレタリ。一八八四年九月「ポーランド」ノ *Skiernewice* ニ於テ独逸露ノ三帝會合セリ。此ノ會合ハ露帝ク破壞黨ニ對シテ君權主義ノ維持ノ必要ヲ感シ「バルカン」問題及ヒ中央亞細亞問題ニ於テ英國ニ對シテ孤立ナラサルコトヲ示スニ意アルニ乘シテ「ビスマーク」ノ策セル所ナリ。之ニ依リテ獨逸ノ干渉ノ尚破レサルコトヲ外ニ示シテ露從同盟ノ成立ヲ遷延セシメントセルモノナリ。

當時三國ノ間ニ重保險的 (*Rückversicherung* Vertrag) ノ條約成レリトセリ。普通ノ條約ノ條項トニテ傳ヘラルル所ニ依レハ三國ノ一方カ第四國ト戰爭ヲナスハ他ノ二國ハ好意的中立ヲナストスアリキ。

一八八四年ノ三帝間ノ上述ノ條約ノ存否ニテハ出多少ノ疑問ヲ存スルモ一八八四年以前ニ於テテクトモ露從二國ノ間ニ於テ獨逸ニ對シテハ破壞同盟ト相並ヒテ重保險的ノ作用ヲナス條約ナレルコトハ疑ヲ容レサルナリ。普通ノ說ニ依レハソノ獨逸露ノ條約ニ依リ獨逸二國ノ間ニ一方カ外敵ノ攻撃ヲ受クルハ他ノ一方ハ其ノ敵ヲ助クルコトナク好意的中立ヲナスヘキヲ約セルモノトセリ。

露佛接近ス。

露從同盟ハ種々ノ障害アリタルニ拘ハラズ新ク成立ニ近クセントセリ。「ロシヤ」ニ於テハ *Kathoff* 他國ニ於テハ *Bomlang* 力盛ニ露從同盟ヲ唱ヘ一八八四年僕及問題ニ於テニ同ク相合ニテ英國ノ主張ニ反對ニ又一八八七年ノ「ブルガリヤ」事件ニ於テ「ロシヤ」ノ暴行ヲ列國ニ訴フル「ブ



ルガリア」ノ送説委員ニ對シテ其國ク執リ  
「ブルガリア」ノ第一ノ義務ハ「ロニヤ」帝  
ト妥協スルニアルコトヲ公言セリ。又一ハハ  
七年秋乙ノ夕メニ同僚トシテ境上ニ捕ヘラレ  
シ其國ノ警務官 Schnabale 事件ニ干シ  
テ「ビスマーク」カ其國ヲ救セシメテ戰爭ヲ  
ナスニ至ラシメタルク如キ態度ヲ採レルニ當  
リ「ロニヤ」帝カ其國ノ夕メニ親征ヲ敢テニ  
致シテ平和ヲ斷ノ根帝カ「ビスマーク」ニ謀  
ラスニテ Schnabale 解放ノ命ヲ傳ヘシ  
コトアリキ。之等ノ事件ノ夕メニ露俄干渉カ  
益々疎隔ニ及之露俄ノ干渉ハ益々接近スルニ  
至レリ。

一八八八年二月「ビスマーク」ハ軍備拡張  
案通過ノ手段トシテ独逸同盟ノ條文及ヒ三國  
同盟成立ノ事實ヲ発表シテ、際、境況中ニ  
「ロニヤ」ノ新聞紙カ友人タル故乙ヲ追放セ  
ルヲ以テ故乙ハ再ヒ之ヲ訪向セサルニ等ノ  
語ヲ以テ露俄ノ策商ヲ公言セルヨリ益々露俄  
同盟成立ノ概ヲ熟サシメタリ。

一八八八年ニ「ロニヤ」トノ親交ニ復キテ  
置キシ「ウキリアム」一重死シ「ウキリアム」  
ニ在帝位ニ上ルキ「ロニヤ」ノ甘心ヲ求メシ  
ト歎セザリシニ「アザケル」モ即位ノ始、先ツ陸

軍ニ對シテ「朕カ身ハ墳墓、彼方ヨリ祖先ノ  
遺囑ニヨリテ監視セラル、モ、ニシテ朕ハ軍  
隊ノ光榮及ヒ榮譽ヲ祖先ニ報告スルノ日アル  
ヘシ」ト説ナル等ノコトアリシヨリ露俄ハ其ノ  
新帝ヲ以テ事ヲ好ムノ君主トナシ之ニ對シテ  
善政ヲ加ヘ益々露俄同盟成立ノ機運促進セラ  
レタリ。一八九〇年「ビスマーク」ノ首相ノ  
任ヲ去ルコトハ更ニ露俄同盟ヲ妨クルノ原因  
ヲ除クコトナレリ。

一八八八年末ヨリ一八九一年ニ至ル間其國  
ハ「ロニヤ」ヲ以テ前後四回國內ニ於テ公使  
ヲ暴フシメシヨリ露俄兩國間ノ經濟上ノ利害  
察摸ナルヲ致セリ。一八九〇年三月「ビスマ  
ーク」カ辭職シテ後五月其國ク「ロニヤ」ノ  
要求ヲ怒レテ「ロニヤ」ノ皇室ニ對テ加ヘン  
トスル社會黨員ヲ捕縛シテ之ヲ禁錮シ「ロン  
ヤ」帝カ益々其國ノ依賴ニ得ヘキヲ信セリ。  
一八九一年、頃一八八四年ノ露俄ノ加ハレル  
秘密條約ノ期限ニ至レルモ故乙ハ之ヲ純  
純ヲ欲メス。露俄全ク孤立セリ。且ツ當時秋  
英近ツクノ形勢アリシヨリ東西ノ孤立國タル  
露俄相結フノ機會促進サレタリ。加之露俄日  
清戰役以來極東ノ經營ニ熱心ニシテ「ニベリ  
ヤ」鐵道完成ノ財源ヲ得且ツ極東ニ於テ英國反



ヒ我同ニ当ル、毎年カヲ得ルヲ以テ同ト、  
同盟ヲ欲スルコト甚クモキニ至レリ。此同、  
艦隊ハ己ニ一八八九年ニ於テ「ロシヤ」ノ海  
軍ヨリ受ケタル招待ニヨリ一八九一年ノ七月  
二十一日 *Cranstadt* に入ルヤ「ロシヤ」  
ノ官民ノ歓迎非常ナリキ。而シテ八月二十  
一日ニ至リ、二同ノ接近ニ一決ノ形式ヲ與ヘシ  
議定條約ヲ印サレタリ。一八九二年八月ニ至リ  
此同ノ要求ニ基キ、二同間ノ軍事條約ノ調印ヲ  
見シカ一八九二年、終リヨリ一八九三年ニ至  
リ「パナマ」醜聞事件起リテ露國大快クソノ  
事件ニ干係アリト、風説此同ノ新商ニ表ハレ  
シヨリ露國ノ同ニ稍々疎隔、状態ヲ生セシカ  
一八九三年十月ニ「ロシヤ」ノ艦隊カ此同ヲ  
訪問シ *Poulon* に入リテ非常ナル歓迎  
ヲ受ケタリ。

一八九四年十一月「アレキサンダー」ニ在  
死シテ「ニコラス」ニ在立テ後一八九六年露  
帝ハ此同ヲ訪問シ一八九七年一月 *Monre-*  
*rueff* 伯ハ巴黎ニ赴キ大統領ニ謁見セル后  
此同外務大臣、*Harotarn* ト會見シテ  
露國同盟條約ニ付テ換定スル所アリキト云フ。  
一八九七年八月此同大統領、*Felise Fa-*  
*ure* カ「ロシヤ」ニ答禮セリ。コノ時ニ此

同ノ軍艦上ニ於テ露帝ト大統領、交換ニタル  
語ノ中ニ共ニ交親同盟ノ語ヲ用セタリ。

露國同盟ノ條約ハ在ニ公ニセラレサルモ同  
盟國中ノ一オ攻撃ヲ受クルハ他同ハ全矢カ  
ヲ以テ之ヲ助クヘキモノトナシテ傳ヘラル。  
然レモ、詳細ヲ知ルヲ得ス。只其ノ改組ニ  
於ケル現状維持ヲ主眼トスル防禦同盟ナルコ  
トハ疑ヲ容レズ。三国内盟ト対立シテ新タナ  
ル権カ平衡ヲ作ラントセルナリ。此ノ同盟ハ  
此同ノ一部ノ人士ノ当初ニ望メル如ク「アル  
サスローレン」回復ノ戰爭ノタメニ之ヲ使用  
スルコトヲ欲セサリシモ露國ノ孤立ノ地位ヲ  
救ヒ西同ノ外交上ノ威信ヲ増シ殊ニ此同ノ独  
乙ニ對スル危惧ノ念ヲ除クコトヲ得セシメ又  
「ロシヤ」ヲニテ東方殊ニ極東ニ於テ經營ヲ  
ナス、餘裕ヲ有セシメタリ。

故乙ハ露國同盟ノ成立ニ依リ大陸ニ於テソ  
ノ首領戰爭及ヒ三国内盟ノ締結ニヨリ獲得セ  
ル在来ノ外交上ノ覇权的ノ地位ヲ稍削カサン  
トシ正面ヨリ露國同盟ヲ敵視スルノ不利ナル  
ヲ知リ却ツテ歐洲以外ノ事項ニ露國同盟ノ注  
意ヲ向ケ己ニ亦之等ノ事件ニ干シテ露國同盟  
時ノ同ト共カスルコトヲ得セシメテ同盟ノ改  
組ニ於ケル在カテ減セシメントセリ。



露仏同盟ハソノ元来、行動、範圍ヲ歐洲ニ  
限リ歐洲ノ現状維持ヲ目的トスルヲ如キニ日  
英同盟ノ成ルル露仏ハ其内ニテ宣言ニテ曰フ  
ニハ「日英協約ハ露仏國政ヲ、政策、基礎ト  
ナレル東洋ノ現状及ヒ平和ヲ維持シ清韓兩國  
ノ独立ヲ維持シ及ヒ之等兩國ニ於テ門ヲ開放  
ヲ要求スルヲ目的トスルニ外ナラスト云ハル  
モ露仏兩國ハ極東ニ於ケル事件ノタメ自己ノ  
利益ヲ保護スルニ必要アル片ハ相当ノ手段ヲ  
考慮スルコトヲ首保ス」ト云ヘリ。之ハ日英  
同盟ニ対抗シテ露仏同盟ヲ極東ニ拡張シタル  
意味、宣言ト解スヘキニアラサルナリ。

### 日露戦争ト「モロッコ」事件

「ロニヤ」ノ露仏同盟ヲ利用シテ極東ニ於  
テ經營セル結果ハ我國ト衝突シ戦敗ニテ外交  
上ノ威信ヲ失ヒ一九〇八年ノ「バルカン」事  
件ニ干シテ俄乙ノ攻辱ヲ受ケタリ。又仏國ハ  
ソノ同盟國ノ戦敗ノタメニ「モロッコ」事件  
ニ干シテ俄乙ノタメニ攻辱ヲ受ケタリ。日露  
戦後ニ於テ「ロニヤ」ノ敗ルルハ仏國ノ人民  
ハ一時露仏同盟ニ冷淡ナリシモ「モロッコ」  
ノ問題ノ最辱ハ仏國人ヲシテ却ツテ露仏同盟  
ノ利益ヲ思ハセタリ。ソノ以テニ於テモ露

仏同盟ハ依然仏國ノ外交、範圍ヲナシ去界約  
大戰ニ於テ仏國ノ如ハレルモソノ同盟ノ干係  
ニ基ケルナリ。

### 露伊、接近

伊國ノ二同盟ニ入りテ露伊ハ政治上及  
ニ通商上ニ於テ相又同セリ。伊國ノ共和黨及  
ニ社会黨ハ此ニ對シテ同情ヲ有シ *Irredenta-*  
*list* モ三同盟ニ及對セシク伊政府ハ常ニ  
三同盟ヲ離レカリキ。且ツ一節ノ政治家ハ  
仏國ニ對スル敵愾心ヨリ内部ノ團結ヲ固クセ  
ントシ其タシキニ至リテハ之ニ依ツテ伊國ヲ  
三同盟ニ結合セントスル個人的政策ニ資セ  
ントセリ。之ニ依リニ露伊兩國ノ感情惡ク  
リキ。伊國ハ仏國トノ通商條約ヲ廢棄ニテ関  
稅戰爭ヲ開始セリ。然ルニ一八九六年三月ニ  
仏國ク *Abyssinia* ニ於テ大敗ニテ三  
同盟ク伊國ノ地中海ニ於ケル利益ヲ保証ス  
ルコトナキニ拘ハラズ歐洲ニ於テ仏國ニ對ス  
ル干渉ニツキ政治上ノ不安ヲ感シ經濟上ノ不  
利益ヲ受ケ同盟國ノ救済ニ對シテ從價的ノ地  
位ニ立ツノ莫クシテ三同盟ヲ排斥スルノ声  
漸ク伊國內ニ於テ高キニ至レリ。ヨツ *Irre-*  
*dentism* ノ運動ク伊國人ノ同ニ盛ニシテ



又伊国カ「アドリアチック」海ニ於テ霸权ヲ  
振ヒ「バルカン」半島ニ勢力ヲ展ルトスルノ  
思想ハ許多ノ伊国人、抱ク所トナリ伊国人ノ  
志カス所ハ埃国ノ南下ノ計ト相衝突スルナリ。  
且ツ仏国ニ於テ「クトリック」鉄鉄ノ勢力ヲ  
ヘテ伊国ハ「ローマ」問題ニ付キ配慮ヲ要セ  
サルニ至レリ。如キテ仏国ヲ敵視スルコトハ  
經濟上ニ於テ極メテ不利益ナルコトヲ見テ埃  
国カ三国内盟ニ属シナカラ「ロシヤ」ト「バ  
ルカン」半島ニ干スル投約ヲ結ルカ如ク伊  
国モ三国内盟内ニ止マリナカラ地中海ニ干シ  
テ仏国ト埃国スルコトヲ得ヘキヲ思ヘリ。

一八九六年九月伊国ハ Tunis ニ於ケル埃  
国ノ地位ヲ認メテ後一八九八年十一月ニ十一  
月ニ於テ兩國ノ間ニ通商條約ヲ結ヒ一八八六  
年以來ノ關稅戰爭ヲ終止セシメタリ。一九〇  
〇年十二月ニ於テ伊埃兩國間ニ外交文牒交換  
サレ伊国ハ「モロッコ」ニ於ケル埃国ノ利益  
ヲ認メ埃国ハ又 Tripoli ニ於ケル伊国  
ノ利益ヲ認メ他日之等ノ利益ニ干シ各々更ニ  
一步ヲ進ムルノ必要ヲ見ルハ他方ハ好意的  
ノ態度ヲ採ルヘキヲ約セリ。一九〇二年ノ三  
国内盟ヲ改約セル條ニ埃国外相 Delcasse  
ハ七月三日下院ニ於ケル演説ニ答ヘテ如何ナ

ル場合ニ於テモ如何ナル形ニ於テモ伊国ハ埃  
国ニ對スル攻撃ノ手段又ハ補助者タルコトヲ  
ルヘカフスト云ヒタリ。當時ハ伊埃兩國間ニ於  
テ埃國カ侵略的行動ヲ行ヒタル場合ニ於テ  
互ニ中立ヲ守リテ優カ、ルヘキ約交ヲナセリ。

### 英佛ノ接近共ノ一

伊埃ノ接近ハ英仏露ノ三国内盟 (Triple  
entente) ノ形ヲ成ル英仏間ノ協商ノ前  
驅ナリ。英伊ハ地中海ノ現状維持ニ干シテ利  
益ヲ同シクシ得テソノ間ニ協商ヲ存タリ。英  
仏ハ兩國ハ十七世紀ノ中葉以來屢々相争ヒ英  
國ハ埃国ヲ目シテ歐洲及ヒ殖民地ニ於ケル飛  
躍トナシ十八世紀ニ於ケル四戰争及ヒ十九世  
紀ノ初メノ戰爭ニ於テ埃国ノ海上及ヒ殖民地  
ノ勢力ニ打撃ヲ加ヘタル後ニ於テモ英國ハ埃  
国ノ擴張ニ對シテ常ニ反對セリ。兩國人殊ニ  
埃及ニ於テ「スエズ」運河開通後互ニ相争  
ヒ一八八二年英國カ埃及ヲ占領シテ後屢々英  
國ノ占領ヲ撤スルコトヲ公言シテ之ヲ撤去  
セサルノミナラス曾テ一八八五年ニ於テ一旦  
放棄セル Sudan ヲ再ヒ征服セントス  
ルニ至レリ。埃国ニ遠征隊ヲ此ノ地方ニ派セ  
リ。一八九八年七月埃國遠征隊ノ一ヲ率ヒタ



1. Marchand 少佐が Fashoda  
 = 着エニク Mitchellson へ Kbarton  
 ヲ相シテ強勢、英天ニ卒セテネル = 会ニ並ニ  
 Fashoda = 撤退セサルヲ得ナル = 至レ  
 リ。英仏間 = 危機ヲ生セシク此國ノ遂ニ強シ  
 一八九九年三月英仏間 = 条約締ハレ此國ハ  
 Sudan = 於ケル英國ノ勢力ヲ認ムル  
 = 至レリ。 Transvaal 戦争中英仏西國  
 受、同ニ於テ惡感敷シ又在取、各地方 = 互ツ  
 二兩國争ノ種存セリ。然ルニ英國ハ埃及 Sudan  
 及セ Tuzer、地方 = 於テ其ヲタク  
 二ニウニ此國ニ Algeria Tunis 及セ  
 Congo 流域地方 = 於テ意ヲ運フスルヨリ  
 緊争事件ハ大体ニ於テ事実上解散カレ且ツ此  
 國ハソノ國土ノ擴張ヲ「アフリカ」ノ地中海ノ西  
 部ノ地方 = 限局ニテ他國ト、衝突ヲ避ケ英國  
 及ヒ伊同 = 近ツクントスルノ政策ヲ採ルニ至  
 リ英國 = 於テモ平和ヲ求ムルノ思想盛ニナル  
 ヲ以テ兩國ハ殖民地 = 於ケル既決事實ヲ認ム  
 ルノ基礎ノ下ニ相接近ニ得ヘキニ至レリ。

○ 英独ノ対立

之ヨリ先英独ノ干係善<sup>良</sup>ナリシセ然乙カ漸ク  
 漸<sup>良</sup>シ、立界政策 = 然中ニテ海外 = 殖民地ヲ

未ムルノ政策 = 努カスルニ至リ又ソノ發達ニ  
 此國工業ノ英國ノ利益ヲ侵ニ殊ニ「ウオリア  
 ム」市ヲ独乙ノ將來ハ海上ニフリトニテ  
 (Unsere Zukunft liegt auf dem Wasser) ソノ海軍ヲ強大ニセント  
 ニ歐洲ノ内外ニ互ツテ勢力ヲ振ハントスル意  
 内ヲ示セルヨリ英國ハ独乙ヲ以テ海軍上ニ通  
 商上ニ殖民上ニ於ケル將來ノ敵ナリトナス =  
 至リ独乙 = 傾ケル所、歐洲ノ権ヲ平衡ヲ回復  
 スルヲ = 此國ニ近ツクントスルノ思想ヲ英國  
 國政者等、同ニ生セリ。

一八九六年秋有ク Gemeron Raid  
 ノ鐵匠ヲ祝スル所、電報ヲ Transvaal  
 ノ大統領 Krüger = 送リソノ中ニ交戦國  
 援助ヲ候タス自國ノ兵クヲ以テ之ニ服ケ外部  
 = 對ニテ同土ノ独立ヲ究フセルコトヲ祝セル  
 旨ヲ述ヘタルコトハ英國人ヲ憤ラシメタリニ  
 カ南兩戰争中英國人ト独乙人トノ交同ハ極端  
 = 達セリ。戰争中英國ハ独乙カ干渉ノ計劃ニ  
 繼スルコトヲ恐レ兩國ハ一時接近セリ。英國  
 ハ一八九九年ノ Samoa 事件ニ付テ独乙  
 = 對ニテ讓歩セリ。一九〇〇年各國ノ北清事  
 變ノ善後策 = 苦心セル折ニ「ロシヤ」ハ滿洲  
 ノ占領ヲ永久ニセント企テシヨリ清國ノ門ヲ



開放。領土保全ニテスル英独協商結ハレタリ。  
又一八九九年ヨリ一九〇〇年ニ至ル南米、  
Venezuelaノ内乱ノ際ニ英独両国民ノ  
要テニ損害ヲ賠償セシメタル事ニ Vene-  
zuelaニ対シテ行動ヲ共ニシ Vene-  
zuelaノ艦隊ヲ拿捕シ海岸ヲ砲撃シ且ツ  
新領ヲ行ヒタリ。

### 英佛ノ接近 其、ニ

然レハ一九〇二年ノ頃ヨリ英國ニ於テ独乙  
トノ接近ヲ喜ハサル思潮著シク独乙カ英國ト  
結ヘル清國ノ領土保全ニテスル協商ヲ兩解シ  
テ滿洲ヲ含マストナセルコトハ更ニ英人ヲ憤  
ラシメタリ。佛國カ其ノ同様膨脹ヲ西部地中  
海沿岸地方ニ限局シ且ツ伊太利、英國ト接近  
シテ外交上ノ勢力ヲ破リ行動ノ独立ヲ得ント  
欲スルニ至レルヨリ(コノ策ヲ採レルハ外相  
Delcasseナリ)英仏ノ接近ヲ益々促進  
セシメタリ。仏國ハ經濟上英國人ヲ得意トス  
ルノ旧來ノ干渉アリ。且ツ「ロシヤ」カ独乙  
ト協商シテ「ロシヤ」ノ東方ハ極東ニ内ヒ三  
國同盟ニ對スル露仏同盟ノ圧力ヲ減シタル際  
ニ英國ト接近スルハ仏國ノ外交上ノ威信ヲ増  
加スル所以ニシテ又 Moroccoヲ得テ埃及

ニ對スル主張ヲ捨テ得ヘキヲ以テ仏國ハ英國  
トノ接近ヲ熱心ニ求ムルニ至レリ。而シテ英  
仏ノ接近ノ勢ヲ促進セシムルハ英國ノ「エドワー  
ド」七世及ヒ仏國ノ Delcasseノ力ニ依  
ルコト大ナルヘキモノアリキ。

英國王ノ一九〇三年五月ノ巴黎訪問ハ非常  
ナル成功ニシテ七月仏國ノ大統領 Loubet  
ニ至ルニ至テ倫敦ヲ訪問セリ。一九〇三年十月  
十五日ニハ兩國ノ間ノ法規ニテスル紛議就中  
兩國間ノ條約解決ニテスル紛議ヲ仲裁々判ニ  
附スルコトヲ約束セリ(表面ハ義務的仲裁判  
條約ナレト實際ハ總括的仲裁々判條約ナリ)。  
之ヨリ先英仏間ニ一九〇三年六月ノ頃ヨリ乙  
ニ英仏ノ協商ニテスル外交談判行ハレシク偶  
々月露戰役行ハレハ露仏同盟ノ干渉ヨリ  
「ロシヤ」ノ事ニ戰勇ニ引入レラル、ニ至  
ランコトヲ惧シ英國モ日英同盟ノ干渉ヨリ  
同カ戰勇ニ加ハラハ己モ亦我國ノ事ニ戰爭  
ニ加ハラサルヲ得サルニ至ルヘキヲ以テ兩國  
カ相接近ニ相勵ケテ中立ヲ守リ共ニ戰爭ノ禍  
中ニ引入レラル、ヲ防クノ必要ヲ生ニ英仏接  
近ノ談判ハコノ要ヨリモ促進セラレタルモ、  
ノ如ク一九〇四年四月八日ニ英仏ノ協商(en-  
tente cordiale)成レリ。一ノ協約



＝依り *Newfoundland* 及び西部「  
ノリカ」＝于ル英領ノ領ヲ還キヌ一ノ  
宣言＝ヨリ埃及及ヒ *Morocco* ＝于ニ政  
治上ノ現状維持ヲ互ニ約束スルト同時＝於  
ハ埃及＝於テ英國ノ占領ノ期限ヲ定メルコト  
ヲ要求セス又英國ノ領土＝及テカサルヘキコ  
トヲ約束セリ。英國ハ又 *Morocco* ＝於  
テ於同ク *Morocco* ノ安寧ヲ監視シ、  
要スル行政上、経済上、財政上及ヒ軍事上ノ  
改革ヲ補助スルコトヲ認メ於同ノ行動ヲ妨ケ  
サルコトヲ約束セリ。但シ於同ハ *Gibulta*  
ノ対岸 *Mellila* 及ヒ *Sibon* 河ノ間、  
*Morocco* ノ海岸ニ要塞其、他ノ防禦工  
事ヲ施サ、ルコトヲ約束シ以テ英國ノ海峽＝  
于スル利益ヲ認メタリ。

斯クノ如クニ於ハ埃及ノ現状ニ承認ヲ英  
ハ英ハ「モロッコ」＝於ケル英領ノ自由行動ヲ  
許容シタリ

上述ノ宣言＝附属スル秘密條款中＝於テ  
(一九一一年十一月簽承) 兩國ハ止ムヲ得サ  
ル事情＝依リ埃及及ヒ「モロッコ」＝于スル  
政策ヲ変更セサルヲ得サル場合ヲ予想シ此ノ  
場合＝ハ宣言中＝約セル通商ノ均等担保「ス  
イス」運河ノ自由通行ノ担保又ハ「モロッコ」

ノ海峽防禦工事ノ担保等＝于スル宣言ノ條款  
ハ変更ニ得サルコトヲ定メ兩國ハ埃及又ハ  
「モロッコ」ノ立法制度ヲ他ノ文明諸國＝於  
テ行ハル、モノト全採ナラシムル目的ヲ以テ  
改革ヲ加フルヲ望マン事コト、考フルトキハ  
互ニ斯クノ如キ協議ヲ扶持スヘキコトヲ約束  
セリ。又宣言ノ秘密條款中＝於テ「スペイン」  
ニ対シ *Medina Centa* ノ他ノ「ス  
ペイン」ニ近接スル「モロッコ」ノ地ヲ＝於  
テ利益範圍ヲ認メ之等ノ地方ノ行政ヲ「ス  
ペイン」ニ委ヌルコトヲ規定セルクニ條件ヲ附  
セリ。

- 一、「スペイン」ノ通商上ノ均等、防禦工事上  
ノ條項ニ同意スルコト
- 二、ソノ領土トナリヌハ利益範圍トナル土地  
ヲ他ニ讓渡セサルコト。

然シテ上述ノ宣言ト同時ニ迎ヘル所、英領同  
ノ他ノ宣言＝依リ「シヤム」＝於ケル英領ノ  
自由行動ノ範圍ヲ *Menam* 川ノ四ト東ト  
＝定メタリ。

*Madagascar* 島ノ肉税制度＝對  
スル英國ノ抗議ヲ止シ *New Hebrides*  
島＝於ケル土人ニ對スル同法制度＝于ニ及ヒ  
英國國人タル土地所有者ノ紛争＝于スル規定



ヲナセリ。(Condominium / 一例ナリ)

之等、条約宣言中最モ重要ナルハ埃及及ヒ「モロッコ」ニテスル宣言ナリ。英仏ノ協商ハ仏國ノ方面ニ於テハ Delcasse ノ新政策、ニ大綱領トスル所、第一仏國ノ發展ヲ當時ノ仏國ノ自然的ナル發展タル所、西部地中海沿岸ニ依リ他國ト、衝突ヲ避クルコト、第二ニ仏國ノ外交上ノ行動ノ自由ヲ得ルシメ英伊ト接近セントセルコト、ノニテ実行セルモノナリ。

英國ノ方面ニ於テハ歐洲、權力平衡ヲ回復シ独乙ノ外交上ノ霸權ヲ終止セシメ独乙、英國ノ海權ヲ侵スクヲ弱メントスルナリ。英仏間ノ多年ノ關係ハ此ノ時ヲ以テ一變シ前ノ仏伊協商后、仏西協商及ヒ英露協商ト共ニ外交上ニ於ケル革命的ノ出來事ト云フコトヲ例。

一九〇四年十月六日、仏國、西國間ノ宣言ハ兩國カ埃及及ヒ「モロッコ」ニテスル英仏ノ宣言ニ賛同スルコトヲ得テ且ツ兩國カ「モロッコ」ノ君主ノ主權及ヒ領土保全ヲ守ルヘキコトヲ宣言スルニ止マリシク英露條約ヲ以テ「モロッコ」ニ於ケル兩國ノ専ク範圍ヲ約定セリ。

一九〇七年五月十六日ニ至リ英仏西ノ間ニ地中海及ヒ大西洋ニ臨ミタル歐洲及ヒ「アフリカ」ニ於ケル領土ノ現状維持ノ主義ノ宣言ヲ見ルニ至レリ。

初メ英仏協商成レルニ當リ仏國ハ獨逸ニ對シテ演説ヲナセルヲ独乙宰相 Bülow ハ協商ニ付キ独乙ノ一狀ノ利害ノ實ヨリ異議ヲ唱フヘキ所ヲ見スト宣言セリ。然レニ独乙ニ於テ英仏協商ニ依リ著シク外交上ノ威力ヲ減ササレシコトヲ感シ独乙カ所謂包圍ノ政策ノ犧牲トナレリト唱ヘテ機會ヲ見テ仏國ノ加ハレル歐洲ノ新結合ニ對シテ打撃ヲ加ヘントセリ。

伊太利カ三国同盟内ニ於ケル地位

独乙ニ對シテ同盟ニ加ハレル動機トナレル所トノ共同ハ既ニ上ニ Triete Front 等ノ土地ヲ復ヨリ恢復セントスル Irredentism ノ運動ヲ伊太利人間ニ盛ニシテ又伊カ「アドリアチック」邊ニ霸權ヲ振ヒ「バルカン」半島ニ勢力ヲ振ヘントスル理想ハ數多ノ伊國人ニヨリテ抱ケレ伊太利ノ志ス所ハ埃ノ南下ノ計ト相衝突シ故ニ埃伊間ニ漸ク及目ノ原因ヲ増セリ。兩國政府ハ「バルカン」問題ニテスル現状維持ノ約束ヲナセルモコハ一時ノ方



便 = スキス 独ノ宰相 *Bismarck* ハ佛伊ノ  
接近ヲ見テ *law de valse* (舞踏ノ相  
手ヲ求ムルコト) = スキスト 俄語ニ地中海 =  
於テ重大ナル利害ヲ有スル仏伊ヲ相結フハ独  
ノ祝スル所ナリト云ヘルモ内心喜ソトコロニ  
アラス。

### 独ノ防衛策

独乙ヲ中心トスルニ同盟ニ對スル德仏内  
盟内ノ仏國ハ英仏協商ニ依リ英國ニ近キ四國  
ニ亦英仏協商ニ加ハリ四歐ノ協商成リ而シテ  
三國同盟内ノ伊國ク仏國ニ接近スルニ至リン  
ヲ以テ独乙ク外交上ニ於テ卓越セル勢カヲ有  
スル形勢ハ一變スルニ至レリ 是ニ於テ独  
乙ハ機會ヲ見テ仏國ノ加ハレル新結合ノ依賴  
ニ難キヲ示シ以テ仏國ヲ威脅シテノ行動ノ目  
的ヲ失ハシメソノ萌芽ニ於テ新結合ヲ破壊シ  
以テ「ビスマルク」ノ一度作レル所ノ歐洲ニ  
於ケル独乙ノ外交上ノ優越ナル勢カヲ回復シ  
且ツ独乙ノ在歐的政策ノ障害ヲ去ラント欲セ  
リ 日露戰爭中仏國ノ同盟タル露國ノ類リニ  
破ルルヲ見テ独乙ハ時機至レリトナシ「ロシ  
ヤ」ク奉天ニ破ル、ヤ幾何モナク一九〇五年  
三月三十一日独帝ハ *Motacco Tongier*

= 上陸ニ佛國ヲ英仏協商ニ基キ「モロッコ」  
ノ君主ニ對シテ國內ノ改革ノ談判ヲ行ヘル際  
ニ於テ「モロッコ」ノ君主ノ代表者ニ内ツテ  
朕カ *Fougier* ヲ訪問セルハ「モロッコ」  
ニ於ケル独乙ノ利益ヲ有效ニ担保スルタノニ  
朕ノナニ能ク限リテ尽サントスルノ決心ヲ表  
示サントスルコトヲ公言シヌ「モロッコ」  
ノ君主ハ自由ナル專制君主ト考フルク既ニ朕  
ハ王ト協商セントスト公言シ而シテ四月十  
日ニハ諸國駐劄ノ大使ニ同章ヲ奉ニテ仏國ハ  
独乙ヲ終始妨害ニテ英仏協商及ヒ仏西協商ヲ  
結ヘルヲ以テ独乙ハ「モロッコ」問題ニ干シ  
テ如何ナル方法ニ於テモ束縛セラルコトナ  
シト説キ而シテハハ〇年ノ「マドリッド」條  
約調印國ヨリ成レル列國會議ヲ開キテ「モロ  
ッコ」問題ヲ解決センコトヲ提議セリ *Del-*  
*casse* ハ列國會議開會ノ提議ヲ拒絶セン  
トセルカ仏國ニ於テ独乙ニ對抗スルノ軍備欠  
ク「ロシヤ」モ仏國ヲ助クルカナク英仏及ヒ  
西仏協商ニ於テハ英仏協賛ノ義務ヲ定ムル  
コトナキヲ以テ獨帝ノ目ニテ独乙ヲ孤立セシ  
ムル主謀者トナセル *Delcasse* ハ辭職ノ  
止ムヲ得サルニ至ル *Rouvier* カ代ツテ  
談判ニ當リ七月八日及ヒ九月十日ノ協商ニ依



り遂に列国会議ヲ開クコトヲ説ムルに至レリ

### 「アルゼンチラス」ノ会議

一九〇六年十月十五日諸國ノ委員「アルゼンチラス」ニ会セル頃、英國ノ軍備整へス「ロニヤ」乙ニ我國ト媾和セリ。英國ハ歐洲ノ秩序ノ平衡ノためニ他國ヲ助クルノ必要ヲ感シ、兩國ハ一九〇五年九月一日更ニ他國ト約束スル所アリキ。他國ハ深ク三國內閣内ノ二國ニ依頼シ、又個人的ニ「ロニヤ」帝ノ中立ヲ求メントシテ、英及ヒ西ニ至リテハ他國トノ利害ノ衝突ニ依リテ之ヲ他ヨリ商レンメ得ヘシト思ヘリ。會議中、他乙ハ他國ヲ孤立セシムルシメ、南港場ノ警察編成問題ニテ種々ノ策畧ヲ用ケテ他國ノ提議ニ反対シ、又諸國ノ折衷案ヲ退ケタリシカ、己ヲ助クルノ國ヲナキヲ見テ一旦讓歩ヲナスノ態度ヲ示セルカ、他國ノ内閣更迭アルヤ、他乙委員ハ更ニ前ノ主張ヲナセリ。諸國輕制、他乙大使ニ対シテ「アルゼンチラス」會議ノ委員ノ多数ヲ他國ノ主張ヲ助ケサルヘク、他乙ハ他國ヲミテ屈服セシメントスル言ヲ打電シ、又他帝自ラ「ルーズベルト」ニ打電シテ他ノ諸國カ悉ク他國ノ主張ヲ助ケサルニ至レルコトヲ報シ、他國カ讓歩スルシメカセニコ

トヲ謂ヒタリ。然シ他國ハ強セカリキ。英國ハ割取ナク又留保ナク他國ヲ助ケヘキコトヲ諸國ニ告ケ「ルーズベルト」モ他乙ノ提議ヲ承認シ得スト答ヘ「ロニヤ」モ他乙ノ主張ヲ助ケヘキコトヲ公言セリ。コトニ於テ莫ニ他乙ノ主張ヲ助ケルハ他國一同トナレリ。他乙モ遂ニ讓歩スルノ止ムヲ得サルニ至リ、三月二十一日「モロッコ」ニ関スル主要ナル協議成レリ。事實上他國ノ要求セル要旨ハ會議ニ於テ認めラル、ニ至レリ。

其ノ後「モロッコ」ニ於テ一九〇七年 Mulai Tafid 策定事件。又一九〇八年、Casablanca 事件ニ於テ他乙ノ主張貫徹セカリキ。一九〇九年二月ニ至リ、他乙ノ間ニ新協約成リ、之ニ依リ他乙ハ「モロッコ」ニ於テ經濟上ノ利益ノニテ目的トシ、他國ノ政治的特別利益ヲ妨害セサルヘキヲ約シ、他國ハ「モロッコ」ノ保全及ヒ獨立ヲ約シ、又經濟上ノ機會的均等主義ヲ約束セリ。

### 亞細亞政策

最近二十五年間ニ於テ政界ノ外交ハ「アジア」ノ外交ト相影響スルコト大ナリ。一八八四年天津條約ニ依リテ韓國ニ於ケル英カ干渉



ノ条約ク日清兩國間ニマトメラレシク韓國ノ  
コトニシテ明治二十七八年ノ戰役起リ下関  
條約ヲ結ビ(一八九五年)韓國ノ清國ト主權  
ノ干渉ナギコトヲ認メシメ又台灣及七遼東半  
島ヲ割讓セシメタルニ下関條約訓印後幾何モ  
ナク露佛歐ノ三國ク我同ノ遼東半島ヲ占有セ  
ルコトヲ以テ清國ノ主權ヲ侵奪シ韓國ノ独立  
ヲ有名無実トナスモノニシテ極東ノ永久平和  
ニ害アリトナシ遼東半島ノ還附ヲ表面上友誼  
的ニ新告ニ我同ハ五月五日ニ至リ止ムヲ得ス  
僅少ノ價金ニ代ヘテ遼東半島ヲ還附セリ(三  
千万兩)

### 三国干渉

俄乙ハ「ロシヤ」ヲシテ極東又ハ中東ノ經  
營ニカヲ尽サシメ以テ歐洲ニホケル「ロシヤ」  
ノ俄ニ對スル圧力ニ減セント欲スルコト久シ  
カリキ。

露仏同盟成ルニ及ヒテ益々此ノ政策ヲ以テ  
露仏同盟ヲ中和スルノ必要ヲ感シ又「ロシヤ」  
ノ極東經營ヲ機會トシテ自己モ亦極東ニ勢力  
ヲ張ラント欲スルナリ。此知ニ於テ三国干渉  
ノ事ナレリ。

「ロシヤ」ハ當時野心ヲ極東ニ展シ「バル

カン半島ニ於テハ現状維持ノ政策ヲ採リ一八  
九七年コノ教旨ニ基キ俄國ト協商ヲ結ビ此ノ  
協商ニ基キ「バルカン」事件ニテシテ平和及ヒ  
安穩ヲ維持セントスル兩國ノ努力ヲ戮ムルヲ  
タメニ漢露ノ皇帝ハソノ中ノ一同ク軍械ニ目  
ツ自ラ挑発スルコトナクシテ現状維持ヲ免ク  
セントスル事三國ト協定ニ立クントスル  
事ハ相手同ハ中正嚴正ナル中ニテ維持スルノ  
必要條約ヲ結ヘリ。

露帝ハ此ノ條約ハ「バルカン」諸國ニテ條  
セス。又露俄兩國ノ政ノ取柄部ニ於テ平和的  
政策ヲ施行スル同絶絶スヘマモノナルコトヲ  
俄帝ニ對シ陳弁セリ。ソノ後一九〇三年

*Münzgesetz*ニ於テモ露俄同ニ「バルカ  
ン」半島ニ於ケル取柄上ノ現状維持ノ主義ヲ  
採リ「マセドニア」ニ改革案ヲ行ハシムル教  
旨ノ條約ヲ結ビタリ。而シテ「ロシヤ」ハ俄  
乙ノ其ノ背後ヲ襲フルコトヲ屢フルヲ以テ俄  
乙ト接近スルコトヲ求メタリ。其レ故極東事  
件ニテシテ俄乙ト相計ル所アリキ。一時北清事  
變ノ折ニ露俄同ニ東亞ノ事ヲ見タルク幾何モナ  
ク極東ニテスル露俄ノ接近起リ日露戰爭ノ頃  
ニ及ヘリ。

之ヨリナシク前日清戰役ノ終リノ頃清國現



リ = 破フル、マ馬肉媾和談判 = 先ナ清国ハ王  
之春ヲ露帝ノ登位ヲ賀スル = 托ニテ「ロシヤ」  
ノ干渉ヲ味ムルヲメ = 「ロシヤ」 = 派遣セリ  
日清ノ媾和談判カ已ニ始マリシ后ニ李鴻  
章ハ露帝ノ大使 Cassini 伯ト交渉  
シ「ロシヤ」ノ助ケニ依リテ日本ノ新地ノ要  
求ヲ制限セシメント同リ遂ニ同干渉ニ致サ  
シメシク「ロシヤ」ハ其ノ援助ニ對スル報酬  
ヲ求メ李鴻章ノ電書ニ「ロシヤ」ニ赴  
クヤ曾テ Cassini 伯ト交渉セル一種ノ秘  
密條約ニ基キ李鴻章ト Lobanov トノ同  
ニ談判行ハレタリ。 Witte 大臣談判ニ失  
リテ遂ニ膠州灣ニ「ロシヤ」軍艦ノ來泊ヲ容  
テ許スコトヲ認メシメ而シテ「ミスコー」ニ  
於テ一ノ條約調印サレタリ。此ノ條約ハ我國  
ニ對スル一種ノ露清同盟條約ニ外ナラシテ  
我國カ「ロシヤ」ノ東部支那スハ韓國ノ領域  
ヲ侵サハ露清兩國ハ即時ニ海陸ノ兵カヲ以テ  
互ニ交換スヘシトナシ天蘇糧食ヲ互ニ供給ス  
ヘシトナセリ。而シテ「ロシヤ」ク將來其ノ  
軍隊ヲ輸送シテ故兵ヲ防キヌハ其ノ天蘇糧食  
ヲ運輸速達セシメシメクタメ清国政府ハ同國ノ  
黑龍江吉林地方ニ於テ鐵道ヲ經營スヘシトナ  
シ此ノ鐵道建設。清国政府カ之ヲ露清銀行ニ

依りシテ經營ニ當ラシムヘシトナセリ。此ノ  
條約ニ依リ「ロシヤ」ハ滿洲ノ北部ヲ通過シ  
テ海塩ニ連絡スヘキ鐵道ノ布設權ヲ取得シタ  
ルヲ以テ一八九六年一月ニ露清銀行ヲ設立シ  
テ之ヲ經營ニ當ラシメ同年九月同銀行ノ附屬  
トシテ東清鐵道會社ヲ設ケ一億五千萬兩ヲ以  
テ工事ヲ開始セリ。

### 独日英佛ノ清国租借

然ルニ一八九七年十月始メニ於テ山東省ニ  
於テ鐵道ノ二ノ人ノ宣教師殺サル、ヤ狀乙ハ清  
国ヲ一八九八年三月六日遂ニ青島ヲ九十  
九年間鐵道ニ租借セシムルコトヲ認メシメ又  
山東省ニ於ケル金融上ノ特權及ヒ鐵道布設權  
ヲ得タリ。ソノ右ニ通商ニシテ三月二十七日  
「ロシヤ」ハ「ロシヤ」軍艦ノ來泊港ヲ得ル  
ノ口實、下ニ曾テ我國ク之ヲ占有スルコトヲ  
以テ東洋ノ平和ニ害アリトナセル旅順及ヒ大  
連、二十五ヶ年ノ租借ヲ認メシメ又東清鐵道  
ヲ旅順大連ニ接続スル線路ノ布設權ヲ得タリ  
英國ハ旅順ヲ「ロシヤ」ノ軍艦トナスコト  
ニ反對セルニ遂ニ遂ニテ直隸灣ノ權カ平衡ヲ  
維持スルタメニ當時我國軍隊ノ占領中ナリシ  
威海衛ヲ我軍ノ撤兵后「ロシヤ」ノ旅順大連



ノ租借ノ期間ヲ以テ英國ク租借スルコトヲ約セリ(一八九八年六月一日) 而シテ英國一八九八年五月ニ於テ廣州灣ノ九十九年ノ租借ヲ認メシメタリ 英國ノ廣州灣ノ租借アルヤ英國ハソノ香港ニ於テ有スル地位ク軍事上及ヒ商業上ニ於テ侵蝕セラレタルコトヲ口実トシテ香港ノ對岸ニ於テ終末租借セル九龍ノ地ニ擴張セシムルニ至レリ コレニ於テ支那分割ノ声ヲ聞クコト屢々ナリ 而シテ英國ハ揚子江沿岸ヲ他國ニ讓與若クハ貸與スルヘキコトヲ公文ヲ以テ清國ヲニテ約セシメタリ(三一年)

英國ニ福建省ニ付キ公文ヲ以テ同様ノ約束ヲセシメタリ 英國ニ亦東京ノ邊境諸省ニ付キ同様ノ約束ヲメサシメタリ 而シテ一八九九年(三二年)四月二十八日英露ノ間ニ支那ニ於ケル兩國ノ鐵道布設範圍ヲ確定スルニ長城以外ヲ「ロシヤ」ノ鐵道布設區域トナシ揚子江ノ流域ヲ英國ノ鐵道布設區域トナセリ

### 米國ノ機會均等主義

米國ハ將來支那ニ對スル通商航海ニ付キ大ナル不利益ヲ發ケタルコトヲ惧レ所謂開放(Open door)ニテスル意見ヲ列國

ニ提出シテ (Foley 國務卿ノ意見) 諸國ノ同意ヲ得タリ (四月—十二月) 之ハ諸國ノ清國ニ於ケル利益範圍又ハ租借區域ニ於テ商業上ノ機會均等主義及ヒ條約上ノ利益保護ノ主義ヲ主張スルモノナリ

### 北清事變ト露西亞ノ滿洲占領

清國ニ於テ十九百年ノ庚子ノ改革運動壓抑シ同年六月頃ヨリ義和團事件盛ナルヲ致シテ清國政府ハ之ヲ制止スルノ實カヲ失ヒ俄ニ公使館ヲ燒ケラレ六月二十日ヨリ八道同北京ノ諸公使館ハ團匪ノ包圍ヲ受ケタリ 我國ハ略一師團ノ兵ヲ出シテ露英米仏及ヒ俄ノ兵ト共ニ七月七日ヨリ行進ヲ始メ八月十五日ニ北京ニ入レリ 八月七日「ロシヤ」帝ノ意見ニ出テタリト稱シ直隸省ニ於ケル各團ノ聯合軍ヲ解乙シ Walderse 元帥ノ指揮ノ下ニ置クコトヲ決メラレタリ 清國ノ朝廷ハ大慶府ニ蒙恩ノ慶王及ヒソノ部下ヲ抑制スルノ力ナカリニク九月ニ聯合軍ノ元帥ナル Walderse ヲ到達シテ陸上及ヒ海上ニ於テ示威的運動ヲ試ムルニ至リ清國政府ノ廟議始メテ一決ニ九月十九日義和團撲滅ノ上諭及ヒ十月十五日元光知府ノ上諭出テタリ



一九〇〇年十二月ヨリ翌年九月=互ニ談判  
、結果九月七日和議=干スル最右、議定各氏  
レリ。然ルニ「ロシヤ」ハ英和団事件、際清  
國ノ官英爲領、*Blagovestchensk*ヲ  
襲撃セルヲ口実トシテ滿洲ノ要地=兵ヲ入レ  
營口ヲ占領セリ。「ロシヤ」ハ北京=於ケル  
公使館襲撃=干スル列國ト、共同ノ談判=於  
テハソノ條件ヲ輕クセシメテ恩ヲ清國=亮リ  
滿洲=於ケル單独ノ事件=干シテハ充分ノ利  
益ヲ收メントセリ。

彼乙ハ北清事變=干シ充分=清國ヲ脅惑ス  
ルノ主義ヲ採リ元兇ノ引渡ヲ要求シ *Wal-*  
*dersee* 元帥ヲ派遣シテ聯合軍ヲ指揮セシメ  
シ際ナレハ「ロシヤ」ノ態度=依リ篤地=預  
レリ。コハ=於テ同年十二月十六日英俄ノ間  
=清國ノ領土保全及ヒ内カ開放ノ主義=干ス  
ル協定成リコノ主義=干スル列國ノ承認ヲ求  
メタリ。我國ハ之ヲ承認シ「ロシヤ」モ亦之  
ヲ承認スルノ辭ヲナセルモ十一月ノ頃難題將  
軍タル増敏ノ代理者ト山東總督 *Alexief*  
ノ代表者トノ間=滿洲ノ行政及ヒ行政監督=  
干スル協定行ハレタリ。彼乙ハ一九〇一年一  
月=至リ英國トノ協定=干シ態度ヲ変シソノ  
協定カ初メヨリ滿洲=適用セラルヘキ趣旨ノ

モノナラザリシモノナルコトヲ主張スルニ  
至レリ。

日英米独ハ二月ヨリ三月ノ間=清國=對シ  
「ロシヤ」ト滿洲=干スル特別ノ約束ヲナス  
ノ危険ナルヲ忠告セルモ *Lomsdoff* 伯ト  
揚儒公使トノ間=滿洲ノ占領=干スル秘密ノ  
協定案成レルモ、如シ。

我國ハ一九〇一年四月五日強硬ナル抗議ヲ  
ナシ「ロシヤ」モ一時讓歩シ滿洲占領=干スル  
露清間ノ協約ハ成立セシメテ破レタルク如シ  
然ルニ占領ノ事實ハ毫モ變ヒス十月五日ヨリ  
清國政府ハ滿洲=干スル談判ヲ初メ一旦協定  
案成レルモ支那政府ノ承認ヲ得ザリキ。

### 日露ノ關係(朝鮮問題)

「ロシヤ」ハ滿洲=於フル清國及ヒ英國ノ注  
意ヲ取スルタメ=西藏ノ方面=於テ交渉ヲ開  
始セリ。一九〇一年六月以來北京=於テ「ロ  
シヤ」政府ハ滿洲邊所ノ條件トシテ新疆及ヒ  
西藏ノ一部=互ニ廣大ナル土地ヲ割讓セシメ  
ントスルノ風説行ハレタリ。清國ノ新疆ノ方  
面ヲ顧ミ英國ハ西藏ノ方面ヲ顧ミル=當リ我  
國ハ俄リ朝鮮及ヒ滿洲=干シテ憂慮ヲ加ヘタ  
リ。日露ノ關係ハ其ノ当初朝鮮問題ナリ。日



清俄役 = 俄リ朝鮮ハ清國ヨリ独立セルコトヲ  
認メツレシモ俄争行内后王妃ノ光変、結果韓  
王「ロシヤ」公使館 = 避難ニ「ロシヤ」、勢  
力ノ下ニ立ツ = 至リ一八九六年(明治二十九年)  
五月十日京城 = 於テ日露代表者間ニ龍書  
調印サレ同年五月六日「モスコ」 = 於テ山  
縣大使ト Lobanov ト、間ニ日露協商成  
レルカ日露兩國ノ対等ノ地位ニ立テ韓國ノ改  
革 = 于スル共同ノ援助韓國ノ内國人ヲ以テ組  
織スル軍隊及ヒ警察ノ創設、維持、電信線ノ  
管理等ニ内ニテ約束スル所アリキ、ソノ右  
「ロシヤ」ハ此ノ協商ノ精神ヲ無視シ日本ニ  
保護セシメテ練兵士官數名財政顧問一名ヲ韓  
國ニ差入レシメタリ、我邦議 = 于シ Muro-  
vieff ハ言フ左右 = 托シテ志スル所ナキ  
シカ旅順大連租借 = 于スル條約(Pobufoff  
條約)ノ談判ノ際我國ノ視聽ヲ軟スルタメ一  
八九八年一月韓國ニ于スル日露ノ紛議ヲ解決  
スルタメ談判ヲ開クコトヲ提議シ我同ヨリ條  
件ヲ提出シテ談判ヲ始メシカ練兵士官及ヒ財  
政顧問ニ韓國政府ト争ヒテ退去シ一八九八年  
四月日露ノ間ニ西外務大臣ト Rosen 公使  
ト、調印セル議定書成リ此ノ議定書 = 依リ兩  
國ハ韓國ノ内政ニ干渉セサルコトヲ約束シ韓

國カ一方ノ國ニ對シ勸告及ヒ助カヲ求ムルト  
キハ相互ニ協議ヲ遂ケタル后ニアラサレハ何  
等ノ知置ヲモナサ、ルヘシトシ又「ロシヤ」  
ハ日露兩國間ノ商業上及ヒ工業上ノ干渉ノ牽  
連ヲ妨害セサルコトヲ約束セリ、然ルニ露國  
ハ屢々對馬海峡ヲ制スヘキ地位ニアル馬山浦  
ノ租借ヲ要求セリ、我國 = 於テ滿韓交換ノ主  
義ニ依リ「ロシヤ」ト安快セントスル論者  
アリシモ國民ノ多數ハ「ロシヤ」ト安快 = 信  
頼スルヲ不可トシ斷然「ロシヤ」ノ滿洲經營  
ヲ及對スヘキコトヲ主張セリ、然レ此種ノ  
以テ「ロシヤ」及ヒ其ノ同盟國ニ當ルコトヲ  
危シタリ、然ルニ英國 = 於テモソノ所謂光輝  
アル孤立(Splendid Isolation)ノ  
極東 = 於テ維持ニ堪キヲ見テ我英威ヲ倚リテ  
「ロシヤ」ノ滿洲 = 於ケル經營ヲ及對セシ  
ント欲セントシ日英同盟ノ利益ヲ思フモノ  
アリキ、獨乙ハ「ロシヤ」ヲニテ極東ニ對シテ  
カヲ傾クシメント欲スルト同時ニ極東 = 於テ  
「ロシヤ」ニ對スル抵抗ノ強キニ失セサラ  
ニオトヲ希ヒ我國ヲニテ英國ト能ハシメテ  
「ロシヤ」ニ當ラシメント固ク私ク = 日英ノ  
間ニ轉換スル所アリテ倫敦 = 於テ我英公使ト  
Lonsdowne ト、間ニ何人的ノ意見ノ文



庚一九〇一年四月頃より己未年三月八月  
=至り正式=英國政府ト意見ヲ交換スルノ概  
限ヲ我駐英公使=英ヘアリ十一月文月英外  
相ヨリ具体案ヲ提出セリ 然ルニ此ノ際伊藤  
公「ロシヤ」ヲ訪問シテ日露協商成ルノ機レ  
アリシ=ヨリ日英同盟談判促進サレ第一日英  
同盟條約ハ一九〇二年(明治三十五年)一月  
三十日=成レリ(二月十一日發表)

### 第一回日英同盟

第一日英同盟條約ハ極東ニ於ケル現状及ヒ  
全局ニ於ケル平和ヲ維持シ殊ニ清露兩國ノ社  
立ト領土保全トヲ担保シ右國人ノ商工業上ノ  
均等ノ機会ヲ得セシムルヲ目的トナシ 我  
國ハ清國及ヒ韓國ニ於テ又英國ハ清國ニ於テ  
特別ナル利益ヲ有スルコトヲ宣言シ若シ同盟  
中ノ一國ク之等ノ利益ヲ防衛スルタメニ侵略  
的行動ヲナス第三國ト戰爭ヲナスニ至ル片ハ  
他ノ同盟國ハ中立ヲ守リ第四國ク同盟國ニ及  
対シテソノ戰爭ニ加ハルニ至ルコトヲ妨グル  
タメニ努ムヘク第四國ク同盟國ニ及対シテソ  
ノ戰爭ニ加ハルニ至ル片ハ他ノ同盟國ハ義務  
ヲナスヘキコトヲ突メタリ 而シテ有效期間  
ヲ五年ニ限レリ

第一日英同盟條約ハ時ニ起ラントスル極東  
ノ戰爭カ極東ノ區域ニ局限セラルヘキコト及  
ヒ一九〇五年ノ遼東半島還附ニ干スル歐洲干  
渉ノ再ヒ起ラサルコトヲ保証スルノ結果ヲ生  
シタリ 日英同盟ニ対シテ三月十九日、露公  
ノ宣言ヲ見タル「ロシヤ」ハ日英米ノ圧迫  
ニ依リ一九〇二年四月八日ヲ以テ一旦清國ト  
約束ヲナシテ一九〇二年十月八日以後一九〇  
三年十月八日マテ、間ニ於テ三回ニ分テテ滿  
洲ヨリ撤兵ヲナスヘキコトヲ突メタリ 然ル  
ニ「ロシヤ」ノ宮廷ニ於テ鴨綠江上流ノ森林  
伐採事業ヲ計画シ滿韓ノ經營ヲ主張スル

Bezobrazoff 一派、議論ヲ露布ヲ動カシ  
露政府ノ態度ニ變シ一九〇三年四月八日第二  
撤兵期ノ頃ヨリ露政府ハ滿洲ノ永久占領ニ決  
シ七月十二日 Alexieff ヲ南東州ノ總督ト  
ナシ永久的ニ占領ヲナスノ意思ヲ示シ清國ヲ  
シテ占領ニ干スル密約ヲ締結セシメントセリ  
而シテ露人ノ韓國ニ於テモ計画スル所アリキ  
コトニ於テ英國ハ一九〇三年七月二十八日  
「ロシヤ」トノ談判ヲ開始スルノ訓令ヲ發シ  
我國ハ滿洲ニ干シテ「ロシヤ」カ清國ノ領土  
保全ヲ認ムル約束ヲナスコトヲ求メ「ロシヤ」  
ハ拒絶シカ返答ヲ延シ、間ニ極東ノ方面ニ



於ケル軍備ヲ増加セント試ミタリ。

### 日露宣戦 (一九〇四年)

談判七ヶ月=且リ我同ハ一九〇四年二月六日国交断絶ヲ宣言シ又自由行動フトルコトヲ宣言シ二月八日旅順ノ閉鎖ヲ以テ日露戦役實際開始ナル。=至レリ。戦争中我同ハ我同ニ対スル好意的中立ノ地位ニ立テ。从ハ露ニ対スル好意的中立ノ地位ニ立テ。合衆国ハ稍々我同ニ傾キ。独ハ露ニ傾ケリ。

一九〇五年五月二十七日ヨリ二十八日ニ互ル沖ノ島海戦ニヨリ「バルチック」艦隊全滅シテ後六月二日合衆国大統領西園寺=周旋ヲナシテ遂ニ「ホーツマス」条約成レリ(九月五日)。

之ヨリ前八月十二日華ニ回<sup>ル</sup>同盟條約結ハレタリ。同盟條約ノ擁護スル利益ノ範圍ハ擴張サレテ英國ノ印度國境ノ安全ニ與ル一切ノ事項ニ干スル利益ヲ含ム=至リ又我同ニ於ケル我同ノ政治上。軍事上。經濟上。専断利益ヲ發ク認メ我同ノソノ利益ヲ擁護スルタメニ必要ト認ムル知置並ニ=監理及ヒ指揮並ニ保護ノ知置ヲ行フノ権利ヲ認メタリ。然シ同盟國ノ一方ク排斥スルコトナク第三國ノ攻撃ヲ受

ケ特殊利益(即チ東亞及ヒ印度ノ地域ニ於ケル領土利益並ニ其ノ地域ニ於ケル特殊利益)ヲ保護スルタメノ戦争スル=至レハ後々第四國カソノ同盟國ニ及対シテ戦争ニ加ハルコトナキニ直テ=締結同ノ他方ニ交換スルノ義務發生スヘントナセリ。而シテ有效期間ヲ十年トセリ。

日露戦争ノ開始ニ直テニ歐洲ノ外交ニ影響シ英仏協商促進サレズ戦争ノ結果トシテ露ノ威信失墜サレシコトハ秋<sup>ハ</sup>同ニ「モロッコ」ニ於ケル衝突ヲ生セリ。日露戦役開始後ニケ月ニシテ英仏協商成リ春大會戦右三週間ニシテ秋帝「ウイヘルム」ニ在 *Fongier* = 上陸シ沖ノ島海戦後十五日ニシテ *Delcasse* ノ辭職ヲ見タリ。日露ノ媾和ニテスル談判開始後ニ到リ始メテ秋乙<sup>ハ</sup>「モロッコ」事件ニテシテ讓歩シ秋<sup>ハ</sup>同ノ條約成レリ。

### 日露協約 (一九〇七年)

### 日佛協約 (一九〇七年)

日露ノ同ニ「ホーツマス」條約締結ノ后ソノ條約ニ予見セル滿洲ノ鉄道及ヒ日本海「オホツク」海並ニ「ベーリング」海ニ於ケル漁業等ニ干スル協約及ヒ通商條約等ヲ談判進



行セルカ一九〇七年六月十日ニ日露協約成リ  
ヲ後七月三十日諸條約ノ外一統的ノ意味ニ於  
ケル協約ヲ結ヒ日露相互ノ現在ノ領土ノ保全  
ヲ尊重シ又一方オ清國ト結ヒスハ其ノ相互間  
ニ結ヘル條約上ノ權利ヲ諸國民ノ機會均等主  
義ニ抵触セサル限リハ尊重スヘキコトヲ約束  
シ清國ノ独立及ヒ領土保全及ヒ清國ニ於ケル  
諸國民ノ商工業上ノ機會均等主義ヲ承認シ又  
現状存続及ヒ上述ノ主義ノ尊重ノタメニアラ  
ユル平和ノ手段ヲ尽スヘキコトヲ約束セリ

日英ノ間ニ於テ一九〇七年六月十日ニ於テ  
印度支那ニ干スル最惠國民取扱ヒノ趣旨ノ宣  
言ノ外ニ於テ清國ノ独立及ヒ領土保全並ニ清  
國ニ於ケル諸國民均等待遇ノ主義ヲ尊重スル  
コトヲ約束シ且ツ亞細亞大陸ニ於ケル相互ノ  
地位及ヒ領土ニ干スル權利ヲ維持スルヲ目的  
トシ一方ク主權保護權又ハ占領權ヲ有スル  
土地ニ接接スル清國ノ土地ニ於ケル平和及ヒ  
安全ヲ確保スルタメニ相互的ニ扶助スヘキヲ  
定ムル協定ヲナスニ至レリコノ協約ニ依リ  
英同ハ印度支那ニ干スル憂懼ヲ除クヲ得タリ  
英同ハ英同ノ資本ヲ利用スルノ機會ヲ失ヘシ  
ナリ

而シテ日英同盟、日法協商及ヒ日露協商ニ

依リ英同ハ間接ニ德法同盟及ヒ英法協商ノ中  
軸トスル歐洲ノ新結合即チ三國協商ノ系統ニ  
加ハルニ至レリ而シテ英露協商成リテ更ニ  
三國協商ノ結合鞏固ヲ加フルニ至レリ

### 英露協商(一九〇七年)

英露ノ間ニハ北太平洋岸ノ亞細亞及ヒ新洲  
近東(「バルカン」「ボスホラス」「トルコ」)  
中東(「アフガニスタン」「ペルシヤ」「チベッ  
ト」)及ヒ極東ニ於テ利益ヲ與ヘシ曾テ「クリ  
シヤ」戦争ニ於テ相互ニ交戦シ柏林會議ニ於  
テ相抗争シ中東亞細亞ニ於テ英同ハ「ロシヤ」  
ノ南進ニ對シテ備クナン兩國ハ久シク及同シ  
来リ日露戦争ノ際Hall事件ノ如クハ兩國  
國民ノ及同ノ情ヲ加ヘシカコノ事件ハ英同ノ調  
停ニヨリ巴黎ニ於テ開カレシ國際會議委員會  
ノ議ニ附シテ事ナキヲ得タリ日露戦争中ニ  
於テ「ロシヤ」秋乙ノ兩帝カ一九〇五年七月  
二十三日ノ Björkösandニ於ケル會合  
ノ際兩國ノ間ニ主トシテ英同ニ對スル同盟條  
約結ハレシカソノ露法同盟ト兩立ニ得ナルカ  
タメニ遂ニ「ロシヤ」ノ放棄スル所トナリ之  
レ以後露法ノ干渉更ニクナレリ其ノ後英ハ  
英同カ依リ極東ニ於テ勢力ヲ逞フスルヲ欲セ



ス需同ヲモ友邦トナシ以テ我同ニ対スル権力  
干渉ヲ作リ日露同同ヲ共ニ其ノ国家ノ結合ノ  
系統中ニ網羅セント欲セリ。極東問題ノ干渉  
ヨリシテ英國ハ「ロシヤ」ト接近ヲ求ムルノ  
事情アリ。近東ニ於テ俄乙ハ「トルコ」ニ於  
テ勢力ヲ得「バルグット」鉄道ヲ敷設セルヨ  
リ俄乙勢力増進セル結果印及ヒ其ノ通路ニ  
対スル新ナル危険ヲ生シタリトシ却ツテ

「ロシヤ」ニ近ツクヲ利トナセリ。斯クノ如  
クニシテ極東及ヒ近東問題ニ干シテハ英露同  
ニ利害ノ衝突ヲ生セサルニ至レリ。

日露戦争後「アルゼシラス」ノ会議(「モロ  
ツコ」事件ニ干ス)(一九〇六年)ニ於テ俄乙  
ニ対スル干渉ヨリ英露相近ツクノ機会ヲ得タ  
リシカ「ロシヤ」ハ日露戦争ノ結果トシテ極  
東ニ於テハ侵略的政策ヲ採ルノ餘地ナク專ラ  
同ノ回復ト「バルカン」方面ノ勢力ノ維持  
トニ力ヲ尽サントシ英國ハ俄乙ニ対スル干渉  
ヨリ露兵ニ接近セントセリ。俄乙ノ「モロツ  
コ」事件ニ干スル威圧的政策ト英國ノ斡旋ト  
ハ露英ノ接近ヲ助ケテ、ニ於テ英露同ニ利害  
ノ衝突ヲ生スル根拠アル地方的問題ヲ知理  
スル<sup>カ</sup>ハニ協議ヲ開キ一九〇七年八月三十一  
日英露協商成リ英露兩國ノ利益範圍ヲ定メ

「バルシヤ」、「アフガニスタン」及ヒ西藏ニ  
干シテ主トシテ現状維持ヲ約束スル所アリキ  
「バルシヤ」ニ於テハ北部ハ「ロシヤ」ノ利  
益範圍トシ東南ノ部分ハ英國ノ利益範圍トセ  
リ。之等ノ地域内ニ於テ相手國ハ政治的若クハ  
ハ商業的性質ヲ有スル何等ノ特権ヲモ自國ノ  
タメニ要求セス。又自國民スハ第三國民ノ利  
益ノタメニ支持スルコトヲキテ約束シ又相手  
國ノ利益ノ範圍ヲ認めラレシ國々其ノ地域内  
ニ於テナスハキ特権ノ要求ニ対シ直接若クハ  
間接ノ反対ノ行動ヲナサ、ルコトヲ約束セリ  
又「バルシヤ」ノ財政上ノ監督ヲナスノ必要  
アル場合ニ干シ結局ノ手紙ハ双方同意ノ上ニ  
テ行フヘシトセリ。兩國ノ南北ノ利益範圍ノ  
中間及ヒ「バルシヤ」湾ノ全沿岸線ハ何レノ  
利益範圍ニモ属セサル地域トセリ。而シテ

「バルシヤ」湾ニ干シテハ談判中「ロシヤ」  
カ英國ノ特殊利益ヲ認めタルコトヲ明クニス  
ル公文ヲ公ニセリ

「アフガニスタン」ニ於テハ「ロシヤ」ノ  
政治上ノ現状維持及ヒ商業上ノ機會均等主義  
ヲ尚保セルモ英國ノ卓越セル勢力ヲ認め「ア  
フガニスタン」ニ対スル一切ノ政治上ノ交渉  
ハ英政府ノ仲介ヲ經テ之ヲ行フコトヲ約シ



「アフガニスタン」ノ国内ス「ロシヤ」ノ駐  
在官ヲ派遣セサルコトヲ約束セリ。

西藏ニ于テハ支那ノ宗主权及ヒソノ領土  
保全ヲ認メ、英露双方カソノ内容ニ干渉セス。  
又自國ノタメヌハ臣民ノタメニ特許(特許)  
ヲ求メサルコトヲ約束セリ。

一九〇七年八月三十一日ノ英露協約ノ締結  
ハ三国協約ヲ鞏固ニセリ。此ノ故ニ  
ヨリ外交上ニ於テ同時ニ英露ノ援助ヲ受クル  
ニ至レリ。英露協約ハ英仏協約ト同シク元來  
ハ歐洲以外ノ事項ニ干スルモノナルモノノ協  
約ニ基クテ條國ノ接近ハ露仏同盟ト共ニ独乙  
ノ外交上ノ霸權ヲ主張スルニ對シテ歐洲ニ於  
テ權力平衡ヲ維持スルノ作用ヲナスニ至レリ。  
然ルニ独乙ハ新結合ヲ目ンテ独乙ヲ孤立セシ  
ムルノ陰謀ナリト、見解ヲ改メサリキ。

日英同盟、日露協約及ヒ日仏協約ハ極東ニ  
于テ唯一ノ目的ヲ有セリ。極東ニ於ケル現  
狀維持ニ清國ノ独立領土ノ保全及ヒ門ヲ開  
放之ナリ。

一九〇八年(四十一年)十月三十日ニ於テ  
ハ太平洋ノ現狀維持ト支那ノ領土保全及ヒ商  
工業ノ機會均等主義ノ尊重及ヒ支持ヲ約束ス  
ル日米同盟ノ文書ノ交換アリキ。

## 第二回日露協約(一九一〇年)

一九一〇年七月四日ノ日露第二協約ニ依リ  
兩締約國ハ滿洲ニ於ケル鐵道ニ付キ相互ニ交  
好的ノ協力を與ヘ此ノ目的ニ有害ナル一切ノ  
競争ヲナササルコト並ニ「ホーツマス」條約  
及ヒ其ノ他我國ト「ロシヤ」トノ間スハ日露  
兩國ト支那トノ間ノ現行ノ約定ニ基クテ滿洲ノ  
現狀ヲ維持尊重スルヲ協定セリ。

## 第三回日英同盟(一九一一年)

一九一一年七月十三日ニ至リ第三日英同盟  
條約結ハレタリ。大體ニ於テ第二日英同盟條  
約ト異ナル所ナキモ韓國及ヒ印度ニ干スル特  
別ノ條文ヲ添セリ。而シテ其ノ中重要ナルハ  
第四條ニ於テ兩締約國ノ一方カ第三國ト紛括  
的仲裁々判(General arbitration  
treaty)ヲ締結シタル場合ニハ本條約ハ其  
ノ仲裁々判條約ノ有效ニ存続スル限リ右第三  
國ト交渉スルノ義務ヲ前記締約國ニ負ハシム  
ルコトナキヲ定メタルコトナリ。

第三日英同盟條約調印 英同ハ米同ト一  
種ノ仲裁々判條約ノ談判ヲ行ヒ、ノ八月三日  
ニ於テ一旦調印スルニ至リニ所元老院ノ反對



ニ依リ成立スルニ至ラスニテ終レリ

### 第三日露協約 (一九一六年)

一九一六年七月ニ日露協約ノ公表セ  
ラレタル部分ニ於テハ極東ノ永久的平和ヲ維  
持スルヲ目的トスルコトヲ定メ其ノ第一条ニ  
於テソノ一方ニ対抗スル所ノ何等ノ政治上ノ  
協定又ハ聯合ニ他方ヲ加ハラサルコトヲ約シ  
其ノ第二条ニ於テ一方ニ依リ兼認サレタル他  
方ノ極東ニ於ケル領土又ハ特別利益ノ侵迫  
セラルニ至リタル片ハ兩國ハ其ノ権利々益  
ノ擁護防衛ノタメ相互ノ支持及ヒ協カヲ目的  
トシテ採ルハキ知置ニ付キ協議スヘキヲ約束  
セリ

### 日米文書交換 (一九一七年)

一九一七年十一月ニ日米ノ間ニ所謂石井  
「ラニニング」文書ノ交換行ハレ兩國政府ハ  
領土相接近スル国家ノ間ニ特別ノ干渉ヲ生ス  
ルコトヲ兼認シ合衆国ク日本ノ支那ニ於テ  
(殊ニ其ノ日本所領ニ接壤スル地方ニ於テ)  
特殊利益ヲ有スルコトヲ兼認シ又兩國ハ支那  
ノ独立及ヒ領土保全主義ヲ聲明シ並ニ支那ニ  
於ケル内戸開放又ハ商工業ノ機会均等主義ノ

尊重ヲ宣明セリ

### 「バルカン」ノ問題

「バルカン」半島ニ於テ「マセドニア」問  
題ハ由來外交上ノ難問題ナリキ。一九〇五年  
九月末ヨリ十月ニ至ル露埃兩帝ノ *Mirza-*  
*tey* ノ会見ノ際ニ「マセドニア」改革ニ干  
スル協議アリテ露埃カ同文ノ通牒ヲ土国政府  
ニ提出シ土国ハ止ムヲ得スニテ遂レ日露戦争  
中「バルカン」半島方面ニ小策ヲ見ケルカ日  
露戦争後露埃兩國ハ「マセドニア」ノ裁判制  
度改革ニ干シ土国ト談判セル際埃國ハ土国ニ  
対シテ改革案ヲ支持スルニ努メスニテ其ノ間  
ニ *Mitrovitza* ヨリ *Salonika* ニ出  
ツル土百古鉄道ト *Mitrovitza* ニ於テ車  
絡スヘキ *Novi Bagat Sandjok*  
州ヲ通過スル鉄道ノ布設ヲ認可セシメタリ  
土国ニ於テ一九〇八年七月ニ十四日青年「ト  
ルコ」党ノ革命起リ多年擾亂ノ中心ナリシ  
「マセドニア」ニ於テモ一時諸人種間ノ争止  
ミ秩序自ラ立ツノ有様ナリシカ同年十月五日  
「トルコ」ノ政府ノ名義ノ存セル「ブルガリ  
ア」ハ独立ヲ宣言セリ。略ホ同時ニ埃國モ昔  
ヲ伯林會議時行政官領土ヲ得タル *Bosnia*



Herzegovina / 併合ヲ宣言セリ 境國  
ノニ州併合ノ表面上ノ理由トスル所ハニ州ニ  
立憲制度ヲ施スクモニ英ノ法律上ノ地位ヲ明  
瞭ニスルノ必要アリトスルニアリシクハ青  
年「トルコ」党ノ政府ノニ州ヲ回復スルノ運  
動ヲ挫折セシメントシヌ一方ハ之等ノ地方ニ  
住スル數多ノ「スラヴ」人種ノ抱ケル大「ス  
ラヴ」同ノ理想ヲ打破セントスルカタメナリ  
時恰ニ土同ノ立憲制度ノ基礎尙脆弱ニシテ  
「スラヴ」人種ノ保護者タル「ロシヤ」ノ戰  
敗ノ瘡痍ニサル片ナリキ。「ロシヤ」ハニ  
州併合ニ付キ争ハサリシモ國際會議ヲ開キテ  
伯林條約ノ変更ヲ議スルノ說ヲ持シ且ツ「ロ  
シヤ」ハニ州併合ニ同意スルノ條件トシテ巴  
里條約及ヒ伯林條約ノ確認セル海峽ノ閉鎖ヲ  
解キ *Dardanelles* 及ヒ *Bosphorus*  
ノ海峽ヲ「ロシヤ」海軍ニ解除スヘキヲ要求  
セントニ境國ハ之ニ反対セザリシカ「ロシヤ」  
ノ外相 *Isuolsky* ノ海峽閉鎖ノ解除ニ付  
シ英仏ノ同意ヲ求メントシテ英ノ巴里及ヒ倫  
敦ヲ巡回セル際境國ノ *Aehrenthal* ハ併合  
ノ宣言ヲ断行セリ。海峽閉鎖解除ノ「ロシヤ」  
ノ希望ハ英國ノ承諾ヲ得ル能ハサリシモ、  
如ク「ロシヤ」ハ其ノ多年ノ希望ツ此ノ際断

念セルモノ、如シ。國際會議ニ附スヘキ他ノ  
問題ニ付シテ英仏露ノ間ニ一致ヲ得シテ  
*Aehrenthal* ハニ州併合事件ヲ會議ニ於  
ケル討議ノ議題トナスコトニ同意ヲセザリキ  
「セルビア」ハ境國ノニ州併合ニ依リ所謂大  
「スラヴ」同ノ理想ノ實現絶エルトシ且ツ此  
ノ機會ニ依リ「アドリアチック」海ニ出ルヲ  
得サル片ハ「セルビア」ハ同運ノ屏息ヲ待ツ  
ノ外ナシトナセルヨリ直ケニ動員ヲナセリ。  
伯林會議ノ調印同ニ對シニ州併合ニ付スル抗  
議ヲナシニ州ヲ伯林會議ノ元ノ地位ニ復スル  
カ然ラカレハ相当ノ賠償ヲナシテ「セルビア」  
國民存立ノ要件ヲ弱クシムル文書ヲ簽セリ  
境土間及ヒ「ブルガリア」ト土同トノ間ニ  
ハ既ニ談判行ハレシカ「ロシヤ」ト境國トノ  
間ニ於テ列國會議開会前ニ各國カ決定セント  
スル凡テノ事件ニ付キ予メ同別ノ談判ヲナシ  
其ノ決スル所ヲ綜合シテ條約案トナシ之ヲ以  
テ列國會議ノ正式ノ審議ニ付セントスル境國  
ノ提案ヲ採用センコトヲ決シ十二月二十五日  
ニテ列國ニ通知シ境土同ノ談判ハ一九〇九年  
二月二十六日條約ヲナスニ至リ「ブルガリア」  
土同間ノ談判ニ「ロシヤ」ノ調停加ハルアリ  
テ二月中略々終了ニ四月二十日ニ至リ「ブル



カリヤ」土国間ニ條約締ハレタリ。

然ルニ「セルビア」人ハ「ロシヤ」人ノ後援ヲ恃ミ強硬ノ態度ヲ持シ英露独仏伊ノ五國ハ「セルビア」ニ對シテニ州ヲ自治、一國トナスノ要求ト領土上ノ代償ノ要求トヲ断念スヘキコトヲ告ケ三月十日ニ至リ「セルビア」ハ諸強國及ヒ土國政府ニ對シテニ州問題ハ歐洲的ノ問題ナリト信スル故ニ伯林條約調印ノ諸國ノ國際會議ニ於テ公平ナル裁判ヲ仰クントストナシ國際會議ヲ開クコトニ依リテ其ノ要求ヲ貫カントセリ。

露英仏伊ノ四國ニ國際會議開會ニ異議ナカリシ如キモ独ハ列強ク國際會議ヲ開カスニテ通牒ヲ以テ土州ニ干スル伯林條約ノ條項ノ変更ヲ兼認スルコトヲ提議ス。而シテ英國ガ境國及ヒ「セルビア」ノ間ニ立テテ國族ノ勞ヲ採レル際ニ三月二十二日独帝ハ露帝ニ親唇ヲ送り其ノ中ニ於テ「ロシヤ」カ境國ノニ州併合ヲ兼認スルニ於テ何等ノ條件ヲモ附セサルコトヲ望ム旨ヲ述ヘ而シテ「ロシヤ」カ返答ヲ躊躇スルニ於テハ境國軍ハ「セルビア」ニ侵入シ独乙モ直チニ境國ノタメニ「ロシヤ」ニ備フルノ地位ニ付カサルヲ得サルヲ説ケリ。而シテ独帝ハ境國ノ皇儲ニ當テ、親瀆ヲ奉シ

独乙カ飽遠境國ヲ助クハキコトヲ確メタリ。

之ハ「セルビア」カ「ロシヤ」ノ後援ナクンハ効ケ能ハス。境國ニホ「ロシヤ」ヲ俾リテ動クニ躊躇スルノ形勢ニ來シテ「ロシヤ」ニ威脅ヲ加ヘ以テ三國協商ノ傲カヲ系シ改洲ニ於ケル独乙ノ外交上ノ單款勢力ヲ回復セントスルモノ、如シ。三月二十二日「ロシヤ」ハ独仏ニ謀ルノ暇ナクシテ讓歩セリ。而シテ境英間ニ於テ「セルビア」ヲニテ宣言セシムヘキ文案ヲ協定シ之ニ依リ「セルビア」ハ「ボスニア」ニ於テ已成トナレル事實カ其ノ權利ニ抵触セサルコトヲ認メ俄テ列強カ伯林條約第ニ十五條ニテシテナサントスル決定ニ從フヘキコトヲ認メ諸國ノ親告ニ從ヒ併合事件ニ肉ニテ採レル抗議及ヒ及對ノ態度ヲ終止スヘク境國ニ對スル現在ノ政策ノ方針ヲ改メ將來同國ト善隣ノ關係ニ基キ生活スヘキヲ宣言セリ。独帝ハ境國ノタメニ「ロシヤ」ヲ威脅セルコトハ独境干渉ヲ益々急ナラシメシカ露境ノ所慮ハ一九〇九年ノ末ヨリ一九一〇年二月初メニ至ルマテ外交關係ノ停止ヲ生セシムルニ至レリ。

伊國ノ態度



三国内盟内、伊国ハ前ニ依リ、協約ニ依リ  
仏国ニ接近スルニ至リニテ、埃國、「バルカン」  
半島ニ於ケル政策、タメニ之ヲ棄ル  
ルノ状ヲ加ヘタリ。殊ニ伊国ハ三国内盟内ニ  
於テ他ノ二国ニ比シテ、新位ニアリテ動カスレ  
ハ他ノ二国ノ決定ニ追従スルヲ要求セラル、  
ヲ以テ三国内盟ニ干スル不平ハ伊国人ノ間ニ  
ホツ前メニ至レリ。

埃國ノ二州併合、際ニ伊国、在朝在野、竟  
派ハ共ニ伊国ヲ三国内盟ヲ離ル、ヲ欲セサル  
ニ三国内盟内ニ於テ他ノ二国ト対等ノ地位ニ  
立テ独立ノ判断ヲ以テ他ノ二国ノ行動ヲ賛否  
スルヲ得ルノ干渉ニ立タンコトヲ希望シ若シ  
同内ノ状態ノタメ優勢ナル他ノ内盟國ノ意見  
ニ服従セサルハカラストセハ伊国民ハコノ状  
態ヲ改ムルタメ負担ヲナスコトヲ辞セストノ  
意思、表明ヲナシ陸海軍、擴張ヲ行フニ至レ  
リ。然レモ伊国ハ三国内盟ヲ離ル、ハソノ管  
領的政策トナスモノナルヲ以テ一九一二年ノ  
二月七日ニ三国内盟ヲ更ニ十二年間延長スル  
ノ約束ニ加ハレリ。

### 三国内盟延長

一九〇八年、「バルカン」事件落着以来独

乙ハ仏國、「モロッコ」ニ干スル一九〇九年  
ノ協約ヲ結フニ至レリ。又独乙ハ「ロシヤ」  
ト一九一〇年、*Potsdam*ノ協商ヲ結ヘ  
リ。此ノ協商ニ依リ「ロシヤ」ハ「バグダッド」  
鐵道ニ反対セヌコトヲ以テ「ベルシヤ」ニ  
於ケル線ニ連絡スルコトヲ約束シ独乙ハ「ロ  
シヤ」、「ベルシヤ」ニ於ケル特殊利益ヲ認  
メタリ。兩國ハ相互ニ相手國ノ利益ヲ害スヘ  
キ何等ノ條約ヲモ結ハサルコトヲ約束セリ。

### 「モロッコ」問題 独佛交渉

一九一一年「モロッコ」ニ於テ擾亂起リ仏  
國ニ於ケル *Delcasse*、新政策トシテ  
「モロッコ」方面ニテ仏國ノ發展ヲ計ル、抵  
会生セリ。仏軍隊ハ五月二十一日「モロッコ」  
ノ首都 *Fez* ヲ占領スルニ至レリ。仏政府  
ハ *Fez* 占領ヲ以テ一時的ナリト宣言シ  
「モロッコ」軍隊ノ編成ヲ行フニ必要ナル期  
間ヲ以テ占領ノ期限トセリ。

然ルニ独乙ハ六月一日軍艦ヲ (*Parthos*)  
閉鎖港ナル *Agadir* ニ派遣シ仏國ハ独乙  
ト談判スル、必要ヲ感スルニ至リ独乙ハ先ツ  
「モロッコ」分割ニ干スル要求ヲ提出シ次ニ  
「モロッコ」ノ代償トシテ仏國 *Congo*、



沿岸ヨリ *Sanga* 河 = 至ルマテノ土地  
キビ白国領「コンゴ」殖民地 = 干シテ  
何スル結果ノ場合 = 於ケル領土取得ノ権利ノ  
誤差ヲ専ラセリ 独、過大ナル此ノ要求ハ独  
仏、談判ノ不調兩國間ノ危機ヲ悞レシメニカ  
英政府ハ「モロッコ」ノ問題 = 干シテ  
後援ヲナスノ態度ヲ示シ當時ノ首相 *Asquith*  
及ヒ *Lloyd George* ノ演説ハ重  
大ナル影響ヲ生マリ 幾何マナク独仏間ノ危  
機去レリ

十一月四日 = 至リ独仏間 = 二例ノ條約結ハ  
レソ「モロッコ」 = 干スル一條約中 = 於テ  
独乙カ「モロッコ」 = 於テ單 = 經濟上ノ利益  
ノミヲ目的トスルコトヲ宣言シ仏國ノ行動ノ  
自由殊ニ保護權ノ拡張及ヒ軍事占領ヲ認メタ  
リ 而シテ「コンゴ」 = 干スル一條約中 = 於  
テ仏國ハ独乙ニ独乙領 *Comeroun* ノ東  
及ヒ南 = 於ケル一帯ノ土地ヲ讓レリ

「モロッコ」 = 干スル独仏、外交問題ハ共  
ニ至リ結局ヲ告テ仏國ハ一九一三年三月ノ保  
護條約 = 依リ「モロッコ」ヲ以テ一保護國  
トナス = 至レリ

英佛ノ新交歡

一九一二年 = 於テ英國政府ハ独乙ト海軍ノ  
競争ヲナスコトヲ避ケンテ独乙ト内閣員  
ヲ派遣シテ独政府ノ非正式ノ談判セシメシコ  
トアリシモ成功セザリキ

コ、 = 於テ英仏間 = 海軍 = 干シテ協定行ハ  
レ共同艦隊ハ仏國ノ「イギリス」海峡北海及  
ヒ大西洋方面ノ防衛 = 當リ仏國ハ地中海 = 於  
テ艦隊ノ主力ヲ集中シテ此ノ方面 = 於ケル英  
國ノ利益ノ防衛 = 當ル = 至レリ

而シテ一九一二年十一月二十二日 = 至リ英  
仏ハ外交文書ヲ交換シテ兩國陸海軍需要ノ問  
ニ行ハレクル協議ハ兵力 = 依リ援助ヲ與フル  
ヤ否ヤ = 干シテ政府ノ自由ヲ制限スルモノ  
アラサルコトヲ明ク = シ又英兩國艦隊ノ配  
置ノ戰爭ノ際相協力スルノ約束ヲ基礎トスル  
モノ = アラサルヲ明ク = 同時 = 一方、政府カ  
第三國 = ヨリ自ラ挑発スルコトナクニテ攻撃  
ヲ受ケル = 至ルヲ恐ル、重大ナル理由存スル  
片ハ兵力的援助 = 依リ得ヘキヤ否ヤヲ知ル  
必要ヲ生スヘキヲ認メ一方ノ政府カ自ラ挑発  
スルコトナクニテ第三國 = 攻撃ヲ受ケル片ハ  
又ハ一敗ノ平和ヲ得カスヘキコトノ危ルヲ恐  
ルヘキ重大ナル理由ヲ存スル代直テ = 他方ノ  
政府ト共 = 攻撃ヲ防上ニ且ツ平和ヲ維持スル



タメニ行動ヲ共ニスヘキヤ否ヤ若ニ行動ヲ共ニスヘキトセハ如何ナル如置テ英内ニ行フヘキヤヲ協議スヘキモノナルコトヲ定ムルニ至レリ。

### 伊土戦争(一九一一年)

伊国ハソノ久ニク奎美セル如ク Tripoli  
ヲ攻ムルノ機ヲ選センコトヲ恨シ私ハ「エ  
ロツコ」事件ノ裁判中一九一一年九月ニ十七  
日ヲ以テ土国ニ對シテ突然最後ノ通牒ヲ提出  
シ二十四時間以内ニ答ヲ得サレハ Tri-  
poli 及ク Barka ヲ占領スヘキコト  
ヲ宣言セリ。

土国政府ハ期限内ニ答フル所アリシカ伊国  
ハ宣戦ヲナシ軍事行動ヲ開始シ十一月五日ニ  
ハ勅令ヲ以テ Tripoli 及ク Barka  
ノ併合ヲ宣言セリ。

一九一二年七月以後伊土兩國間ニ媾和談判  
行ハレ「バルカン」諸國カ同盟ニテ土国ニ對  
シテ開戦セントスルノ形勢急ナルヨリ土国ハ  
遂ニ Tripoli 及ク Barka ノ割讓ヲ諾  
シテ十月十五日ニ至リ媾和條約ノ調印アリタ  
リ。

### 土耳古ト「バルカン」列國トノ支那。

「バルカン」半島ニ於テ一九一一年十月ノ頃  
ヨリ「ブルガリア」、「セルビア」及ヒ「ギリ  
ニヤ」ノ三國ノ間ニ土国ニ對スル同盟ノ議行  
ハレ一九一二年三月頃同盟條約成リ「モンテ  
ネグロ」モ之ニ加盟シ遂ニ土国カ伯林條約ニ  
規定スル改革ヲ歐洲土国ニ於テ実行セサル莫  
ニ口實ヲ設ケテ土国ニ對シテ宣戦ヲナスニ決  
セリ。土国ハ九月ニ十一日ヲ以テソノ国内一  
般ニ行ハントスル行政改革案ヲ發表セルモ動  
搖セル諸民族ノ望ム所ハ自治ニアルヲ以テ單  
ニ行政改革ヲ実行スルヲ以テハ之ヲ満足セシ  
ムルコトヲ得ス。「ブルガリア」ノ同盟ニ近  
キ Katakona ニ於テ「ブルガリア」人ヲ  
虐殺セルノ報ニ接シテ土国カ歐洲土国ニ於テ  
改革ノ演習ヲ行ヒ第一予備兵ヲ召集セルヨリ  
「ブルガリア」ハ九月三日ニ動員ヲナシ「セ  
ルビア」「ギリニヤ」モ亦動員ヲ行ヒ十月一日  
ニハ土国モ動員令ヲ發シ「バルカン」ノ諸國  
ハ土国ニ對シテ聯合的トナル最後ノ通牒ヲ發  
シ以テ戦争状態ニ入ラントセリ。此國ノ首相  
Poincaré ハ「バルカン」半島ニ於テ近  
接ノ利害ヲ有スル墺露兩國カ完全ニ一致



スルコトヲ以テ大局ノ維持上緊要ナリトナシ  
「ロシヤ」ノ外相ノ同意ヲ得テ訓停案ヲ出セ  
リ。ソノ内容ハ第一ニ墮落兩國ハ列強ノ名ニ  
於テ土國ニ向ツテソノ曾テ柏林條約ニ於テ約  
セル改革ヲ Macedonia 及ヒ Albania  
ニ於テ迅速ニ実行スルコトヲ要求スルコト。  
第二ニハ列強ハ墮落兩國ノ勝敗如何ニ決ス  
ルモ領土上ノ現状維持ヲ互ニ相約スルコト  
ノニニアリキ。Poincaréノ案ニ對シテ  
修正ヲ加ヘテ後墮落兩國ハ之ニ基キ十月八日  
通牒ヲ「バルカン」ノ四國ニ送り土國ニ對シ  
テモ十月十日通牒ヲ提出セリ。

然ルニ十月八日ニ「モンテネグロ」先ツ事  
ヲ擧ゲ十月十三日、夜「ブルガリヤ」「セルビ  
ヤ」「ギリシヤ」ハ土國ニ對シテ同文ノ要求書  
ヲ提出シ土國ノ内政ノ改革ニ付キ土國ノ到底  
致ルコトヲ得サルヲ如キ要求ヲ提出セリ。

「ギリシヤ」ハ又別ニ抑留セル「ギリシヤ」  
商船ノ解放ニ付シテ二十四時間ヲ限リトスル  
最後ノ通牒ヲ又 Creteノ保合ヲ実行セ  
リ。土國ハ「バルカン」五國ノ同文ノ通牒ヲ  
以テ最後ノ通牒ト見做シ十月十八日ヲ以テ三  
國ニ内ツテ宣戰ヲ行ヒタリ。土軍ハ Mace-  
donia 及ヒ Thrace ニ於テ頻リニ破レ

Adonianople へ包圍ヲ發テ Saronika  
ニ「ギリシヤ」軍ノタメニ白領サレ Monas-  
tir 方面ニ於テモ土軍大敗セリ。土軍ノ戰  
敗ニヨリ列強ノ領土上ノ現状維持ノ宣言ハ之ヲ  
実行ニ得サルニ至リニカ十一月上旬ノ頃ヨリ  
「セルビヤ」カ「アルバニア」ヲ經テ「アド  
リアテツク」海ニ出ツル門ヲノ問題ク墮落  
「セルビヤ」トノ間ニ於テ墮落トナレリ。墮  
落國ハ「アルバニア」ノ自治及ヒ保全ヲ主張シ  
伊國ト妥協ノ上「セルビア」ニ對シテ警告ス  
ル所アリシカ「セルビア」ハ又「アルバニ  
ア」ニ出シテ Durazzo ヲ占領セリ。

「ロシヤ」ハ「セルビア」人ニ同情スルモ  
之ヲ助ケテニ州府合事件ノ如キ難局ニ陥ルヲ  
欲セザリキ。英國ニ於テ之等ノ問題ヲ直ニ  
別々ニ知置セント欲セス少頃、之ヲ併保シテ  
一般解決ノ法キ觀察兵ヨリ知置スルヲ付トス  
ルノ意見ヲ察セリ。土國ノ戰敗ノ際「コンス  
タンチノープル」危殆ニ類セルヨリ Poin-  
caré ハ「ロシヤ」英國兩國ト協議ニ十月三  
十一日訓停ニ付ニテ列強ノ間ニ協定スヘキ時  
機至レリトシ列強ノ地位ヲ強ムルタメ列強ノ  
利ヲ計ラサルヲ表白スル聯合宣言ヲ擧スルコ  
トヲ宣言セリ。三國協商ノ英仏露三國ハ同盟



軍ヲミテ戦勢ノ利益ヲ收メント欲セリ。之レ「ロミア」カ「セルヒヤ」民族ノ發展ヲ利益トシ英仏之「バルカン」半島ノ新勢力ヲヨリ抑遏ノ東進ヲ防クシムルヲ以テ得策トセリ。然レテ列強ノ私利ヲ計ラサルノ宣言ハ埃國ノ野ハヲ抑圧スル所以ナリトセリ。埃國ハ他國ノ提議ニ反対シ三國同盟ノ独伊ハ埃國ヲ助ケ三國同盟ニ属スル三國ハ十一月四日共ニ他國ノ提議ニ急ニ拒キコトヲ返答セリ。然ルニ土國ハ列強ノ「バルカン」諸國民ニ対シテ休戦ヲ欲フルタメニ干渉ヲ求メシカ他國ノ拒絶ニ會ヒ十一月十四日「ナルグリヤ」政府ト直接ニ休戦談判ヲ開キ「ナルグリヤ」政府カ同盟國ト協議シテ休戦ノ條件ヲ定メ談判一時破裂セシカ十二月四日休戦規約結ハレ倫敦ニ於テ媾和談判ヲ開クコトヲ約束セリ。

### 倫敦媾和破裂

倫敦ニ於ケル交戦國同ノ媾和會議ハ十二月十六日以來開催サレ同盟四國ノ媾和條件ニ対スル土國ノ討案出テ同盟四國ハ一九一三年一月三日 *Adrianople* *Crete* 及ヒ *Aegean* 海ノ諸島ニ対スル最後ノ通牒ヲ發シ一月六日土國ハ「アドリアノーブル」ノ割譲ヲ欲

メサル新提案ヲ出セリ。「バルカン」諸邦ハ此ノ提案ニ基キテ議スルヲ肯セサリニカ列強ノ勢力ニ依リ談判ノ破裂ヲ止サレタリ。倫敦ニ於テ別ニ開カレタル列強國ノ大使會議ハ列強ノ交戦國ニ與フヘキ通牒ヲ議定シ土國ニ「アドリアノーブル」ノ割譲ヲ新告シ *Aegean* 諸島ノ如クテ列強ニ委スヘキトセリ。土國ニ於テ一月二十日國民議會ヲ開キテ列強ノ通牒ニ同意スルコトヲ定メタリ。然ルニ青年土國古黨カ謀リテ政變ヲ生シ *Shefket Pascha* ノ内閣成リ *Aegean* 諸島ノ一部及ヒ「アドリアノーブル」ノ一半ノ維持ヲ主張スルコトニ決シ「バルカン」諸邦ノ代表者ハ一月三十日ニ媾和談判ノ破裂ヲ土國代表者ニ通告シ且ツ休戦ノ終了ヲ宣言セリ。

二月三日ヨリ同ヒ戦勢ヲ開始セルカ三月初旬 *Janiosa* 「ヤリニヤ」軍ノ占領ニ歸シ同月二十六日「アドリアノーブル」遂ニ陥落シ列強ハ三月二十二日ニ媾和條件ニ付スル同文通牒ヲ「バルカン」同盟四國ニ送リ之ヲ基礎トシテ商議ヲ開カンコトヲ提議セリ。コノ案ニ依リハ同盟國ト土國トノ双方ノ主張ノ中間ヲトリ *Enos Media* ヲ結合セル線ヲ以テ土國ノ境界線トシ「アルバニア」ノ組織



及ヒ境界線 = *Aegean* 諸島、島嶼問題ハ列  
國ニ依リ之ヲ決定スヘシトシ土國ハ *Crete*  
島ニ對シテ權利ノ全体ヲ拋棄スヘシトセリ  
然ルニ「モンテネグロ」ハ「アルバニア」ニ  
於テ *Scutari* ヲ得ント欲シ列強ノ平時封  
鎖ヲ「モンテネグロ」ノ沿岸ニ行フニ至レル  
ニモ拘ラス *Scutari* ノ占領ヲ行ヘルヨリ  
境國ハ強硬ニ抗議シ列強ニ「モンテネグロ」  
ニ通告スル所アリキ「モンテネグロ」モ遂ニ  
*Scutari* ヲ放棄スルニ至レリ

列強、媾和條件ニ付キ土國及ヒ「ブルガリ  
ヤ」ハ承認セシモ「セルビア」「ギリシヤ」「モ  
ンテネグロ」ノ三国ハ「アルバニア」ノ南部、  
境界 *Aegean* 海、諸島 *Scutari* ノ  
代償等、問題ニ付スル事項ヲ媾和條約中ニ明  
確ニ記入スルコトヲ主張セリ。然ルニ列國之  
ヲ巻レサルヨリ三国モ遂ニ強シテ五月三十日  
倫敦ニ於テ媾和條約締結カレタリ

「ロンドン」媾和條約

第二次「バルカン」戦争(内輪採ヨリ)

此ノ條約ニ依リ *Thrace Macedonia*  
*Albania Crete* 及ヒ *Aegean* 海ノ

諸島ノ土國ノ統治ヲ奪ヒ「アルバニア」及ヒ  
或東洋以外ノ土地ハ對土同盟國ノ得ヘキ所ト  
ナレリ

媾和成立後相内盟シテ土國ト戦ヘル「バル  
カン」ノ内盟四國ノ間ニ占領地分割ニ付シテ  
紛争生シ一方ニ於テ「ブルガリア」地方ニ於  
テ「セルビア」「ギリシヤ」「モンテネグロ」ト  
ノ間ニ新タニ戦争ヲ生セリ。是レ第一回「バ  
ルカン」戦争ナリ

「ルーマニア」ハ土國ト内盟四國トノ間ニ第  
一次「バルカン」戦争ニ於テ尙外中立ヲ守リ  
同盟四國ノ勝利ヲ得テ「ブルガリア」ノ領土  
カ増加カレタル場合ニ於テ中立ヲ守レル報償  
トシテ *Sibistolia* ノ方面ニ於テ同境  
ノ改正ヲ「ブルガリア」ニ求メントシテノ戦  
争ノ終リノ頃「ブルガリア」ト談判シ「ロシ  
ヤ」ノ調停ニ依リ「ロシヤ」ノ都ニ於テ *Si-*  
*histopia* ノ市及ヒソノ附近ノ小部ノ土  
地ヲ得ルコトニ守マリシカ「ルーマニア」ハ  
之ニ満足セザリキ

同盟四國ノ間ニ於テ「アルバニア」及ヒ  
「マセドニア」ノ問題ニ基キテ紛争生セリ  
「アルバニア」ハ境、伊「セルビア」ノ三国  
ノ共ニ希望セル所ナルカ境伊同盟ハ一九〇七



年ノ頃ヨリ決定ヲナシ「アルバニア」ノ独立  
ヲ計ラントセリ。之レ「セルビア」人ノ之ヲ  
得ルコトヲ妨クントセルナリ。一九一二年ノ  
「ブルガリヤ」及ヒ「セルビア」間ノ土同領  
分割條約ニ於テ「マセドニア」ノ大部分ハ之  
ヲ「ブルガリヤ」ニ屬セシムルコト、セルク  
之レ「セルビア」ノ土地ヲ「アルバニア」ニ  
於テ得ヘキコトヲ予想セルナリ。然ルニ「ア  
ルバニア」ノ土地ハ埃及ヒ伊ノタメニ「セル  
ビア」カ之ヲトルコトヲ妨ケラル、ニ至リシ  
ヨリ「セルビア」ノ土地ノ分割ニテ不平  
ナキヲ得テ、而シテ「ブルガリヤ」ノ望メル  
所ノ *Monastir* 及ヒ *Salonika* ハ  
各々「セルビア」及ヒ「ギリシヤ」ノ手コア  
リキ。

一九一三年ノ始メ「セルビア」及ヒ「ギリ  
シヤ」ハ「ブルガリヤ」ニ對シテ同盟ヲ結ヘ  
リ。之レ「マセドニア」ニ於テ占有スル土地  
ノ領有ヲ相互的ニ担保スルモノナリ。

「ブルガリヤ」ハ第一「バルカン」戦争ニ於  
テ塚クアナスコト最モ多クシテ收得ノサナカ  
ラントスルコトヲ積リモカ及ヒ埃及ヒ「ブル  
ガリヤ」ヲ使喚スルノ態度ニアリキ。

コ、ニ於テ「ブルガリヤ」ハ「マセドニア」

ヲ得ルタメニ一九一三年六月二十九日「ギリ  
シヤ」及ヒ「セルビア」ニ對シテ宣戰ヲナク  
シテ攻撃ヲ開始セリ。然ルニ軍利アラズニテ  
七月六日ヨリ「ブルガリヤ」軍ハ退却ヲ始メ  
七月十日ニ至リ「ルーマニア」モ亦宣戰シテ  
「ブルガリア」ニ侵入シテ「ルーマニア」ノ  
干渉ニヨリ戦争ハ終局ヲ告ケタリ。八月三十  
日ニ休戦結ハレ「バルカン」半島ノ五ヶ國ノ  
代表者カ *Bucarest* ニ會合セリ。「ブル  
ガリア」ハ「セルビア」及ヒ「ギリシヤ」ト  
講和シソノ要求スル條件ヲ容レサルヲ得サリ  
キ。「ギリシヤ」ハ *Salonika* ニ加ヘ  
*Caevolla* ヲ得ス *Crete* 島タリ。

「セルビア」ハ *Monastir* ニ至ルマテ  
ノ領地ヲ占メ「ルーマニア」モ南方ノ土地  
ヲ收メ土同モ亦「アドリアーノール」ノ地ヲ回  
復スルコトヲ得タリ。

一九一三年ノ「バルカン」ニ于スル決定ハ  
「ブルガリヤ」ノ不平ヲ抱カサルヲ得サル所  
ニシテ独塊ニ至リテマ之ヲ喜ハス「セルビア」  
人ノ勢力カ「バルカン」ニ加ハリ土同及ヒ  
「ブルガリヤ」モ独塊ニ對シテ不協ノ念ヲ抱  
キ又独ノ波斯湾頭マラソノ勢ヲ及ホサント  
スルノ政策ノタメニ「バルカン」半島ヲ境國



ノ勢力ノ下ニ置キ「ダーダネルス」海峡ヲ土  
国ノ勢力ノ下ニ存セントスルノ計画ヲ破綻ヲ  
生スルニ至レリ。 埃國モ *Bosnia*、「セル  
ビヤ」人ノ反抗ヲ悉ルニ至レリ。 コレニ  
於テ埃國ノ外交上ノ威信ヲ回復スルノ謀ヲ進  
ラザルヲ得サルニ至レリ。 一九一三年、秋  
埃國ハ伊國ニ對シテ共ニ「セルビヤ」人ヲ攻  
撃スルノ提議ヲナセルト云フコトナリ。 而シ  
テ埃國ハ「バルカン」半島ニ於テ土國「ブル  
ガリア」及ヒ「ルーマニア」ヲ連スル所ノ同  
盟ヲ作ラントスル。 一九一四年ニ起レル世界  
的ノ大戦ハ一方ニ於テ一九〇五年ノ「モロッ  
コ」事件。 一九〇八年ノ「バルカン」事件。  
一九一一年ノ「モロッコ」事件ト共ニ埃國ノ  
歐洲ニ於ケル外交上ノ卓越勢力ヲ回復シ世界  
的政策ヲ進歩セントスルノ一般的ノ企圖ニ基  
キ又他方ニ於テ波斯灣頭マテ其ノ勢力ヲ伸ハ  
サントスルノ特別的政策及ヒ之カ支障タルヘ  
キ *Bucarest* 條約ノ破棄ノ企圖ニ關係  
スル所アリト云ハサルヘカラス

### 歐洲大戦ノ原因(一九一四年)

一九一四年、六月ニ十八日埃國ノ皇儲  
*Frang Ferdinand* 大公及ヒソノ妃

カ *Bosnia* / *Serajeva* = 於テ暗  
殺カレシコトハ埃國ノ行動ノ機会ヲ供ヘタリ。  
埃國ハ「セルビヤ」ニ對シテ七月ニ十三日不  
意ニ四十八時間ヲ期限トセル苛酷ナル最後ノ  
通牒ヲ提出シ其ノ中ニ於テ

(1) 埃國ノ代表者カ埃國排斥運動ノ鎮定ニ協  
カスルコトヲ認メ

(2) 埃國ノ官吏カ大公及ヒ其ノ妃ノ暗殺ノ陰  
謀ニテスル裁判上ノ審査ニテ係スルヲ認ム  
ベキノ要求ヲナシ「セルビヤ」ハ他ノ苛酷ナ  
ル条件ヲ要求スルモ此ノニ依リテ同法ニ反シ  
主權ノ侵害ヲ至スルノ惧レアルノ故ヲ以テ之  
ヲ無條件的ニ認ルニ躊躇スルヤ埃國ノ公使  
ハ直ニ *Belgrade* ヲ去リ七月ニ十八日  
「セルビヤ」ノ「ローマ」駐在代理公使カ伊  
國ノ外相ヲ經由シテ埃國ニシテ如何ナル形式  
ニ於テ埃國ノ代理人カ「セルビヤ」國內ニ於  
テ干渉スルキヤニ付キ説明ヲナストキハ「セ  
ルビヤ」ハ尚最後ノ通牒全体ヲ承認スルノ余  
地アルノ意ヲ埃政府ニ通セルニ埃政府ハ之ニ  
百ヲ倍サスニテ十八日夕「セルビヤ」ニ對  
シテ宣戦セリ。

埃ハ「ロシヤ」ノ戦争ニ加ハルコトヲ予期  
セザリシ如キモ「ロシヤ」ハ「バルカン」ニ



於ケル「スラブ」人、保護者トシテ人種上、  
歴史上ノ係連キ「セルビヤ」ノ境同ノタメニ  
疎闊セラル、ヲ坐視スルニ悉ヒサリキ。

英、首相 *Sir Edward Grey* ハ平和  
的解決ヲ告クルタメ先ツ他ノ強國ヲ聯合シテ  
境同ノ兩國ニ圧力ヲ加フヘキコトヲ極ニ提議  
セルニ独政府ハ境同ト「セルビヤ」ト、同ノ  
事件ハ他國ノ干渉スヘキ所ニアラストシ「ロ  
シヤ」ノ「セルビヤ」ノタメニ干渉スルヲ妨  
グルタメニ圧力ヲ加フルコトヲ諾スルモ境同  
ニテ「セルビヤ」ニ干シテ行動、自由ヲ得セシ  
メント欲セリ。七月二十六日「グレイ」ハ更  
ニ提議ヲナシ事件ニ直接ノ干渉ナキ四強國ノ  
協議ヲナシテ解決ヲ求メ其ノ同境同「セルビ  
ヤ」ノ三國ハ凡テノ軍事行動ヲ停止スヘシト  
セリ。然レ此境同ノ同ノ紛争ヲ國際法廷ニ於  
テ裁断セシメントスルニ等シトナシテソノ提  
議ヲ容ル、コトヲ拒絶セリ。

仏、駐英大使 *Cambon* ハコノ英外相ノ  
言ニ對シテ、如キ非常ノ際ニ形式、如何、如  
キハ論議スヘキニアラストニ若シ平和的解決  
カ速クニ見出サレサルニ於テハ事件ノ責任ハ  
概シテ存スヘキコトヲ説ケルモ英外相ハ言ヲ  
左右ニ托シテ依然悉セサリキ。

露ハ境同ニ對シテ直接談判ヲ行フノ提議ヲナセ  
ルモ境同ニ之ニ悉セサリキ。七月二十八日境同  
外相 *Berthold* 伯ハ「セルビヤ」ニ對  
スル通牒ヲ基礎トスル談判ニ干シテ露ト協議  
スルコトヲ大快ニ禁ミタリ。カクニテ境同「セ  
ルビヤ」ニ宣戦セル以後ニ於テ露ヲシテ止ム  
ヲ得ス境同ト戰フニ至ルヲ防クタメニ三國ノ提  
案ニ對シテ而シテ皆同意側ノ二國ニ依テ拒絶  
サレテ成立セサリキ。ソノ第一ハ「サー エ  
ドワード グレイ」ノ提議ニ依テ境同ニ加フル  
ノ条件ノ下ニ「ロシヤ」ニ圧力ヲ加フルノ提  
議。第二ハ英外相ノ事件ニ直接干渉ナキ四強  
國ノ會議ヲ開クノ提議。第三ハ「ロシヤ」ノ  
境同ト直接ノ談判ヲ行ハントスル提議即ケ之  
ナリ。境同ノ宣戦後四十八時間内ニ於テ「ロシ  
ヤ」ハ境同ノ勦滅ニ於テソノ軍隊ノ一部ニ  
勦滅ヲ命セルカ平和的解決ヲ致スタメ種々ノ  
提議ヲナシ七月二十九日露政府ハ英スハ仏ノ  
平和提議ノタメ提出スヘキ凡テノ手段ニ賛成  
スヘキコトヲ宣言シ同日外相 *Sazonov* ハ  
若シ境同ニテ境同「セルビヤ」同ノ向類カ  
歐洲的事件ノ性質ヲ具フルニ至レルコトヲ認  
メテソノ最後通牒ノ中ヨリ「セルビヤ」ノ主  
権ヲ害スヘキ諸英ヲ除クコトヲ諾スルコトヲ



宣言セハ獨ハソノ軍事的行動ヲ停止スヘキコトヲ約スヘシト云ヘルカ他外相ハ獨同政府ト謀ル所ナクニテカ、ル提案ヲ獨同、答ル、能ハサル所トシテ之ヲ拒絶セリ。七月三十日以前ニ於テ獨同ハ共ニ一歩ヲモ譲ラサル態度ヲ持セルカ七月三十日「ロシヤ」ノ一部分的動員ヲ行ハス翌日獨同、全部的動員ヲ行ヘルニ對シテ「ロシヤ」ハソノ軍隊全部、動員及ヒ艦隊、動員ヲ命スルヤ獨同ハ「ロシヤ」ノ干渉、意思、真面目ナルヲ悟リ一般の戰爭ニ付キ危殆、愈ヲ抱クニ至リ「ロシヤ」ニ對スル態度ヲ急變ニ「ロシヤ」ノ一部分的動員、行ハレニ際已ニ「ロシヤ」ト、談判ヲ行フコトヲ諾シ前、拒絶ハ緩解ノ結果ナリト稱シ獨同ハ始メテ大ナル讓歩ヲナスニ至レリ

獨同「セルビヤ」間ノ爭議ニ関シテ審議スル事ヲ認メタリ。七月三十一日「ロシヤ」ノ全部的動員行ハル、ヤ獨同ハ益々平和的態度ヲ示シ七月二十三日、「セルビヤ」ニ對スル最後通牒ノ突實ヲ審議スルコトヲ明カニ承諾スルノ意思ヲ示スニ至レリ。加之英及ヒ露、外相、提出シタル所ノ次、基礎ニ於ケル諸列強國同訥停ヲ答ルコトヲ承諾セリ。即チ獨同カ *Belgrade* ヲ占領セル後ハソレ以上

「セルビヤ」國內ニ進軍セサルコトヲ約束シ「ロシヤ」モ凡テノ戰備ヲ停止スルコトヲ約束スルコトニナリ

斯ク獨同カ平和的態度ヲ不セルニ當リ独ハ始メテ直接ニ事件ニ干渉シ来リ獨同、平和的談判、進行ヲ妨クルニ至レリ。当初ニ独カ真ニ獨同、如ク「ロシヤ」ノ戰爭ヲ避ケサルノ態度ヲトルコトヲ計ラサリシモハナルヤ否ヤヲ斷言ニ得サルモ「ロシヤ」ノ動員、頗ヨリ強硬、態度ヲ不シ七月三十一日ノ午後二時独帝ハ露帝ニ電報ヲ送り「ロシヤ」ニシテ戰備ヲ止メサレハ戰爭起ルヘク「ロシヤ」ハ之ヲ責任ヲ負ハサルヘクラスト云ヘリ。同時ニ独政府ハ *Kriegsgefahrzustand* ヲ宣言シソノ夜半独ハ露ニ最後通牒ヲ送り「ロシヤ」カ獨、方面ト独、方面トヲ分クス凡テ戰備ヲ停止スヘク十二時間内ニ返答ヲ與フヘキコトヲ求メタリ。獨ノ動員セルニ對シテ「ロシヤ」カ獨、方面ニ於テモ凡テ戰備ヲ止ムルコトヲ求ムルハ甚クニキヲ要求スルニトナカレズ短時間内ニ返答ヲ迫レルコトハ「ロシヤ」カソノ威信ヲ損スルコトナクニテ謀ルヲ得サル所ト思惟カレ加之主タル紛爭同タル獨露間ニ談判行ハレントスル際側面ヲリニテ



提出スル最後通牒ヲ答ル、コトハ「ロニヤ」  
ノ威信ヲ害スルコト甚クシキモノトナサレ  
「ロニヤ」ハコノ最後通牒ニ對シテ何等ノ返答  
ヲ與ヘザリキ。八月一日独ハ露ニ對シテ宣戦  
セリ。独ハ露ヲ先ツ動員セルコトニ重キヲ置  
キ内戦ノ責任ヲ露ニ嫁セントヌシカ露ニ於テ  
ハ動員ハ戦争ヲ意味スルモノニアラサルヲ以  
テ之ヲ壞ノ方面ニ於テ止ムヘキノ無理ノ要  
求ヲ合メル最後通牒ヲ提出シテ戦争状態ノ發  
生ヲ促カセル独ノ内戦ノ動機ニテスル責任ヲ  
負フヘキモノトセリ。独ニハ外交上ノ威信ニ  
依リ露ノ勢力ヲ挫ク能ハサルヲ見テ戦争ニ依  
リ同ノ目的ヲ達セントスルニ至リタルモノ  
ナリ。

独露ノ内戦ハ露ハ同盟ノ干渉上独ハ内戦  
ヲ致セリ。独カハニ對シテ中立ノ地位ヲ守ルヘ  
キカヲ同フニ當リハ政府ハ其ノ利益ノ余スル  
所ヲナスヘキヲ独大使ニ答ヘタリ。ハハソノ  
軍隊ヲ境界線ヨリ十基米ノ後方ニ退カンメテ  
自ラ攻撃ヲ加フルコトナキヲ明クニセリ。独  
ハ先ツハニ對シテ攻撃ヲ内セント欲スルヲ以  
テ八月二日其ノ軍隊ヲシテハ同ノ国境ヲ越エ  
シメタリ。而シテ其ノ夕ニ独大使ハ其ノ旅券  
ヲ要求シ且ツ宣戦ノ宣言ヲハ同政府ニ交付セ

リ。宣戦ノ理由トスル所ハハ同ノ航空機ヲ独  
ハ領土上ニ於テ攻撃行為ヲ行ヒタリト云フニ  
アリ。

独ハ英ヲシテ戦争ニ加ハラサシムメント欲  
セリ。七月二十九日 *Bethmann Hollweg*  
ハ柏林駐在ノ英大使 *Groschen* ニ告クルニ  
英國ノ戦争ニ加ハラサレハ独ハ其ノ土地ヲ奪  
フコトナキヲ以テセリ。然ルニハ同殖民地ニ  
付テハ約スルコトアルヲ得ザリキ。又和同ニ  
付キソノ中立ヲ尊重スヘキコトヲ説キシク自  
耳義ノ中立ニ至リテハハ同ノ行動計画ヲ知ラ  
ル。マアハ如何ナル保障ヲモ與ヘ得ストシ只  
ソノ独ノ敵ニ<sup>與</sup>セザル以上ハソノ領土保全ヲ激  
勇終了後ニ於テ尊重サルヘニト云ヘリ。英政  
府ハ固ヨリ斯クノ如キ条件ヲ以テ中立ヲ欲セ  
ザルコトヲ明クニセリ。而シテ独ニテ八月三  
日自耳義ノ中立ヲ侵スニ及ヒ英國ノ態度ハ決  
然セリ。

一九一四年七月三十一日歐洲的戦争ノ避ク  
ヘカラサルヲ見テ英外相ハ同時ニ仏及ヒ独ノ  
兩國ニ對シテ他方ヲ侵サレル場合ニ於テ自耳  
義ノ中立ヲ侵スコトナキヲ復タリ。ハハ直  
チニ中立ヲ侵スコトナキヲ答ヘシモ独政府ハ  
之ニ對シテ明答ヲ與フルトヲ避ケタリ。



八月二日独乙政府ハ白耳義ニ對シテ領土通過ノ意アルヲ告ケタリ 仏國ノ軍隊タ向耳義ノ通過ヲ計畫セルコトヲ以テソノ口實トヒリ 八月三日午前七時白耳義ハ独乙軍隊通過ノ要求ヲ拒絶スルノ返答ヲナシ同日独乙兵ノ同境ヲ越ヘタルヨリ白耳義王ハ英國ノ干涉ヲ求メタリ 英ニ於テ八月四日英國ハ白耳義ノ中立尊重ヲ独乙ニ求メ若シ午前零時迄ニ満足ナル返答到着セザルハ英國ハ條約ヲ尊重セシムルノ手続ヲ採ルヘントスヘリ 独乙ハ要求ヲ容レサルヨリ八月四日午後十一時ヨリ英國ハ独乙ニ對シテ文戰状態ニ入レリ

### 單獨媾和成立 (一九一四年)

一九一四年九月五日英仏露三国ノ間ニ新媾和ニ関スル倫敦宣言結ハレ一九一五年十月十九日我國之ニ加盟シ同年十一月三十日ニ伊國之ニ加盟スルニ至レリ 我國ハ日英同盟ノ關係上一九一四年八月十五日独政府ニ對シテ通牒ヲ發シ我國及シ支那海洋方面ヨリ独乙國艦艇ノ即時ニ退去スルコトノ退去スルコト能ハサルモハ直クニ之カ武裝ヲ解除スルコト 及シ膠州灣租借地全部ヲ終局ニ於テ支那ニ還附スルノ同約ヲ以テ一九一四年

九月十五日ヲ限リ無償且ツ無條件ヲ以テ我國領土ニ交附スルコト要求ニ於テハ此ノ通牒ニ對シテ答アル所ナクテソノ以テ我國ハ同日二十三日独國ニ對シテ宣戰ヲ行ヒタリ

伊國ハ三国同盟ニ属セルモ今回ノ大戦ヲ以テ獨國ノ侵略的行動ニ出ルモノトナシ同盟義務ノ發生ヲ認メス 独國ハ伊ヲ味方トシテ戰争ニ加ハラシムルコトヲ得サルヲ見テソノ中立ヲ維持セシムルニ欲シ「バルカン」方面ニ於テ獨國ノ領土ノ増加ニ對スル代償ノ問題ニ付テ伊國ト談判スル所アリシカ伊國ハ協商側ト談判ヲナシ遂ニ一九一五年五月二十四日ヲ以テ獨國ニ對シテ宣戰シ協商側ニ加ハルニ至レリ

土國及シ「ブルガリヤ」ハ独國側ニ味シテ戰争ニ加ハリ「モンテネグロ」「セルビア」「ルーマニア」ハ協商側ニ味シテ戰争ニ加入レリ

北米合衆國カ独ノ無制限的潜水艦戰ヲ宣言ニ對シテ一九一七年二月三日独ニ對シテ國交斷絶ヲ宣言シ次テ四月六日ニ於テ独國ニ宣戰セル以後ニ及シ協商側ニ加ハレル國ハ五強國ヲ併セテ二十七國ニ及ヘリ



媾和開始 (一九一八年)

戦争中戦場側ハ 西軍「モンテネグロ」「セルビア」ヲ蹂躪シ 仏國ハ 東北部「ロニヤ」ノ西部ヲ占領シ「ルーマニヤ」ヲ亦侵襲スルニ至リシカ一九一八年九月二十九日ニ至リ「ブルガリヤ」カ降参シ十月三十一日ニ至リ「トルキ」カ降参シ十一月四日ニ至リ。協商側ノ 強國ハ 米英法 國ノ交渉ニ基キ 平和條約ヲ締結スルタメニ 休戦ヲ欲シニ 許諾スルコトヲ認メ十一月十一日ノ休戦規約成リシカ 對独手宛 和約案ヲ議スルタメニ 協商側ノ 諸國ノ 代表者 巴黎ニ會シ (Allied and Associated Powers) 媾和予備ノ 會議ヲ組織シ (La Conference de Preliminaires de la paix) 一九一九年一月以テ 最高會議、總會議及ヒ 許多ノ 委員會ヲ設ケテ 對独條件並ニ 世界永久平和ニ 關係スル 國際聯盟及ヒ 國際労働組織ニ 関ニテ 審議シ、結果トシテ 成レル 對独平和條約ハ 五月七日ニテ Versaillesニ於テ 全權ニ 交附シ 口頭ノ 談判ヲ行ハス 吾面ノ 交渉ニ 依リ 議論ノ 末僅少ノ 訂正ヲ加ヘテ 六月二十八日 Versaillesニ於テ 平和條約ノ 調印ヲ了セリ

對独平和條約ハ *Saent German*ニ於テ 交附サレ 署名サレタリ。

平和條約中 眞ニ 對独媾和條件ヲ以テ 同スヘキ 部分ト 在 界永久平和ノ 基礎ヲ 確立スルヲ 目的トスル 部分ト 存ス。 眞ニ 對独媾和條件ヲ以テ 同スヘキ 部分ニ 干シテ 第一ニ 注意スヘキハ 領土分割ノ 主義ナリ。

今回ノ 平和會議ニ 於テ 歐洲ノ 土地ノ 分合ニ 付キ 同 民主主義ノ 主張原則トシテ 採用サレタルヲ 見ル。 *Poland Czechoslovakia Serb Croat Slovene* 國ノ 如キ 新國ノ 同境ノ 概シ 同 民主主義的ノ 境界線ニ 依リ 定メラレ *Schleswig*、「デンマーク」ニ 入り「アルサス、ローレン」ノ 地ニ 入り 埃ノ 土地、伊國又ハ「ルーマニヤ」ニ 入レルニ 大體ニ 於テ 同 民主主義的ノ 境界線ニ 依リ 定メ、ト 認メ 得ヘシ。 但ニ 歐洲ニ 於テ 同 民主主義的ノ 主張ノ 外 人民ノ 必要トスル 經濟的 通路ヲ 確ムルノ 主義カ「ポーランド」ノ *Danzig*ニ 於ケルカ 如クニ 認メ ラレタリ。 然レ 海外ノ 領土ニ 干シテ 之ヲ 聯合側ノ 五強國ニ 讓ルコトトナルニ 國際聯盟規約ニ 依リ 住民ノ 福祉及ヒ 發達ヲ 計ルタメ、 名義ノ 下ニ 之等ノ 土地ヲ 國際聯盟ノ 下ニ 入ル 特別國ノ 委任統治ノ 下ニ



置クヘキコトヲ突メタリ。而シテ實際ニ於テ  
戦争中独ノ海外領土ヲ占領セル国ハ其ハ土地  
ニ向スル委任國トナラントスルナリ

媾和條件ニ付キ第一ニ注意スヘキハ償金ノ  
問題ナリ。英仏ノ主張行ハレヌニテ軍費ノ賠  
償ヲ行ハシメサルコト、シテ戦争開始ノ責任  
カ独及ヒリノ同盟國ニ存スルコトヲ認メシメ  
テ戦争ニ依ル同盟及ヒ聯合國政府及ヒ人民ノ  
損害ヲ賠償セシムルコト、セリ。(並当リ六百  
億「マーク」ヲ支出セシメ將來ニ於テ余カア  
リト認メル時聯盟委員会ニ於テ更ニ四百億「マ  
ーク」ヲ出サシム)。

外交史

終リ

(非 賣 品)

大正十一年十一月一日

印 刷

大正十一年十一月五日

發 行

東京市麹町區飯田町六丁目一番地

編 譯 兼  
發 行 者

前 田 政 五 郎

東京市麹町區飯田町六丁目一番地

印 刷 所

北 光 社

電話九段 二六一九番

振替東京 二五一五番



14

683

終